大阪府埋蔵文化財調査報告2006－7

寺田遺跡

2007年3月

大阪府教育委員会

寺　田　遺　跡

２００７年3月

大阪府教育委員会

a．縄文・弥生時代の石器
（スクレイパー・磨製石剣）

b．河川・竪穴住居内出土滑石製品・碧玉未製品
（有孔円板・紡錘車・管玉・臼玉）

c．河川内出土須恵器
（大型無蓋高杯・無蓋高杯）

はじめに

寺田遺跡は、大阪府和泉市の南西部に位置します。遺跡の周辺は、都市化が進む大阪府下にあってもまだ田園風景が広がり、起伏に富んだ古くからの地形が良く残されています。

本遺跡は、平成14年9月、府営和泉寺田住宅の建て替え工事に先だって実施された試掘調査によって、新たに発見・確認された遺跡です。平成16年、同工事に先だって発掘調査が実施されました。

発掘調査の結果、古墳時代前期から後期の集落跡と朝鮮半島系土器や鍛冶関連遺物を含む河川跡を検出し、遺跡の年代や構造を明らかにすることができました。本遺跡の南600ｍには和泉を代表する前期古墳である国史跡摩湯山古墳があります。このような寺田遺跡の発掘成果は、当地に前期古墳が出現する歴史的な背景を解くひとつの資料になると思われます。

今回の調査に際して、ご協力いただきました地元の方々をはじめ、関係各位、諸機関に厚く感謝いたしますとともに、今後とも文化財保護行政に変わらぬご理解とご協力をお願いいたします。

平成19年３月

大阪府教育委員会
文化財保護課長　丹上　務

例　言

1．　本書は、大阪府教育委員会が大阪府住宅まちづくり部の依頼により、府営和泉寺田住宅建て替えに伴い実施した和泉市寺田町所在、寺田遺跡の発掘調査（04025）報告書である。

2．　現地調査は、大阪府教育委員会文化財保護課調査第二グループ技師杉本清美が担当し、同グループ主査藤沢眞依の指導を受け、平成16年８月～平成17年３月に実施した。遺物整理は、（平成17年度）調査管理グループ技師林日佐子、同西川寿勝、同藤田道子、（平成18年度）調査管理グループ主査三宅正浩、技師藤田道子を担当者として実施した。

3．　本書の作成にあたっては、鍛冶関連資料について、北野　重（柏原市教育委員会）、真鍋成史（交野市教育委員会）両氏の指導及び教示を得た。

4．　本調査の写真測量は、株式会社アスコに委託して実施した。なお、撮影フィルムは同社において保管している。また、遺物写真の撮影は有限会社阿南写真工房に委託して実施した。遺構の写真撮影については、担当者が行なった。

5．　本書は杉本が編集し、１・２・３区西半部・５区を杉本が、３区東半部・４区を藤沢が執筆した。また、鍛冶関連遺物については、調査第二グループ主査小山田宏一が執筆した。

6．　発掘調査・遺物整理及び本書の作成に要した経費はすべて、大阪府住宅まちづくり部が負担した。

7．　本報告書は300部作成し、一部あたりの印刷単価は1,383円である。

凡　例

1．　本文・挿図に用いた標高は東京湾平均海水面（T.P.値）を示す。また、座標値は世界測地系平面直角座標(第Ⅵ系)によるもので、方位は座標北を示す。

2．　土色については、基本的に小山正忠・竹原秀夫編『新版土色帖』日本色彩研究所　1992年版に準拠した。

3．　遺構番号については、調査区・遺構の種類に関わらず検出順に通し番号を付けた。調査中に誤って番号が重複したものについては、枝番（－Ⓐ．－Ⓑ等）を付けた。また、掘立柱建物のように複数の遺構でひとつの遺構を形成するものについては、検出順に掘立柱建物－１、掘立柱建物－２のように番号を付けた。建物の建て替えと考えられるものについては、枝番（－①．－②等）を付けた。

4．　遺物については、挿図、図版の番号を一致させた。

本 文 目 次

はじめに
例言・凡例
第１章　調査に至る経過……1
　１．調査の経緯……1
　２．調査方法……2
第２章　位置と環境……3
　１．地理的環境……3
　２．歴史的環境……3
第３章　調査結果……5
　１．試掘調査……5
　２．基本層序……6
　３．５区の調査……11
　４．１区の調査……14
　５．２区の調査……44
　６．３区の調査……52
　　１）３区西半部の調査……52
　　２）３区東半部の調査……55
　７．４区の調査……56
　８．河川内出土遺物……60
　９．鍛冶関連資料……76
第４章　まとめ……81
　掲載遺物対照表……83

表 目 次

表１　掘立柱建物一覧表……23
表２　竪穴住居一覧表……37
表３　鉄滓計測表……77
表４　鞴羽口計測表……78
掲載遺物対照表……83～87

挿図目次

第1図　調査地位置図　1
第2図　地区割図　2
第3図　周辺の遺跡　4
第4図　調査区位置図　5
第5図　基本層序　7
第6図　上面遺構全体図　8
第7図　遺構全体図　9～10
第8図　5区　遺構平面図　11
第9図　5区　遺構断面図　12
第10図　5区　大溝断面図　12
第11図　5区　遺構内出土遺物　13
第12図　1区　遺構断面図　16
第13図　1区　遺構平面図　17
第14図　1区　掘立柱建物平・断面図①　19
第15図　1区　掘立柱建物平・断面図②　20
第16図　1区　掘立柱建物平・断面図③　21
第17図　1区　建物ピット断面図　21
第18図　掘立柱建物配置図　22
第19図　1区　竪穴住居1480平・断面図　25
第20図　1区　竪穴住居1480内出土遺物　26
第21図　1区　竪穴住居内出土遺物　27
第22図　1区　竪穴住居1382平・断面図　28
第23図　1区　竪穴住居1281平・断面図　29
第24図　1区　竪穴住居1499・1504平・断面図　30
第25図　1区　竪穴住居1499・1504内出土遺物　31
第26図　1区　竪穴住居1511平・断面図　32
第27図　1区　竪穴住居1511内出土遺物　33
第28図　1区　竪穴住居1489平・断面図　34
第29図　1区　竪穴住居571断面図　34
第30図　1区　竪穴住居内遺構出土遺物　35
第31図　竪穴住居配置図　36
第32図　1区　遺構平・断面図　39
第33図　1区　遺構内出土遺物　41
第34図　1区　河川1500・下層河川・溝1910・1911断面図　42
第35図　1区　河川上面出土遺物　43
第36図　2区　上面溝断面図　44
第37図　2区　焼土坑・土坑平・断面図　46
第38図　2区　焼土坑・土坑内出土遺物　47
第39図　2区　掘立柱建物平・断面図　49
第40図　2区　建物ピット断面図　49
第41図　2区　井戸平・断面図　50
第42図　2区　溝断面図　50
第43図　2～3区　河川1694・1692・溝1693断面図　50
第44図　2区　遺構内出土遺物　51
第45図　3区　掘立柱建物平・断面図　52
第46図　3区　建物ピット断面図　52
第47図　3区　井戸平・断面図　53
第48図　3区　遺構内出土遺物①　54
第49図　3区　遺構内出土遺物②　55
第50図　4区　土層断面模式図　57
第51図　河川1500出土遺物①　60
第52図　河川1500出土遺物②　61
第53図　河川1500出土遺物③　62
第54図　河川1500出土遺物④　63
第55図　河川1500出土遺物⑤　64
第56図　河川1500出土遺物⑥　65
第57図　河川1500出土遺物⑦　66
第58図　河川1500出土遺物⑧　67
第59図　河川1500出土遺物⑨　67
第60図　河川1500出土遺物⑩　68
第61図　河川1694出土遺物①　69
第62図　河川1694出土遺物②　70
第63図　河川1694出土遺物③　71
第64図　河川1694・1692他出土遺物　72
第65図　河川1694出土遺物④　73
第66図　石器　74
第67図　石製品・石器　75
第68図　鉄滓　76
第69図　轡羽口　78
第70図　鋳造鉄斧・軽石　79
第71図　轡羽口の縦断面模式図　79

図版目次

巻頭図版　a．縄文・弥生時代の石器
　　（スクレイパー・磨製石剣）
　　b．河川・竪穴住居内出土滑石製品・碧玉未製品
　　（有孔円板・紡錘車・管玉・臼玉）
　　c．河川内出土須恵器
　　（大型無蓋高杯・無蓋高杯）

図版表紙　河川内出土遺物
図版1　調査区全景
図版2　5区他　遺構
図版3　1区　遺構
図版4　1区　遺構
図版5　1区　遺構
図版6　1区　遺構
図版7　2区　遺構
図版8　2区　遺構
図版9　1区・3区　遺構
図版10　3区東半部　遺構
図版11　4区　遺構
図版12　5区・1区　出土遺物
図版13　1区　出土遺物①
図版14　1区　出土遺物②
図版15　1区　出土遺物③
図版16　1区・2区　出土遺物
図版17　2区　出土遺物
図版18　2区・3区　出土遺物
図版19　3区・河川内出土遺物
図版20　河川内出土遺物①
図版21　河川内出土遺物②
図版22　河川内出土遺物③
図版23　河川内出土遺物④
図版24　鉄滓・轡羽口
図版25　軽石・鉄斧・石材
図版26　石器・石製品

第1章　調査に至る経過

1．調査の経緯

寺田遺跡は、和泉市寺田町に所在する府営和泉寺田住宅地内に広がる遺跡で、東西約260ｍ、南北約160ｍを測る。平成14年度に実施された府営和泉寺田住宅建て替えに先立つ試掘調査で、新規発見遺跡として周知された。

大阪府建築都市部（現、住宅まちづくり部）は、老朽化の著しい木造平屋建ての府営住宅を住宅環境の改善と土地の有効利用のため、中・高層住宅に建て替える計画を推進している。本府教育委員会はこうした計画を受け、平成14年９月に府営和泉寺田住宅地内において試掘調査を行った結果、遺跡であることが確認されたため、同年度以降に発掘調査を実施することになった。

今回の調査は、府営和泉寺田住宅建て替えに伴う第１期の発掘調査で、住棟、施設棟、防火水槽などの関連施設を１区（1,108㎡）・２区（870㎡）、住宅外周道路及び歩道設置部分を３区（535㎡）・４区（329㎡）・５区（196㎡）とした。調査面積は3,038㎡である。

発掘調査は平成16年８月９日に着手し、平成17年３月25日に現地調査を終了した。現地調査期間内には、航空測量を平成16年11月17日、12月21日、翌年２月23日の３回実施した。平成17年２月26日には、寺田遺跡発掘調査現地説明会を開催した。雪降る寒さの中、地元住民及び府民の方々に発掘調査の成果を公開し、多数の参加を得た。現地調査に引き続き、図面、遺物、写真等の整理作業を行い、平成19年３月にすべての作業を終了した。

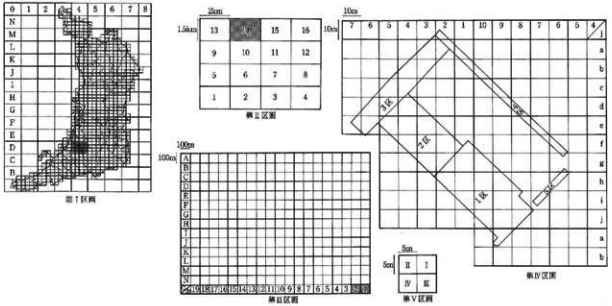
第１図　調査地位置図

2．調査方法（第２図）

寺田遺跡の周辺では、海岸線に平行して真北から約45度西に傾く条里型地割がみられる。寺田遺跡は、その条里区画に沿って北東から南西を長辺とする東西約260ｍ、北西から南東方向に南北約160ｍを測る。調査時において、調査区内で簡易的に方位を表現すべく、遺跡の長辺方向（北東から南西）を東西方向、短辺方向（北西から南東）を南北方向とした。ゆえに調査時の「北」は方位上の「北西」を指す。また、調査結果における方位の表記についても同様に、「北」は方位上の「北西」を示す。

調査では、作業用地と掘削土砂の仮置き場を確保するため、調査区を分割して行った。まず、住宅外周道路及び歩道設置部分の南半部（５区・４区南半部）と住棟、施設棟の南半分（１区）について調査を行い、続いて住宅外周道路及び歩道設置部分の北半部（４区北半部・３区東半部）、さらに住棟、設備棟、防火水槽などの関連施設（１区・２区・３区西半部）の調査を実施した。

調査区の地区割りは、世界測地系平面直角座標（第Ⅵ系）を基準としている。大阪府教育委員会、㈱大阪府文化財センターの発掘調査において、調査区の位置が共通して表現できるよう、大阪府発行１万分の１の地形図を基として４段階の区分を実施している。第Ⅰ区画は南西隅を基準として、縦軸をＡ～Ｏ、横軸を０～８に区画したもので、縦６km、横８kmの範囲となる。第Ⅱ区画は第Ⅰ区画の南西隅を基準として縦４×横４の16等分したもので、縦1.5km、横2.0kmの範囲となる。第Ⅲ区画は第Ⅱ区画を100ｍ方眼で区画し、北東隅を基準として横軸を１～20、縦軸をＡ～Ｏに区分したものである。第Ⅳ区画は第Ⅲ区画を10ｍ方眼で区画し、北東隅を基準として縦軸ａ～ｊ、横軸を１～10に区分したものである。例えば今回の調査区地点の一つは、Ｄ４－14－Ｏ１－g10などと表記される。さらに、遺物の取り上げ等に際して補助的に、第Ⅴ区画を５ｍ方眼で区画し、北東区画をⅠ、北西区画をⅡ、南東区画をⅢ、南西区画をⅣとしている。



第２図　地区割図

第2章　位置と環境

1．地理的環境（第1図）

寺田遺跡の所在する和泉市は、大阪府南部の泉州地域に位置する。寺田遺跡は、槙尾川と松尾川に挟まれた和泉中央丘陵先端部で、西側に面する松尾川が開折したなだらかな中位段丘上に立地する。標高は約28mである。

内陸部で南北に長い和泉市は、北部の狭い平野部、中部の広い丘陵部、南部の山間部で形成され、南端部は和泉山脈を挟んで和歌山県と隣接する。山間部から北西方向に続く丘陵部は、市域を縦断する槙尾川と松尾川によって信太山丘陵、和泉中央丘陵、和泉西部（東山）丘陵とに三分される。谷部では、平坦な河岸中位段丘・低位段丘がよく発達し、狭隘な盆地を成している。槙尾川と松尾川は平野部に至って牛滝川と合流し、さらに大津川となり大阪湾に注いでいる。平野部周辺では、海岸線に平行して南北から約45度西に傾く条里型地割がみられる。

和泉市周辺の泉州地域は、気候区分的には瀬戸内気候に属し、年間を通じて降雨水量が少ないことから溜池が多くみられる。しかしながら近年では、大規模な宅地開発や道路整備などの影響で丘陵部の地形が変わるなど、都市化が進んできている。

2．歴史的環境（第3図）

寺田遺跡が位置する丘陵部から平野部にかけての地域では、数は少ないものの旧石器時代から人類の生活の痕跡が残されている。旧石器時代の国府型ナイフ形石器が採集された遺跡として、伯太北遺跡、大園遺跡などが知られている。縄文時代では、池上曽根遺跡で縄文時代草創期の有舌尖頭器が採集されたほか、箕土路遺跡（中期）、豊中遺跡（中・後期）、板原遺跡（後期）、府中遺跡（中～晩期）、伯太北遺跡（後期）、四ツ池遺跡（後・晩期）、和気遺跡（後～晩期）、伽羅橋遺跡（晩期）などが知られている。

泉州・和泉地域における弥生時代の開始は早く、四ツ池遺跡や池上曽根遺跡などでは弥生時代前期から後期に至るまで継続して大規模な集落が営まれた。弥生前期の遺跡では、四ツ池遺跡、池上曽根遺跡、鳳東町遺跡、池浦遺跡などがある。中期になると遺跡の数は増加し、和気遺跡、府中遺跡、大園遺跡、箕土路遺跡、下池田遺跡などが現れる。寺田遺跡に近接する和気遺跡では、弥生時代中期の集落跡が確認されている。池上曽根遺跡など弥生時代中期後半頃に拠点集落として最盛期を迎えた後は一気に規模が縮小する。それに伴い、中期末から後期初頭にかけて、丘陵上に高地性集落が出現する。中期後半には寺田遺跡の東方に位置する丘陵上に観音寺山遺跡、後期には信太山丘陵上に惣ケ池遺跡の二大高地性集落が現れる。観音寺山遺跡では、100戸余の竪穴住居が濠によって囲まれた大集落が営まれた。しかしながら、観音寺山遺跡、惣ケ池遺跡などの高地性集落は弥生時代の終わり頃に突如姿を消す。平野部には、府中遺跡、豊中遺跡、七ノ坪遺跡、和気遺跡などの庄内式・布留式と呼ばれる古式土師器が出土する中小集落遺跡が相前後し

て現れる。後期になるとさらに遺跡数は増加する。

弥生時代後期末から古墳時代初頭の集落跡として、西大路遺跡、下池田遺跡、古墳時代の集落跡では、七ノ坪遺跡、豊中遺跡、府中遺跡、和気遺跡、大園遺跡などがある。古式土師器を持つ集落が平野部に次々に現れたのち、丘陵上に古墳が造られる。信太山丘陵北端では景初三年銘の銅鏡を出土した４世紀後半頃の前方後円墳の黄金塚古墳がある。また、松尾川左岸の東山丘陵先端部では前方後円墳の摩湯山古墳が造られる。松尾川を挟んで寺田遺跡の南側に位置する。摩湯山古墳は、丘陵部の先端をカットして築かれた全長約200ｍの前方後円墳で、形態や埴輪等の出土遺物などから４世紀後半に比定されている。前期古墳の中では全国的にも最大規模のひとつで、当地域を考える上で非常に重要な位置を占める。摩湯山古墳の西側には陪塚の馬子塚、さらに、摩湯山古墳からやや遅れて築かれたと推定される貝吹山古墳、鉄刀・鉄剣を出土した風吹山古墳などがある。古墳時代中期では、西方に久米田池古墳群が存在する。また、観音寺山丘陵やその南に連なる和泉中央の丘陵上には、古墳時代後期頃の群集墳が数多く築かれる。

光明池周辺の丘陵一帯は、古墳時代後期に日本最大の窯業地帯であった陶邑窯跡群の一角にあたり、大規模な須恵器生産が展開する。５～12世紀頃まで生産が行われ、1000基余の窯跡がある。開析谷に小さな谷が入り組む複雑な地形が須恵器窯の大規模開発に適していたと考えられている。

奈良時代には和泉国府が設置され和泉国の中心地として栄え、また、白鳳期建立の15ケ寺が知られている。信太寺（上代観音寺跡）、和泉寺跡、坂本寺（禅寂寺）、池田寺、後に和泉国分寺となった安楽寺などがある。槙尾川流域の狭い谷平野部に寺院が密集しており、莫大な運営経費を支えるだけの経済力を有する氏族・地方豪族が点在していたものと推定される。

泉州地区で多くみられる溜池には、築造が中世以前に遡るものもある。隣接する岸和田市には奈良時代の僧行基が開発・整備を行った久米田池などがある。『法隆寺伽藍縁起並流記資材帳』にみえる軽部池は、浅い谷地形を利用して造られた池で、周辺に荘園が築かれていたとされている。この他、鎌倉時代の僧重源が築造したと伝えられる谷山池などが知られる。近接する和気遺跡の寺門地区では、平安時代末から鎌倉時代（12～13世紀）の条里型地割に則った区画溝で仕切られた屋敷地を有する建物跡が確認されている。

第３図　周辺の遺跡

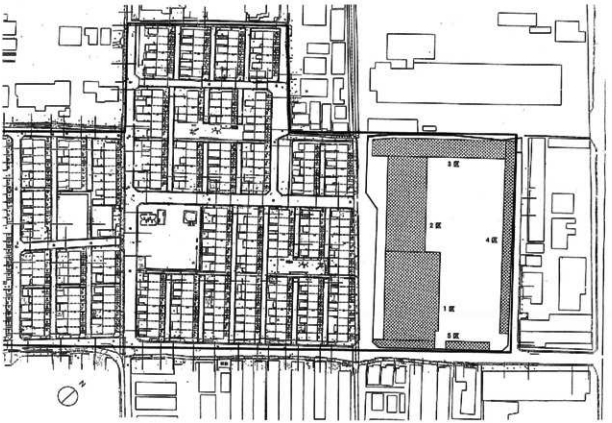
第3章　調査結果

1．試掘調査

和泉市寺田町所在の府営和泉寺田住宅では、大阪府建築都市部住宅整備課（現、住宅まちづくり部住宅整備課）が、建物の老朽化に伴う府営住宅の建て替え事業を計画している。事業に先立ち、用地内における埋蔵文化財の有無を確認すべく、同課の依頼をうけて平成14年９月９日から11日に、本府教育委員会文化財保護課技師大薬康宏が試掘調査を実施した。

試掘調査は、住宅地内の公園・駐車場などの空き地に５ヶ所の調査区（２ｍ×２ｍ）を設置し、遺構の検出及び遺物の有無の確認に努めた。５ヶ所の調査区のうち１調査区を除く他の調査区から遺物（土師器・須恵器・瓦器・瓦等）が出土した。特に調査地の府道側（北東側）では、遺構や遺物を多量に含む流路跡が検出された。この結果、調査地及び周辺に古墳時代から中世にわたる未周知の遺跡が存在することが確認された。

試掘調査の結果を受けて、府営和泉寺田住宅建て替え予定地内を範囲とする遺跡は、平成14年に寺田遺跡として周知されるに至った。



第４図　調査区位置図

2．基本層序（第５図・図版２）

今回の調査地は、寺田遺跡の東半部で丘陵部側に位置する。なだらかな丘陵上に位置するが、現況では丘陵先端部に向けて南側から北側へ低くなり、丘陵部側の東側から松尾川側の西側に向けて僅かに低くなる様相を示す。

土層の基本的な堆積状況は、概ね８層に大別することができる。

第１層　住宅造成時の盛土層。厚さは0.5～0.7ｍを測る。

第２層　旧耕土及び床土層。厚さは0.15～0.25ｍを測る。検出高は南側でT.P.+28.1ｍ、北側でT.P.+27.5ｍを測る。

第３層　灰黄褐色粘質シルトを基本とする層で、砂質土となる部分もみられる。南側では層厚0.05～0.2ｍであるが、北側では0.4ｍ以上を測る。検出高は南側でT.P.+27.9ｍ、北側でT.P.+27.5ｍを測る。土師質土器、瓦器等の細片など中世から近世にかけての遺物を含む。

第４層　灰黄色粘質シルト或は白灰色シルトを基本とする層である。層厚は0.15～0.2ｍを測る。上面で鋤溝を検出。調査区全域で確認される層である。検出高は南側でT.P.+27.7ｍ、北側でT.P.+27.2ｍを測る。瓦器、青・白磁、須恵器、土師器などの細片が出土した。古代末から中世代に想定される。

第５層　黄褐色粘質シルトを基本とする層で、層厚は0.1～0.2ｍを測る。上面で第４層を埋土とする区画溝、溝などの遺構を検出した。検出高は南側でT.P.+27.6ｍ、北側でT.P.+27.1ｍを測る。須恵器・土師器片などが多くみられた。

第６層　灰黄褐色砂混じり粘質シルトを基本とする層で、層厚は0.1～0.25ｍを測る。古墳時代の遺構のベース層である。調査区の南側で厚くみられるが、北側では薄くなる。南側の検出高は南側でT.P.+27.5ｍ、北側でT.P.+26.9ｍを測る。２層ないし３層に細分することが可能である。２区の北端から３区西半部では、第11層黒褐色粘質シルト（下層に砂混じる）となる。基本的な灰黄褐色土がやや濃い茶色を示すものとみられる。須恵器、土師器などが数多く出土した。

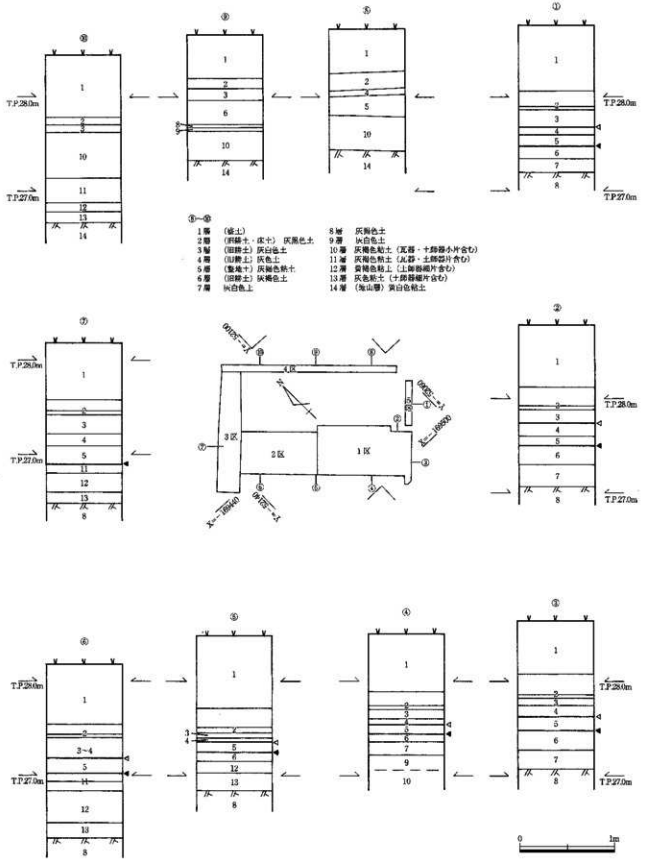
第７層　褐灰色砂混じり粘質土を基本とする層で、砂、小砂礫を含む地山直上層である。層厚は0.15～0.2ｍを測る。検出高はT.P.+27.3ｍを測る。調査区の南側で顕著にみられるが、北側では谷状に深くなり、第12層黄灰色砂質シルト、第13層黒褐色シルトとなる。層厚は約0.5ｍを測る。上面で下層河川を検出した。

第８層　灰褐色砂混じり粘質土、シルトを基本とする層で、部分的に砂礫を多く含む層がみられる。遺構・遺物が確認されなかったことから、調査区内での地山層に相当する。検出高はT.P.+27.05～27.2ｍを測る。地山は北側で一気に深くなる様相を示し、T.P.+26.3ｍを測る。

第９層　青灰色砂質土。河川内の堆積土に相当する。

第10層　灰黄褐色砂質土。河川内の堆積土に相当する。

なお、４区（⑧～⑩）については、第３章　７．４区の調査（第50図）に詳細を記載している。



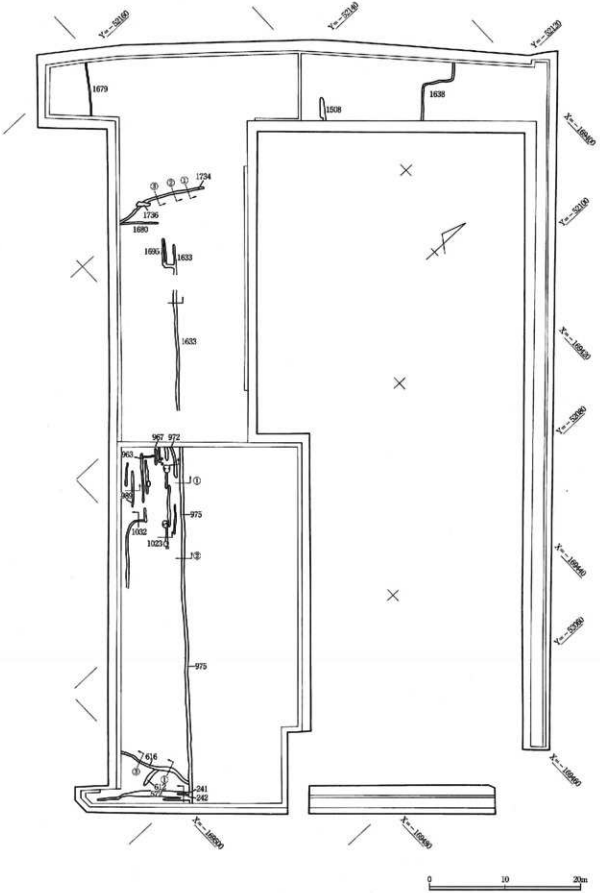
①〜⑦

1層	(盛土)	8層	灰褐色土
2層	(旧耕土・床土)	9層	白色土
3層	(旧耕土) 灰白色土	10層	灰褐色粘土（瓦器・土師器小片含む）
4層	(旧耕土) 灰色土	11層	灰褐色粘土（瓦器・土師器片含む）
5層	(亀裂土) 灰褐色粘土	12層	黄褐色粘土（土師器細片含む）
6層	(旧耕土) 灰褐色土	13層	灰色粘土（土師器細片含む）
7層	白色土	14層	(地山層) 黄白色粘土

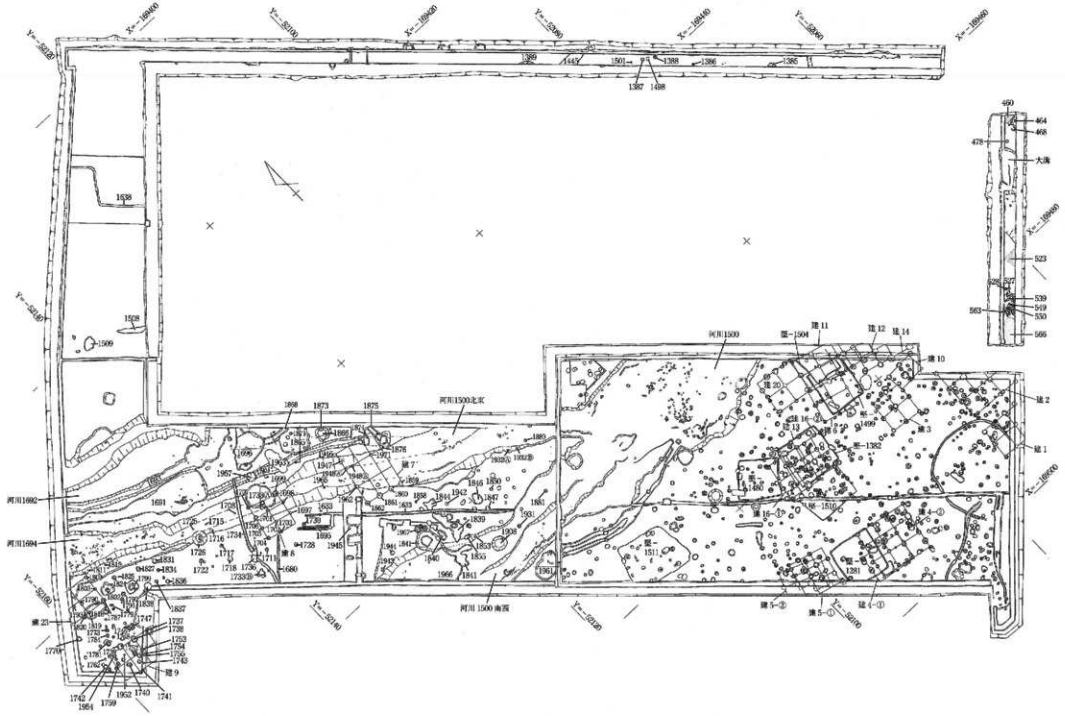
①〜⑦

1層	(盛土)	5層	(地山層) 灰褐色砂混じり粘質土・シルト
2層	(旧耕土・床土)	6層	青灰色砂質土
3層	灰黄色砂質シルト（中世遺物含む）	7層	褐灰色砂質土（下層河川堆積か）
4層	灰黄色粘質シルト	8層	黒褐色粘質シルト（下層砂混じる）
5層	黄褐色粘質シルト	9層	黒灰色砂質シルト
6層	灰黄褐色砂混じり粘質シルト	10層	黒褐色シルト
7層	褐灰色砂や混じり粘質土	11層	灰黄褐色砂質シルト

第5図　基本層序


Y=-52160
Y=-52140
Y=-52120
1679
1508
1638
X=-169400
1734
1736
1680
1695
1633
1633
Y=-52100
X=-169420
Y=-52080
967
972
963
975
1032
1023
975
X=-169440
Y=-52060
616
241
242
X=-169460
X=-169500
X=-169480
0
10
20m

第６図　上面遺構全体図



第７図　遺構全体図

3．5区の調査（第8図・図版2）

5区は調査区南辺の道路拡幅及び歩道設置部分で、南北幅3.5m、東西延長約56mである。しかしながら、5区の中央部付近で埋設物が確認されたため、東半部（東西約25m）と西半部（東西約30m）に分断された。これに伴い、東半部は5区として先行して調査を実施し、西半部は1区と同時に調査を実施することとなった。調査時には、東半部を「5区東」、西半部は「5区西」と呼称していたが、本書では、5区東半部を「5区」、5区西半部を「1区」に含み報告する。

5区の調査では、柱穴、竪穴住居、大溝などを検出した。

住宅造成時の厚い盛土（第1層）の下で、旧耕土層（第2層）が顕著に残っている。さらに、中世相当の土師器、瓦器などの細片が混じる黄褐色砂質層、灰オリーブ色小礫混じり粘質シルト層（第3層）を除去すると、ピットを配する遺構面を確認することができた。

ピット（第9図）

調査区の西方部及び東端部で幾つかのピットを検出した。ピットの検出径は0.25～0.4m、検出面からの深さは0.15～0.25mを測る。平面形は円形ないし楕円形を示す。埋土は黄褐色砂質シルトである。検出高はT.P.+27.70mを測る。

調査区の西方部では、南北方向にP539・P528、東西方向にP550・P563が並ぶ。掘立柱建物を構成する柱穴列に成ると考えられるが、建物を復元するには至らなかった。P549からは、須恵器杯身（1）が出土した。

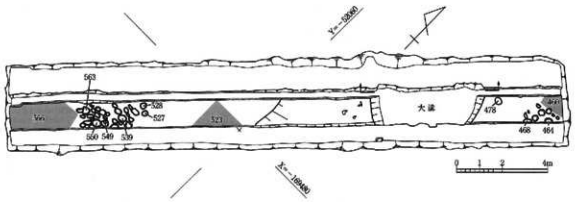
調査区の東端部では、P464・P478などの柱穴がみられた。埋土内に須恵器片、土師器甕片などが僅かにみられたが、図化できなかった。

竪穴住居

調査時には、土坑や落ち込み状遺構としていたが、側溝の土層断面観察、検出面における土質の状況等から竪穴住居と判断するに至った。

竪穴住居460（第9図・図版2e.）

5区東壁断面で土坑状の遺構としていたが、土層断面及び平面観察の結果、竪穴住居と考えられる。平面上には西隅の一部がかかるのみで、住居の大部分は調査区の東側に広がる。住居南辺



第8図　5区　遺構平面図

の状況から方形状を成すとみられる。主軸の方向はN－5°－Eを示す。埋土は、検出面から約0.2mを測る。壁溝が周囲に巡ると推定される。埋土中からは極少量であるが、須恵器片、土師器片などが出土した。

竪穴住居566

5区西壁断面で土坑状の遺構としていたが、土層断面及び平面観察の結果、竪穴住居と考えられる。平面上には北東隅の一部が確認されるのみで、住居の大部分は調査区外に広がる。住居北辺及び西辺の状況から隅丸方形状を成すとみられる。検出面からの深さは約0.15mを測る。埋土中からは須恵器、土師器などの細片が出土した。

竪穴住居523（図版2 g.）

5区調査区中央部で、焼土層が広がる落ち込み状遺構としていたが、土層断面及び平面観察の結果、竪穴住居と考えられる。平面上には北西端の一部がかかるのみで、住居の大部分は調査区の南側に広がる。住居北辺、西辺の状況から方形状を成すとみられる。主軸の方向はN－8°－Eを示す。面上には炭・灰などの焼土が層状に存在することから、焼失住居であると考えられる。埋土中からは極少量であるが、須恵器、土師器などの細片が出土した。

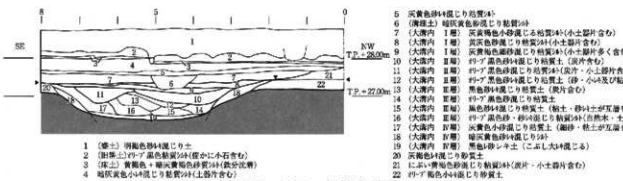
確認された竪穴住居は、5世紀後半頃のものと推定される。

大溝（第10図・図版2）

第5層の黄褐色小砂混じり粘質シルト層を掘削すると、調査区中央部からやや東側で、南北方向に延びる自然河川を検出した。検出時に溝としたため「大溝」と表記する。大溝の検出幅は東西方向約4m、最深部は検出面から約1.2mを測る。

大溝の埋土は、大別すると次のようになる。

第9図　5区　遺構断面図



第10図　5区　大溝断面図

Ⅰ層（7.8.9） 灰黄褐色砂混じり粘質シルト層。大溝が徐々に埋まり浅い窪地状を形成していたとみられる。廃棄されたものか須恵器杯身（3・4）、土師器、製塩土器（17）などが出土。

Ⅱ層（10.11.12） オリーブ黒色（灰褐色）砂レキ混じり粘質土層（炭化物が混じる）。溝の下層が堆積土で埋まり、浅く狭いながらも溝として機能していたものと推定される。須恵器杯身（2）、高坏（5・6・8・9）、甕（12・13）、土師器把手、甕片、製塩土器などが数多く出土。

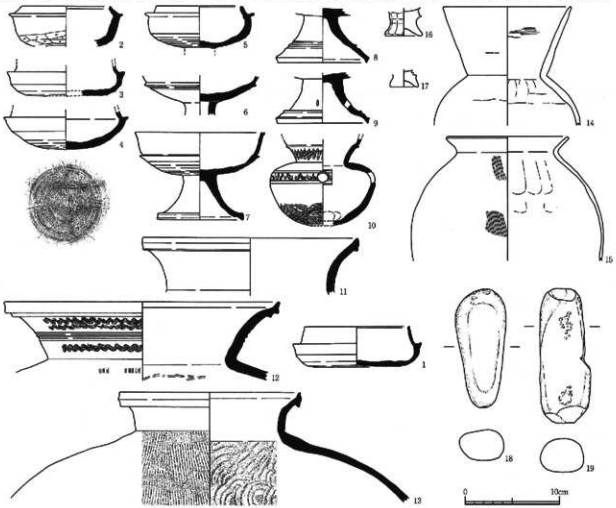
Ⅲ層（13.14.15.16） 黒色ないしオリーブ黒色粘質土層（砂・砂礫土と粘土が互層を成す）。自然河川として機能していた時期に相当する。土師器甕片、長頸壺（14）、鞴羽口（761・762・766）、鉄滓、叩き石（18・19）などが出土。

Ⅳ層（17.18.19） 暗灰黄色砂礫土ないし砂礫混じり土層。土師器甕片、製塩土器などの遺物を含む。

大溝の左岸は緩やかな勾配で広い浅瀬を形成する（図版2h）。検出幅は東西方向に4～5mを測る。浅瀬部分から土師器甕（15）などが出土した。

大溝出土遺物（第11図・図版12）

大溝内からは、須恵器杯身（2～4）、高坏（5～9）、甑（10）、甕（11～13）、土師器長頸壺（14）、製塩土器（16・17）、鞴羽口（761・762・766）、鉄滓、叩き石（18・19）などのほか、遺物が数多く出土した。大半はⅠ層～Ⅲ層からである。2は外面底部に静止ヘラ削りを施す。9は脚部



第11図　5区　遺構内出土遺物

に細長い楕円形の透かしを有する。この他に実測できなかったが、高坏、椀などTK73に相当する初期須恵器が幾つかみられた。大溝は4世紀代から機能し、5世紀中頃には埋まったものと推測される。

小結

5区では、大溝のほか包含層から初期須恵器、土師器、弥生土器片、製塩土器片、焼土塊など多くの遺物が出土した。土師器では、甕、塙、把手、小型丸底壺などがみられたが、細片が多く図化できるものは僅かであった。須恵器とほぼ同量の遺物量を有する。出土遺物から、4世紀末頃から5世紀後半頃を主とする遺物が多くみられた。

大溝は、出土した遺物から4世紀末頃から5世紀初頭に隆盛であったが、徐々に粘土が堆積して幅員も狭く浅い溝状となり、5世紀中頃には浅い窪地状を呈していたと推定される。大溝の周辺で確認された竪穴住居は、出土遺物から概ね5世紀中頃から5世紀後半頃に相当する。また、掘立柱建物を成すと推定されるピットからは、6世紀初頭頃の遺物が出土している。これらのことから、大溝の機能時である5世紀中頃には竪穴住居を主とする集落がみられ、大溝の機能が廃する5世紀中頃から、掘立柱建物を伴う集落が形成されたものと考えられる。なお、大溝の西南側で遺構が多く展開しており、大溝の北方（4区）では遺構が一気に少なくなる様相を呈する。

4．1区の調査（第6・7・13図）

1区は調査域の南西部に位置する。府営住宅の住棟・施設棟に相当する調査区で、南北約45m、東西約26.5mの長方形状を示す。1区の南側には、本来の5区西半部が設定されていたが、1区に含めて調査を実施した。1区では当初の予想より遺構が多く、遺構面も複数面確認されたことから、遺構面調査を継続して実施した。

1区では、上面及び下面で遺構を検出した。上面では、条里方向を示す鋤溝や区画溝、溝などを検出した。下面では、掘立柱建物、建物ピット、井戸、土坑、溝、竪穴住居、河川跡、更に下層河川跡を検出した。下面では、調査時に下層河川跡以外は一面として検出したが、遺構の検出状況や土層観察の結果、さらに細分することができる。

1）上面の遺構（第6図・図版1b.）

第3層灰黄褐色粘質シルト層を取り除くと遺構を確認した。1区西北部では、鋤溝跡、北西部から南半部では溝及びピットを検出した。1区は南側から北側に向かって緩やかに傾斜し低くなる。後世の開削により上面は削平を受け、掘方の深いものしか遺存していなかった。上面の検出高は南端でT.P.+27.60m、北西部でT.P.+27.45mを測る。

鋤溝（溝972・967・963・989・1032・1023）（第12図・図版1b.）

1区の西北部で南北方向に延びる鋤溝跡を検出した。上層の削平により不規則な繋がりを示す。溝の検出幅は0.2～0.35m、深さは0.02～0.05mで、ごく浅い椀型を示す。埋土は褐灰色砂混じ

り粘質シルトである。埋土内からは、須恵器片、土師器片などが出土したが細片のため詳細は不明である。鋤溝跡は、当地周辺の条里型地割に沿うものである。

溝975（第12図・図版3）

調査区1区から2区に至り縦断方向に真っ直ぐ延びる溝である。検出幅は約0.4m、深さは約0.1mで浅い椀型を示す。1区内での延長は約26mを測る。検出高は南端ではT.P.+27.5m、北端ではT.P.+27.35mで、西北側に向かって緩やかに低くなる様相を示す。埋土は、灰黄色粘質シルトである。埋土内からは、僅かであるが須恵器杯蓋（131）、土師器などの細片が出土した。溝975の延伸方向は、真北から約45°西に傾向する当地周辺の条里型地割の方向に相当する。当地周辺の条里地割の起源がいつ頃なのか不明であるが、埋土内出土の遺物から古墳時代末から中世代に相当するものと考えられる。

溝241・242・溝572（第12図）

調査区南側で溝975から西側に平行して真っ直ぐ延びる復条の溝である。検出幅は、北側の溝242が約0.3m、南側の溝241が約0.40mで、深さは0.15mを測る。西側への延伸途中で単条（溝572）となる。溝572は調査区の西端で細く浅くなり、末端は確認できなかった。溝241・242及び溝572は、第4層の黄灰色或は白灰色粘質シルトを埋土とする。埋土内からは、僅かであるが土師器甕、高坏、有孔土器（132）、須恵器杯、甕などの細片が出土した。

溝616（第12図）

溝572に近接して北側をやや弧を描きながら西北から東方向に延びる溝である。検出幅は0.3～0.5m、深さは約0.15mを測る。埋土は、にぶい黄褐色土に炭や炭化物を含む黒褐色粘質シルトである。埋土内からは、土師器甕、壺などの細片が出土した。

ピット

調査区南側で多くのピットを検出した。南北方向に真っ直ぐ延びる溝975の上面から掘り込むピット（P1392）などもみられた。検出径は0.1～0.25mを測る。ピット内には径0.1m程の木柱が遺存していた。埋土は灰黄褐色粘質シルトである。掘立柱建物を構成する建物ピット、或は旧耕土に伴う杭列であると考えられるが、建物プランを確定するには至らなかった。

2）下面の遺構（第7・13図）

上面遺構面から第4層灰黄色粘質シルト層、第5層黄褐色粘質シルト層を取り除くと数多くの遺構を確認した。下面では、掘立柱建物、建物ピット、井戸、土坑、溝のほか、竪穴住居、河川跡などを検出した。さらに、河川跡の下層で古い河道（下層河川）を確認した。下面では、調査時に遺構を一面として検出したが、遺構の前後関係がみられ細分することができる。検出高は南端でT.P.+27.50m、北西部でT.P.+27.20mを測る。

掘立柱建物（第13・18図・表1）

調査区内で検出されたピットは、複数の掘立柱建物の柱穴と考えられる。すべての建物プラン

の判別には至らなかったが，24棟を検出した。

掘立柱建物１・２・３（第14図・図版３）

調査区の東南部で検出した。２間×２間、３間×３間を示す総柱建物である。柱穴は隅丸方形状、或は円形状を呈する。建物の方位は、N－５°－Eである。遺物は、土師器高坏片、須恵器杯片などが出土したが，図化できなかった。出土須恵器は５世紀中頃に比定される。

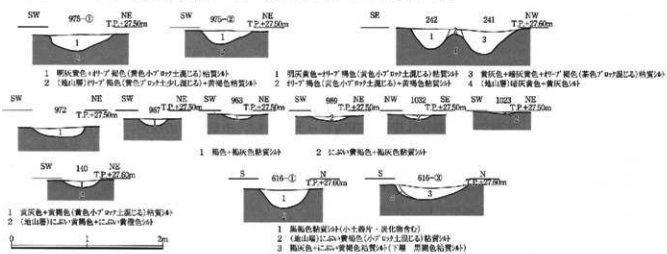
掘立柱建物４－①・４－②（第15図）

調査区の南西部で検出した。掘立柱建物４－①は、３間×２間の建物で、方位は、N－５°－Eである。柱痕が明確なピット（P711・663・1369・1364）では柱径0.15ｍ程を示す。また、柱を抜き取った痕（P1262・1369）や、ピット内に石が入るもの（P1265）などがみられた。掘立柱建物４－②は、３間×３間の総柱建物で、方位は、N－10°－Eである。遺物は、土師器高坏、甕片、須恵器甕、壺などが出土したが，図化できなかった。出土遺物から、５世紀後半頃に比定される。

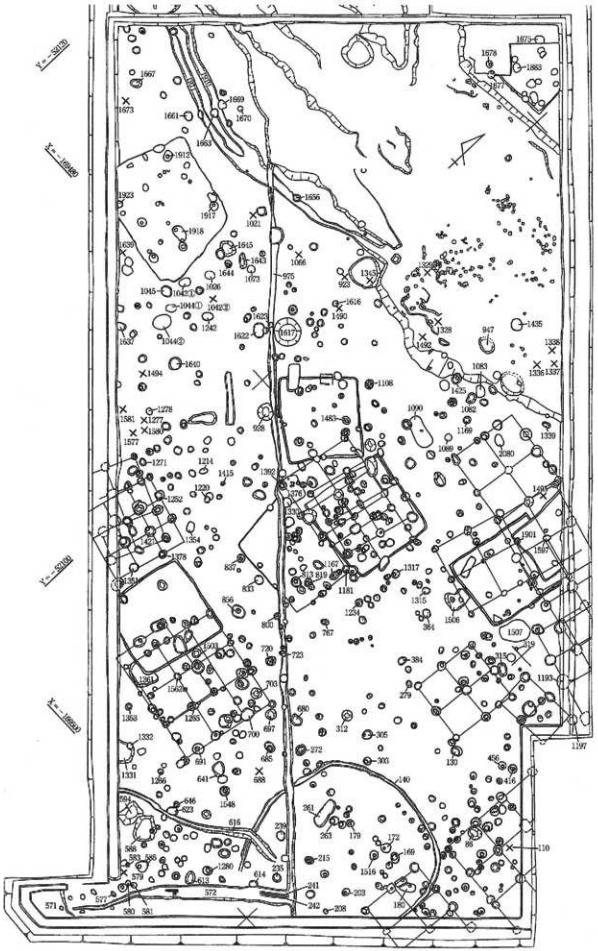
掘立柱建物４－①と掘立柱建物４－②では、掘立柱建物４－①のP1409の柱を抜き取った跡に、掘立柱建物４－②のP1256を柱穴としていることが観察された。P1265はP1409の柱抜き取り穴に石を埋め込み、P1256の柱の補強をしていたとみられる。この結果、掘立柱建物４－①は、掘立柱建物４－②に先行していたものと考えられる。

掘立柱建物５－①・５－②（第15図・図版３）

調査区の西南辺で検出した。掘立柱建物５－①は、３間×３間以上の総柱建物である。柱穴は隅丸方形状、或は円形状を呈するが、幾度かの建て替えの痕や柱の抜き取り痕がみられる。建物の方位は、N－14°－Eである。ピット埋土内に炭化物、炭片などが多く入ることから、火災などにあった可能性がうかがえる。掘立柱建物５－②は、３間×２間以上の総柱建物で、南側の調査区外に広がる。建物の方位は、N－20°－Eである。遺物は、土師器甕、須恵器甕、製塩土器片などの細片が出土した。出土した須恵器は５世紀末から６世紀前半頃に比定される。掘立柱建物５－②は、やや炭化物の広がる遺構面から切り込んで建物ピットが掘られていることから、火災にあったとみられる掘立柱建物５－①の跡に建てられたと考えられる。



第12図　１区　遺構断面図



第13図　1区　遺構平面図

掘立柱建物16－①・16－②・13（第16図）

調査区中央部の竪穴住居1382上面で検出した。竪穴住居16－①・－②は、２間×２間の総柱建物である。建物の方位は、N－10°－Eである。P1458とP1457、P1153とP1154の切り合いから、掘立柱建物16－①が後出するものと考えられる。遺物は、土師器甕、須恵器杯身、短頸壺片などの細片が出土した。５世紀中頃から後半頃に比定される。

掘立柱建物13は、２間×２間の総柱建物で、建物の方位は、N－12°－Eである。遺物は、須恵器杯身、土師器甕片などが出土したが、図化できなかった。ピットの切り合い関係から掘立柱建物16－①・16－②より後出すると考えられる。

掘立柱建物18－①・18－②・18－③（第18図）

調査区中央部北東辺で検出した。掘立柱建物18－①は、２間×２間の総柱建物である。建物の方位は、N－10°－Eである。遺物は、土師器甕、須恵器杯身、甕片などの細片が出土した。掘立柱建物18－②は、２間×３間以上の総柱建物である。建物の方位は、N－10°－Eである。遺物は、土師器甕、須恵器杯蓋、甕片などの細片が出土した。掘立柱建物18－③は、２間×３間の建物である。建物の方位は、N－５°－Eである。遺物は、土師器甕片などの細片が出土した。調査時における検出状況や切り合い関係、平面観察などから、やや南側に位置する掘立柱建物18－③が下層に相当するとみられる。河川が充分に埋まった後、掘立柱建物18－①が建てられ、さらにその後、掘立柱建物18－②が建てられたものと考えられる。

掘立柱建物19－①・19－②・20（第16・18図）

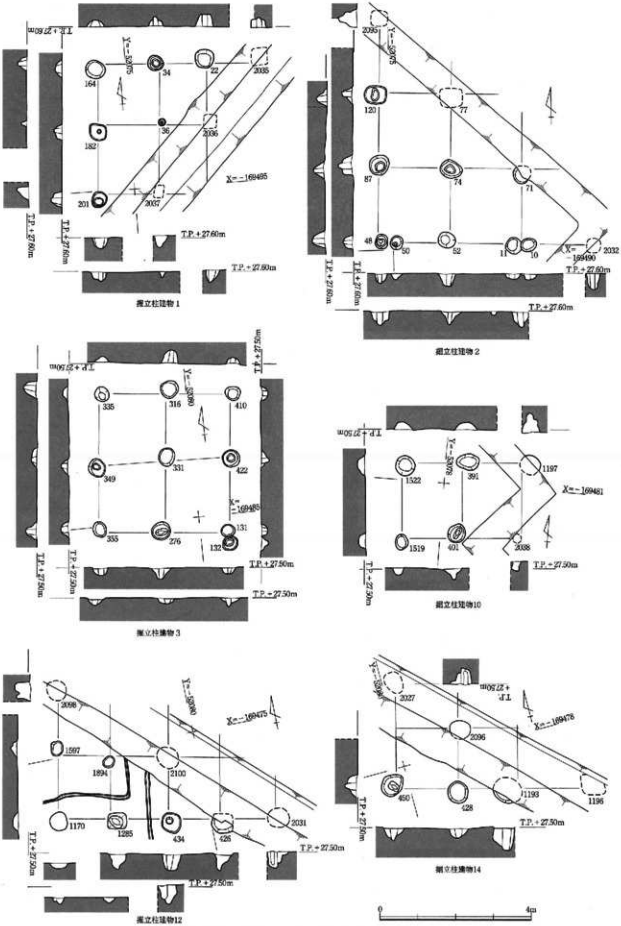
調査区中央部北東部で検出した。掘立柱建物19－①は、２間（5.0m）×２間（3.4m）の建物で、柱間の長さが約2.5mと約1.7mと異なる。建物の方位はN－１°－Eである。掘立柱建物19－①の東辺のP1402・P1140は、掘立柱建物20の廃絶後にピットを再利用したものと考えられる。さらに、ほぼ同位置に掘立柱建物19－②がある。掘立柱建物19－①の建て替えとみられる。掘立柱建物19－②は２間（4.0m）×３間（3.8m）の建物で、柱間の長さが約2.0mと約1.3mと異なる。建物の方位はN－１°－Wである。いずれも北を意識した建物である。建物ピット内から須恵器甕片、土師器甕片、薄い製塩土器片などが出土した。また、掘立柱建物19－①のP1169内からは砥石が出土した。住空間としての建物ではなく、作業場などの可能性がうかがえる。

建物ピット（第17図・図版３）

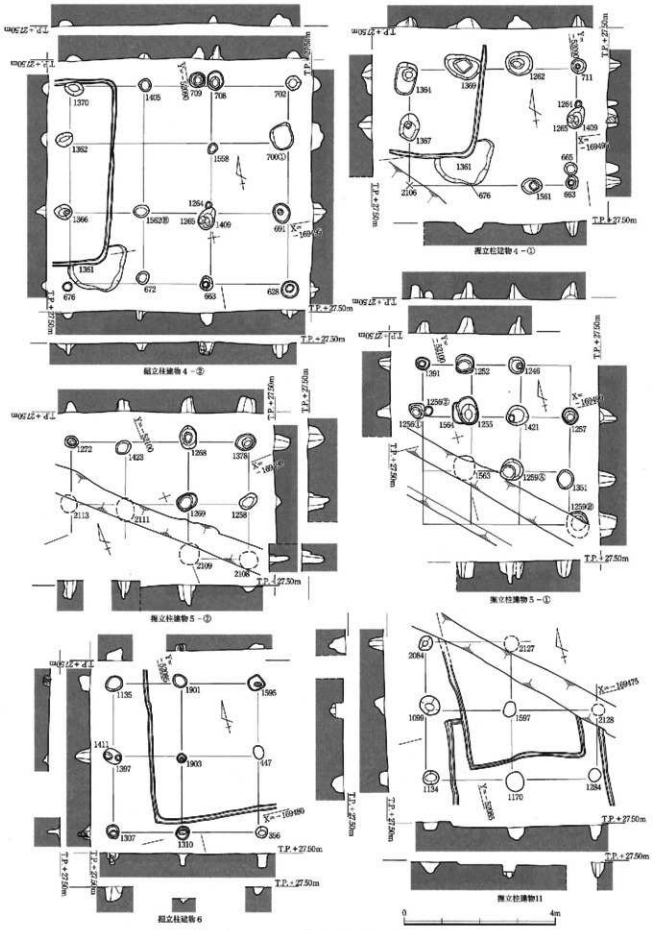
調査区内で、ピットが数多く遺存している。中でもピット内に柱根の残るもの（P691・1901・723・1332・1678・1167・1181・1597・1392・1892）、柱の抜き取り痕が確認できるもの（P426）、ピット内に石が入るもの（P767・1483・1265・1026・1526）などがみられた。調査時に建物プランを判別することができなかった掘立柱建物や柵列などがあると推測される。

掘立柱建物一覧（第18図・表１）

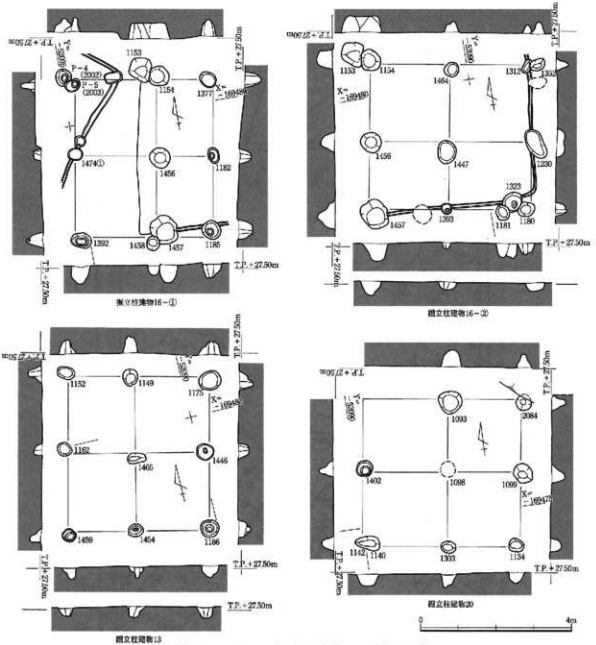
掘立柱建物の検出状況でその特性を明らかにするため、掘立柱建物一覧（表１）にまとめた。掘立柱建物の建物番号は、調査区に関わらず検出順に任意に付番した。（２区に掘立柱建物７・８。



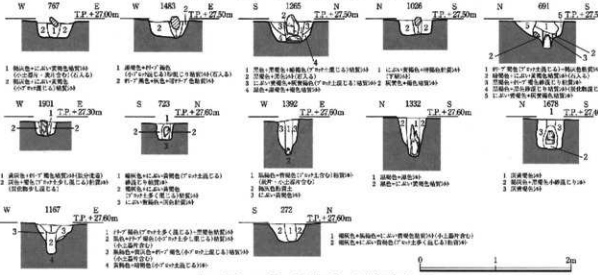
第14図　1区　掘立柱建物平・断面図①



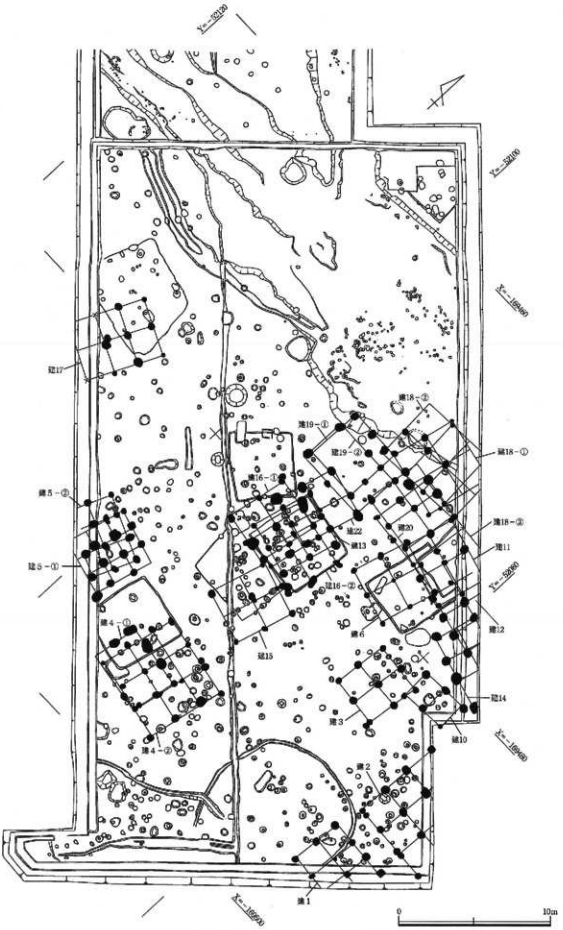
第15図　1区　掘立柱建物平・断面図②



第16図　1区　掘立柱建物平・断面図③



第17図　1区　建物ピット断面図



第18図　掘立柱建物配置図

表1　掘立柱建物一覧表

建物番号	調査区	柱間 (桁行間 × 梁行間)	柱間寸法 (m)	面積 (㎡)	方位	ピットの形状	備考	分類
掘立柱建物1	1区	2間×（2間＋α）	1.7×1.5~1.7	3.5×4.3 15㎡	N−5°−E	隅丸方形	総柱建物	A
掘立柱建物2	1区	3間×3間	1.8×2.0	6.0×5.4 32.4㎡	N−3°−E	隅丸方形	総柱建物	A
掘立柱建物3	1区	2間×2間	1.8×1.75	3.6×3.5 12.6㎡	N−5°−E	円形	総柱建物	A
掘立柱建物4−①	1区	2間×3間	1.5×1.2~1.6	3.1×4.5 14㎡	N−5°−E	楕円　又は 隅丸方形	柱抜き取り痕あり	A
掘立柱建物4−②	1区	3間×3間	1.6~1.8×1.9	5.8×5.3 30.7㎡	N−10°−E	円形　又は 楕円形	総柱建物	B
掘立柱建物5−①	1区	4間×4間	1.4×1.2~1.4	4.2×3.9 16.4㎡	N−14°−E	隅丸方形	総柱建物・抜き取り痕あり 埋土に炭化物混じる	C
掘立柱建物5−②	1区	4間×（2間＋α）	1.5×1.5~1.6	3.0×4.7 14.1㎡	N−20°−E	楕円形	総柱建物	D
掘立柱建物6	1区	2間×2間	2.0×1.9	4.0×3.8 15.2㎡	N−15°−E	楕円　又は 隅丸方形	総柱建物	C
掘立柱建物10	1区	1間×2間	2.0×1.6	2.0×3.2 6.4㎡	N−5°−W	楕円形	柱根残る	E
掘立柱建物11	1区	2間×2間	1.8×2.2	3.6×4.4 15.8㎡	N−15°−E	円形　又は 楕円形	総柱建物	C
掘立柱建物12	1区	(2間＋α)×4間？	1.7×1.4	3.4×5.7 19.4㎡	N−10°−E	隅丸方形	総柱建物 抜き取り痕あり	B
掘立柱建物13	1区	2間×2間	2.1×1.8	4.2×3.7 15.5㎡	N−12°−E	楕円形	総柱建物	C
掘立柱建物14	1区	2間？×3間？	1.4~1.6×1.6~1.8	3.0×5.3 15.9㎡	N−15°−E	隅丸方形	総柱建物か？	C
掘立柱建物15	1区	2間×2間	2.0×1.9	4.0×3.8 15.2㎡	N−15°−E	円形	総柱建物 抜き取り痕あり	C
掘立柱建物16−①	1区	2間×2間	2.0×1.6~1.8	4.2×3.6 15.1㎡	N−10°−E	楕円形	総柱建物	B
掘立柱建物16−②	1区	2間×2間	1.8~2.0×2.1	3.8×4.2 16㎡	N−10°−E	楕円形	総柱建物	B
掘立柱建物17	1区	2間×3間？	1.7×1.8	5.2×3.9 20.3㎡	N−25°−E	円形	総柱建物	D
掘立柱建物18−①	1区	2間×2間	2.2×2.2	4.5×4.5 20.3㎡	N−10°−E	円形	総柱建物	B
掘立柱建物18−②	1区	2間？×3間	2.0~2.5×1.8	4.5×6.3 28.4㎡	N−10°−E	円形	総柱建物	B
掘立柱建物18−③	1区	2間×3間	2.1×1.8~2.2	4.2×6.2 26㎡	N−5°−E	円形　又は 隅丸方形		A
掘立柱建物19−①	1区	2間×2間	1.7×2.5	3.4×5.0 17㎡	N−1°−E	円形		E
掘立柱建物19−②	1区	3間×2間	1.3×1.8~2.0	4.0×3.8 15.2㎡	N−1°−W	円形	総柱建物か？	E
掘立柱建物20	1区	2間×2間	1.9×2.0~2.2	3.9×4.2 16.4㎡	N−8°−E	円形　又は 楕円形	総柱建物か？	B
掘立柱建物22	1区	2間×2間	2.0×1.6~1.9	4.0×3.5 14㎡	N−15°−E	円形　又は 隅丸方形	総柱建物	C
掘立柱建物7	2区	3間×3間	2.0×1.5	6.1×4.5 27.5㎡	N−10°−E	円形　又は 楕円形	総柱建物か？	B
掘立柱建物8	2区	2間×3間	1.3×1.6	3.9×3.3 12.9㎡	N−10°−E	円形	総柱建物	B
掘立柱建物9	3区	2間？×3間	1.6×1.5~1.7	3.2×4.4 14.1㎡	N−10°−E	方形　又は 隅丸方形	総柱建物か？	B
掘立柱建物23	3区	2間？×2間	1.6×2.0	3.2×4.0 12.8㎡	N−5°−E	円形	総柱建物	A'

3区に掘立柱建物9がある。) なお、重複し建て替えられたと考えられる建物については、建物番号は同一とし、枝番を付与した。

まず検出状況、重複状態、前後関係が確認されたものを整理してみる。掘立柱建物1・2・3は、同一検出面で各々の重複関係がなく、竪穴住居との重複もみられないもの。掘立柱建物4・16・6・11・13・15・17・22は竪穴住居の上面からピットが切り込むもの。掘立柱建物4・16は建て替えが行われたもので、掘立柱建物4－①→4－②、掘立柱建物16－②→16－①→13の流れが考えられる。掘立柱建物20・12と近接する掘立柱建物11とでは、掘立柱建物11が先行する前後関係が認められる。掘立柱建物18・19は河川1500の上層から切り込むもの。各々の重複関係から掘立柱建物18－③→18－①→18－②、掘立柱建物19－①→19－②の流れが考えられる。掘立柱建物5は他の掘立柱建物と重複関係にはなく、単独で建て替えを行うもので5－①→5－②の流れが考えられる。

建物の方位をみると、5分類できる。A：概ねN－5°－Eを示すもの。掘立柱建物1・2・3・4－①・18－①。 B：概ねN－10°－Eを示すもの。掘立柱建物4－②・12・16－①・16－②・18－①・18－②・20。 C：概ねN－15°－Eを示すもの。掘立柱建物5－①・6・11・13・14・15・22。 D：概ねN－20°－Eを示すもの。掘立柱建物5－②・17。 E：概ねN－1°－Eを示すもの、その他。掘立柱建物10・19－①・19－②。検出された掘立柱建物は概ねN－0°からN－20°－Eの間に収まり、概ね北を意識して建てられているものと推測される。

建物の床面積では、①13㎡以下、②14～17㎡、③ほぼ20㎡、④25㎡以上に分けられるが、半数以上が②14～17㎡を示す。柱間は2間×2間、3間×3間、2間×3間で総柱の建物が主を成す。柱間寸法ではややバラツキがあり、梁間と桁行の寸法の異なるものが多くみられた。住居や倉庫の機能が考えられるが、特定するには至らなかった。②14～17㎡を示す一群のなかで、柱間が2間×2間、柱間寸法が1.8～2.0m程、建物の方位ではC：概ねN－15°－Eを示すものが多いことから、集落内での規格性がうかがえ、集落の隆盛期になるものと考えられる。

建物の方位による分類は、時期的な要因にも関連する傾向がみられる。出土した遺物などから、A：5世紀中頃から後半頃。B：5世紀後半頃。この頃には河川1500が完全に埋没していたものと推定される。C：5世紀末頃。D：6世紀前半頃。E：5世紀後半から6世紀前半頃に比定される。旧→新の順を列挙すると、A→B→C・E→Dの順となる。前後関係が認められるものを含めると、A：掘立柱建物1・2・3→A：掘立柱建物4－①・18－③→B：掘立柱建物4－②・16－②→B：掘立柱建物16－①・12・14・20・18－①→B：掘立柱建物18－②→C：掘立柱建物5－①・13・11・6・15とE：掘立柱建物10・19－①→19－②→D：掘立柱建物5－②・17の流れが考えられる。

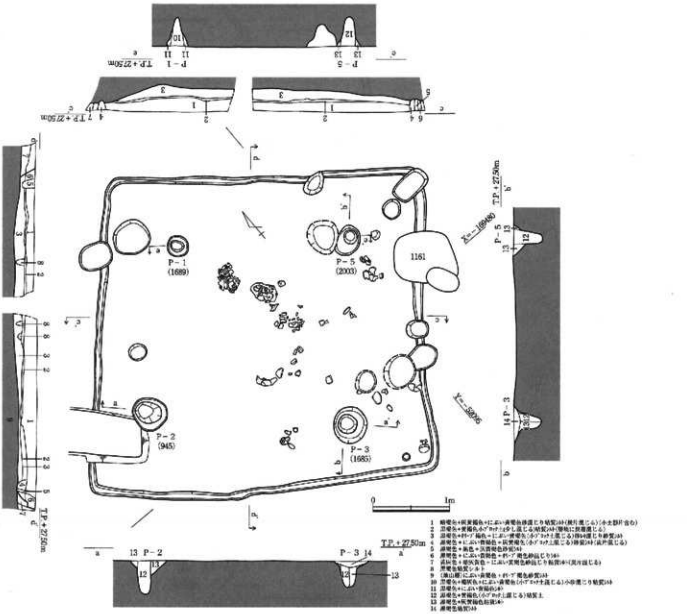
今回の調査では、総柱建物が多い傾向がみられたが、これらの建物の機能・性質を充分に検討しきれなかった。今後さらに検討を加えるとともに、次期以降寺田遺跡で実施される発掘調査の成果で解明されることを期待したい。

竪穴住居（第31図・図版４）

１区では、竪穴住居を９棟検出した。この他、調査地に確認できなかったが、側溝や壁面の土層断面や平面での観察の結果、竪穴住居と考えられるプランが幾つかみられた。

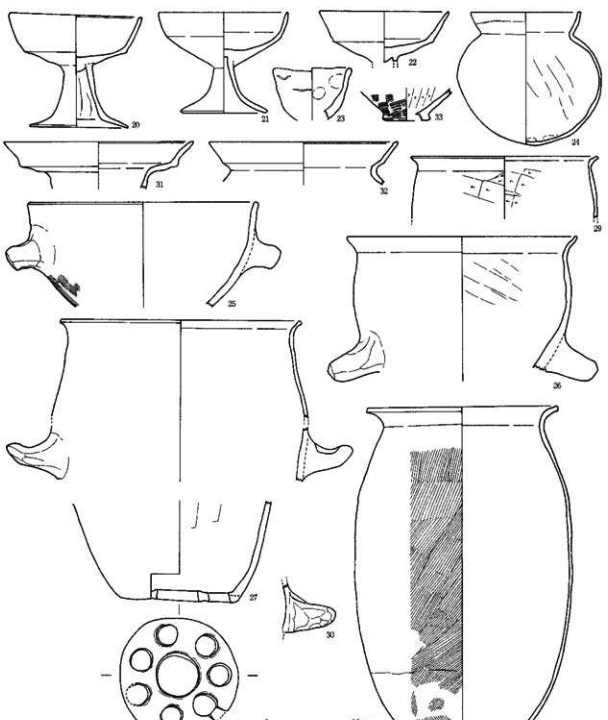
竪穴住居1480（第19図・図版４）

調査区のほぼ中央部で検出した、東西辺約4.5ｍ、南北片約4.3ｍの隅丸方形を示す竪穴住居である。住居の方位はＮ－50°－Ｅを示す。住居内から主柱穴を４箇所検出した。主柱穴はほぼ円形で直径0.3～0.5ｍ、深さ約0.5ｍを測る。住居内埋土は褐色・にぶい黄褐色・黒褐色砂混じる粘質シルトで、細かい炭化物や土器片が含まれる。床面は黄褐色の小ﾌﾞﾛｯｸ土が混じる黒褐色砂質シルトで、厚さ約２㎝の貼り床を施す。住居の周囲には幅約0.1ｍ、深さ約0.1ｍを測る壁溝が巡る。土層や平面観察の結果、使用時には埋まっていたものと推定される。炉ないし竈は確認することができなかった。床面検出高はT.P.+27.3ｍを測る。



第19図　１区　竪穴住居1480平・断面図

住居内の床面からは、土師器高坏（20･21･22）、坩堝（23）、甑（27）、把手付堝（25･26）、長胴甕（28）、甕（24）、砥石（34）、叩き石（35･36）などが出土した。住居内の中央部で長胴甕、甑、甕などがほぼ個体ごとにまとまって出土した。おそらく完形で設置されていたものとみられる。また、床面から滑石製管玉（715）、有孔円板（717）が出土した。埋土内からは土師器壺片（31）、甕片（32）、堝把手（30）や平底の甕底部片（33）などがみられた。出土した遺物は土師器が主で、４世紀代に比定される。

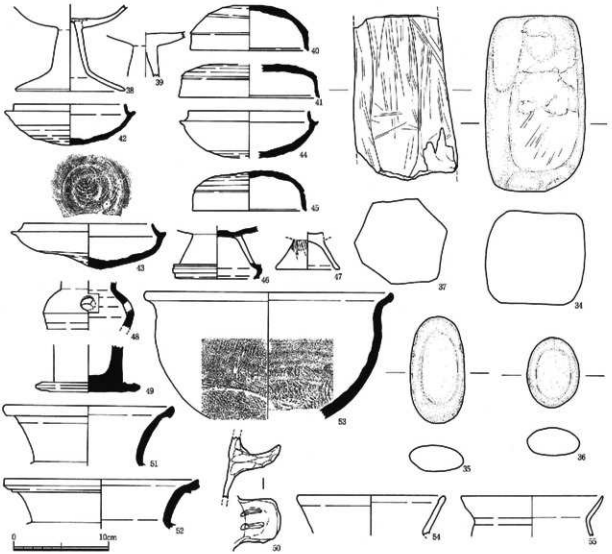


第20図　１区　竪穴住居1480内出土遺物

竪穴住居1382（第22図・図版４）

調査区のほぼ中央部で、竪穴住居1480と重複して存在する竪穴住居である。平面形は隅丸長方形に近く、東西辺約4.5m、南北辺約4.8mを測る。住居の方位はN－10°－Eを示す。住居内からは主柱に相当するピットは確認できなかった。検出時には、上面から掘り込むピットが多く、竪穴住居と認識せずに調査を進めていたが、周辺とはやや土壌状態が異なることから、掘削しながら観察を続けた結果、竪穴住居の壁溝の輪郭を確認することができた。壁溝は幅約0.1m、残存深は0.05mを測る。壁構内では、僅かに板状の痕跡が巡る状況が認められた。主柱穴がなく周囲に板状痕跡がみられることから、平地式壁立ち住居と推定される。検出高はT.P.+27.3mを測る。竈は確認することができなかった。竪穴住居1382は、重複の前後関係から竪穴住居1480より上層に位置する。

住居内からは、土師器高坏（38・39）、須恵器甕片（52）、鉢片（53）、砥石（37）などのほか、図化できなかったが、土師器甑、須恵器杯片、器台片、壺片、製塩土器片などが出土した。出土した遺物から、５世紀中頃から後半頃に比定される。



第21図　１区　竪穴住居内出土遺物

竪穴住居1281（第23図・図版４）

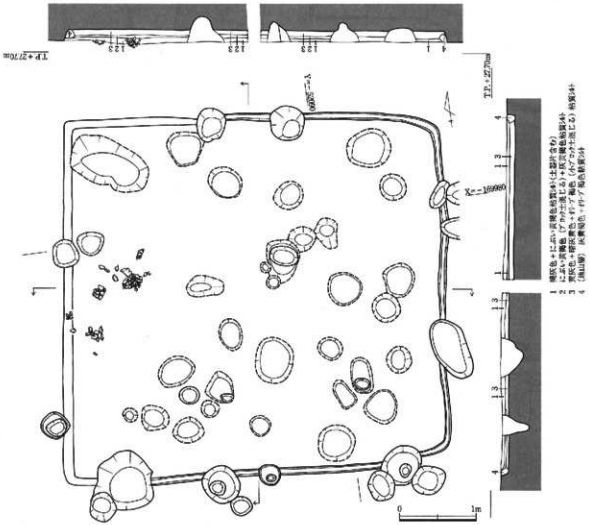
調査区の西壁沿いで検出した竪穴住居で、西南端部は調査区外に広がる。平面形は隅丸長方形に近く、東西辺約4.7ｍ、南北辺は約4.9ｍを測る。住居の方位はＮ－５°－Ｅを示す。住居の周囲には幅約0.1ｍ、深さ約0.1ｍの壁溝が巡る。壁構内では、長さ15～20㎝、幅２㎝程の板状痕跡が巡る状況が認められた。主柱穴がなく周囲に板状痕跡がみられることから、平地式壁立ち住居と推定される。検出高はT.P.+27.48ｍを測る。

竈は確認することができなかったが、調査時に浅い窪地状遺構として北側の東西辺中央部で、灰や細かい炭化物が僅かに広がる遺構1422がみられた。埋土内に土師器高坏脚部片や小石などがみられたことから、竈であった可能性がうかがわれる。

住居内からは、土師器甕（54）、須恵器壺口縁片（51）などのほか、図化できなかったが土師器高坏、土師器甕、須恵器片などが出土した。出土した遺物から、５世紀中頃から後半頃に比定される。

竪穴住居1499（第24図・図版５）

調査区の中央部北壁沿いで検出した竪穴住居で、北側は竪穴住居1504と重複して存在する。前

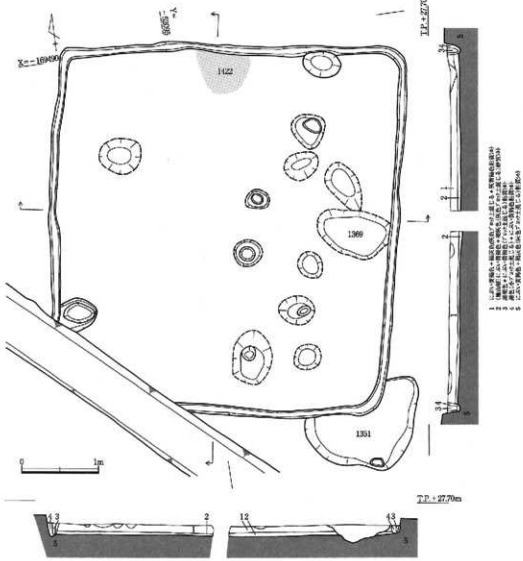


第22図　１区　竪穴住居1382平・断面図

後関係は、竪穴住居1504が上層で、竪穴住居1499が下層に相当する。竪穴住居1499は平面形が隅丸長方形を示し、東西辺約4.2m、南北辺約5.0mを測る。住居の方位はN－10°－Eを示す。検出時には、焼土層がやや歪な楕円形状に広がっていたことから、焼土坑として検出した。焼土坑の長径部に観察用アゼを設定したため、隅丸方形状の竪穴住居に対して斜め方向を向いている。住居内で主柱を成す柱穴は確認できなかった。住居の周囲には幅約0.1m、深さ約0.1mの壁溝が巡る。壁溝内には板状の痕跡が認められたことから、平地式壁立ち住居と推定される。検出高はT.P.+27.48mを測る。

住居内の床面付近では、炭・灰層の堆積や焼土層が広がる部分が多くみられた。埋土内にも焼土、炭片などが混在していることから、焼失したものと考えられる。竈については存在に気づかず掘削を進めたため、検出できなかった。

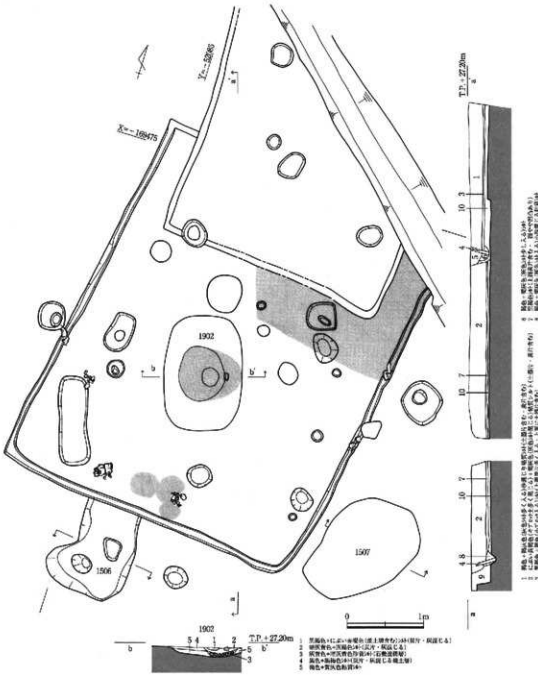
床面付近からは、土師器甕（65･66）、高坏（56･57）、小型丸底壺（58･59）のほか、使いこなされた砥石（67～69）、焼土塊などが出土した。土師器甕（66）は、外面全体が黒く炭化するもので、甕の肩部に爪型文が施されている。出土遺物から4世紀後半頃から5世紀初頭頃に比定さ



第23図　1区　竪穴住居1281平・断面図

れる。埋土内からは土師器甕（61～64）や図化できなかったが、土師器壺、弥生土器の細片などがみられた。おそらく、焼失後建て替えを行なう際に整地土として搬入された土砂の中に遺物が含まれたものと推測される。

住居内の中央部付近で、長辺約1.5m、短辺約1.0mの楕円形を示す土坑1902が存在する。土坑の中央部で炭や灰を含む焼土層が広がり、床面は焼けて赤褐色を示す。中央部で僅かに一段深く掘り込まれ、こぶし大程の河原石が隙間無く敷き詰められていた。遺物は出土しなかった。石敷きの用途は不明であるが、床面が焼けて赤褐色化すること、住居内から砥石や焼土塊などが多く出土することから、鍛冶関連の作業場であったのではないかと推測される。



第24図　1区　竪穴住居1499・1504平・断面図

竪穴住居1504（第24図・図版５）

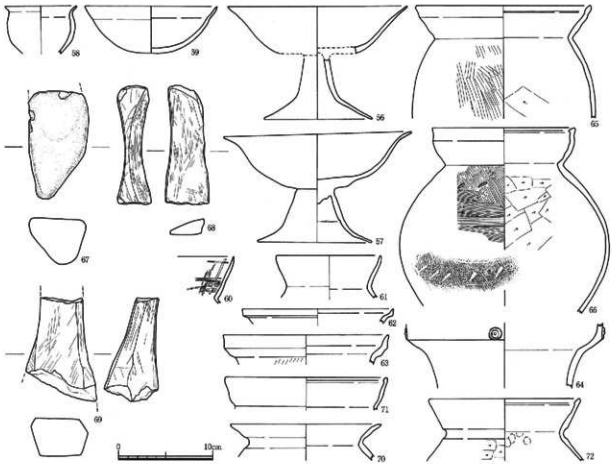
竪穴住居1499と重複して存在する竪穴住居である。北半部は調査区外に広がる。平面形は隅丸長方形で、東西辺約3.1ｍ、南北辺約3.6ｍが残存する。住居の方位はＮ－10°－Ｅを示す。検出時には竪穴住居のプランを確認できなかったが、土層や平面観察により判別するに至った。焼土層や一部で編み物状の炭化物が平面上に広がることから、焼失住居であると考えられる。竪穴住居1499の廃絶後ほぼ同じ場所に建て替えられたものとみられる。

住居内からは、土師器甕（70）、土師器小壺、須恵器甕片、製塩土器片などが出土した。概ね、５世紀中頃に比定される。

竪穴住居1510（図版４）

調査区の中央部で、竪穴住居1382と重複して存在する竪穴住居である。検出時には竪穴住居と認識せずに調査を進めていたため、充分な土層、平面観察ができなかった。判別した平面形は隅丸方形で、東西辺約5.0ｍ、南北辺は約4.2ｍが残存する。住居の方位はＮ－10°－Ｅを示す。住居の北半部が竪穴住居1382により削平を受けることから、竪穴住居1510が下層に相当する。

埋土内では、図化できなかったが製塩土器片、土師器高坏片などがみられた。概ね、５世紀前半頃に比定される。

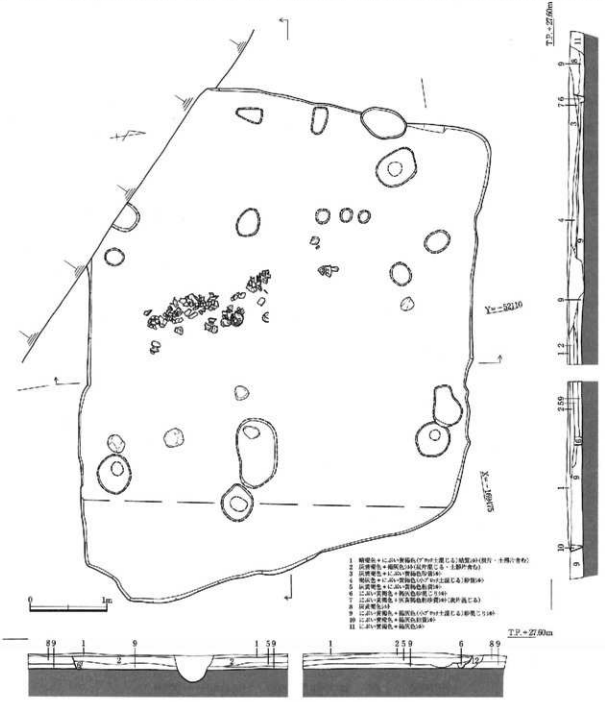


第25図　１区　竪穴住居1499・1504内出土遺物

竪穴住居1511（第26・27図・図版５）

調査区の西北部西壁沿いで検出した竪穴住居である。西南端は調査区外に広がる。検出平面形は台形状を示すが、おそらく２棟が重複しているものと考えられる。各々の竪穴住居プランを判別することはできなかった。竪穴住居1511の東西辺北側は約５ｍを測る。南北辺は西側が東西辺に対してほぼ垂直を示し約5.2ｍを測る。東辺は斜向して延びる。東西辺で成す住居プランでは、住居の方位はＮ－５°－Ｅを示す。住居内で主柱に相当する柱穴、竈は確認できなかった。検出高はT.P.+27.35ｍを測る。

遺物は、住居の中央部で帯状に並んで出土した。土師器壺、高坏、須恵器杯蓋（73～79）、高杯（80～85）、把手付椀（86・87）、壺（89・90）、器台（91）、韓式系土器片、瓦質円筒形土器片



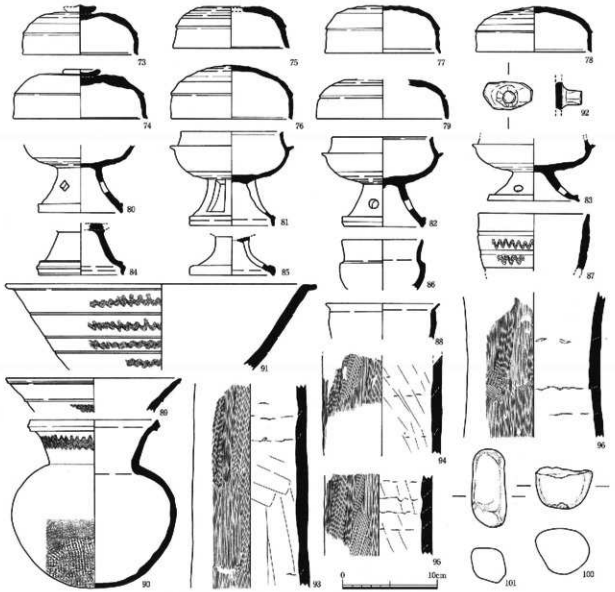
第26図　１区　竪穴住居1511平・断面図

(92～99)、製塩土器（102)、叩き石（100・101)、有孔円板（716)、馬歯など、多くの遺物が出土した。須恵器高杯などの完形品が並んで出土するなどの検出状況から、祭祀的行為が行われたものと推測される。出土した瓦質円筒形土器片は竈などの煙突とみられるが、同時期の集落内住居とは異なった状況を示しており、朝鮮半島系の様相がうかがえ、朝鮮半島との関係があったもの思われる。５世紀中頃に比定される。

竪穴住居1489（第28図・図版４）

調査区の北端部で検出した竪穴住居で、北東端部は調査区外に広がる。河川1500の北岸に位置する。調査時に掘削深度の誤りで竪穴住居の北から西部を欠損してしまった。平面形は方形状を示すとみられる。東西辺は約3.7ｍ、南北辺は約3.5ｍが残存する。住居の方位はＮ－５°－Ｅを示す。住居内から、主柱に相当する柱穴、竈は確認できなかった。検出高はT.P.+27.3ｍを測る。

住居内からは、土師器台付壺脚底部（47)、甕口縁部（55)、土師器細片などが出土した。５世紀前半頃に比定される。



第27図　１区　竪穴住居1511内出土遺物

竪穴住居571（第29図・図版５）

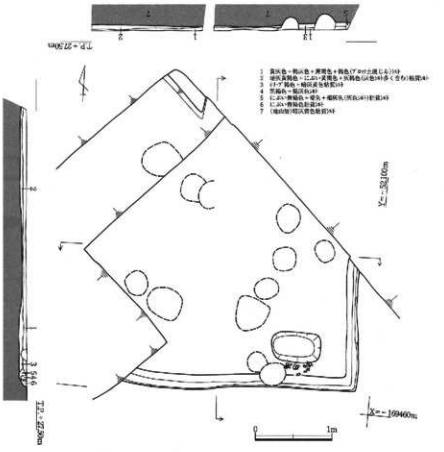
調査区の南西端部で検出した竪穴住居で、南半部の大半が調査区外に広がる。１区南側壁断面及び西側壁断面で確認されたもので、調査区内では東西方向の北辺相当が認められるが、住居プランを確定することはできなかった。東西方向に約５ｍ、南北方向に4.2ｍ以上を測るとみられる。住居内埋土の堆積状況で、炭や灰層が多く混じることから焼失住居と推測される。

遺物は、壁断面に多く認められた。須恵器杯蓋（40･41）、杯身（42･43）、高坏（46）、甕（48）、すり鉢底部（49）、土師器把手付鍋、甕片などが出土した。出土した遺物から、５世紀後半から６世紀初頭頃に比定される。

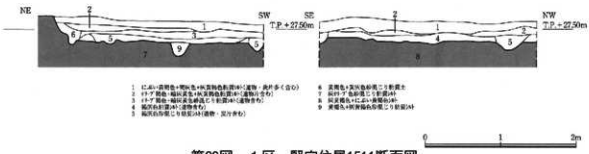
円形竪穴住居（第31図・図版５）

調査区南側で検出した円形竪穴住居である。調査時には、竪穴住居と認識せず溝140（第12図）として検出している。上層が後世の削平を受けており、周溝の痕跡（溝140）が僅かに残るだけである。直径は約10ｍを測る。主柱穴や炉などは確認できなかった。弥生時代に相当するものと考えられる。

住居に関連する出土遺物は確認されなかったが、周辺の遺構P1503、P1353、P1562などから弥生土器の甕（156･157）や壺（154･155）などが散逸的に出土した。



第28図　１区　竪穴住居1489平・断面図



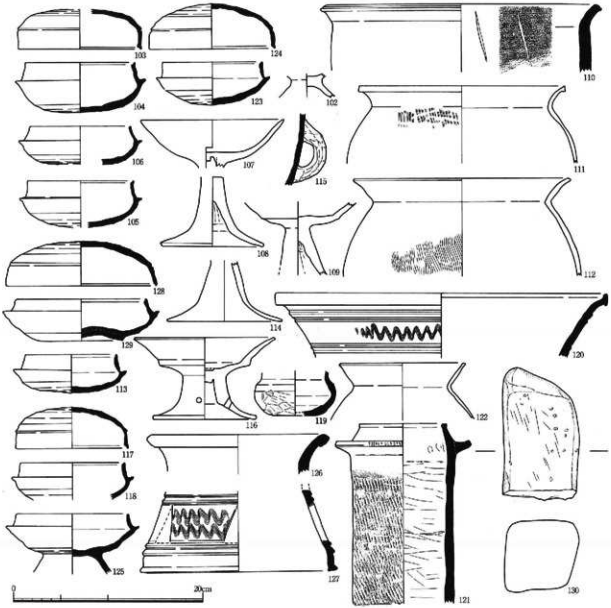
第29図　１区　竪穴住居1511断面図

その他の竪穴住居（第30・31図）

調査時、浅い窪地状の遺構や不定形の土坑に相当すると考えていたが、土壌の変化や遺構の検出状況、断面観察などから竪穴住居と判別されたものが幾つか(竪穴住居A ～ Q)みられた。

調査区西北部の竪穴住居1511の東南側で、不定形の浅い土坑状遺構1402・1645・1643・1026を検出した。竪穴住居Mと判別されたものである。推定検出形は、東西約4.8m、南北約4.5mを測る方形状を成す。住居の方位は概ねN－10°－Eを示す。竪穴住居Mに重複して、窪地状遺構1494・1640・1044として検出した竪穴住居Kがみられる。推定検出形は、東西約4.5m、南北約4.5mを測る方形状を成す。住居の方位は概ねN－5°－Eを示す。遺構内からは、須恵器杯身（104～106）、杯蓋（103）、土師器高坏（107～109）、平底鉢（110）、甕（111・112）、砥石（130）、土師器把手、小型丸底壺などが出土した。

調査区の北西端部で竪穴住居1511の西北側に近接して、不定形の浅い土坑状遺構1673・1663・16



第30図　1区　竪穴住居内遺構出土遺物

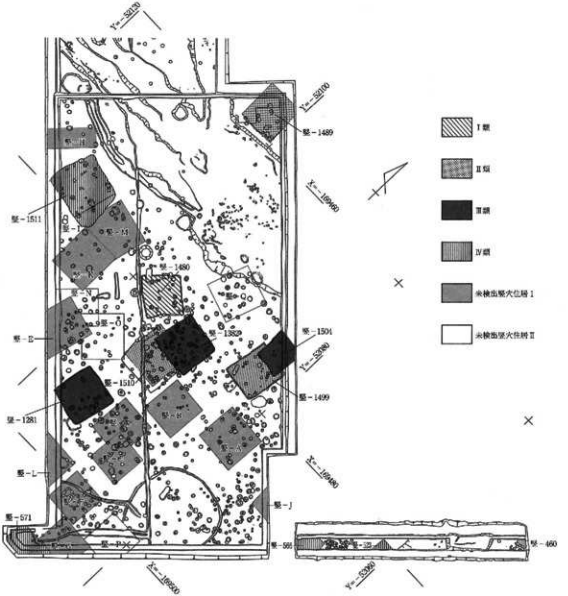
69が帯状にみられた。竪穴住居Hと判別した。遺構内から須恵器杯身（118）、小壺（119）、器台（120）、瓦質円筒形土器（121）などが出土した。竪穴住居1511の遺物出土状況に酷似する。

調査区南西部の竪穴住居1281の東側で、浅い不定形土坑が多く、炭化物や灰などが広範囲にみられた。竪穴住居Cと判別した。焼失住居と推測される。推定検出形は、東西約4.0m、南北約4.0mを測る方形状を成す。住居の方位は概ねN－3°－Eを示す。重複して竪穴住居Dがみられる。遺構内からは、土師器高坏（114）、須恵器把手（115）などの細片が多くみられた。

調査区の南端部に位置し、浅い窪地状を示す遺構623・646・579・594は、推定検出形が方形状を成す。竪穴住居Fと判別した。遺構623内から、土師器高坏（116）がほぼ完形で出土した。

調査区の北部に位置する遺構1169・1089は、竪穴住居Qと判別した。砥石や製塩土器片、土師器高坏、甕片などが散逸的に出土した。

このほか確認された竪穴住居は、検出形が方形状を呈し、概ね北を意識したものと推測される。



第31図　竪穴住居配置図

表2　竪穴住居一覧表

住居番号	調査区	寸法 (m) × (m)	面積 (㎡)	主軸方位	形状	特記事項	備考 (検出遺物など)	備考 (関連遺構)	分類
竪−460	5区	1.3 × 3.0 (残) (残)	——	N−5° −E	隅丸方形	調査後竪穴住居と判明	須恵器片・土師器片		Ⅳ類
竪−566	5区	不明	——	N−8° −E	隅丸方形	調査後竪穴住居と判明	須恵器片・土師器片		Ⅳ類
竪−523	5区	1.3 × 2.1 (残) (残)	——	N−8° −E	隅丸方形	調査後竪穴住居と判明 焼失住居（焼土層広がる）	須恵器片・土師器片		Ⅳ類
竪−1480	1区	4.3 × 4.5	19.4	N−50° −E	隅丸方形	4本の主柱穴を有する	第20・21図・図版13		Ⅰ類
竪−1382	1区	4.5 × 4.8	21.6	N−10° −E	隅丸方形	壁立ち竪穴住居か？	第21図・図版13		Ⅲ類
竪−1281	1区	4.7 × 4.9	23.0	N−5° −E	隅丸方形	壁立ち竪穴住居	第21図・図版14	土坑1351	Ⅲ類
竪−1499	1区	4.2 × 5.0	21.0	N−10° −E	隅丸長方形	壁立ち竪穴住居	第25図・図版14	土坑1506・1507	Ⅱ類
竪−1504	1区	3.1 × 3.6 (残)	——	N−10° −E	隅丸長方形	焼失住居	第25図・図版14		Ⅲ類
竪−1511	1区	5.2〜6.8×5.0	約30	N−5° −E	台形状	壁溝確認できず 2棟重複か？	第27図・図版14・15		Ⅳ類
竪−1489	1区	3.8 × 3.9 (残) (残)	——	N−5° −E	隅丸方形	一部掘り過ぎによる欠損	第21図・図版15		Ⅱ類
竪−571	1区	2.0 × 2.8 (残)	——	不明	不明	調査後竪穴住居と判明	第21図・図版15		Ⅳ類
竪−1510	1区	5.0 × 4.2 (残)	約21	N−10° −E	隅丸方形	未掘	第21図・図版16		Ⅱ類
竪−A	1区	4.5 × 4.5 (推定)	約20	N−3° −E 推定	方形状	窪地状 土壌変化あり	須恵器杯身・杯蓋・土師器甕片	遺構314,352,279,278	
竪−B	1区	4.2 × 4.5 (推定)	約19	N−3° −E 推定	方形状	窪地状 土壌変化あり			
竪−C	1区	4.0 × 4.0 (推定)	約16	N−3° −E 推定	方形状	窪地状 焼土層広がる 土壌変化あり	土師器甕・高杯脚	遺構688,641,632,634,635,637,700	
竪−D	1区	4.7 × 4.7 (推定)	約22	N−3° −E 推定	方形状	土壌変化あり	土師器片	遺構704,703	
竪−E	1区	4.5 × 4.5 (推定) (残)	約20	N−10° −E 推定	方形状	土壌変化あり 1区西側側溝断面にて確認	土師器高杯脚部・甕片	遺構1577,1581,1277,1278,1279	
竪−F	1区	4 × 4 (推定)	約16	N−3° −E 推定	方形状	土壌変化あり	土師器高坏・甕片	遺構623,646,579	
竪−G	1区	4 × 4 (推定)	約16	N−3° −E 推定	方形状	土壌変化あり 1区南側側溝断面にて確認	土師器甕・須恵器杯	遺構579,580,581,583	
竪−H	1区	3.5×不明	——	不明	方形状	帯状に焼土・土器片分布する範囲あり	須恵器杯・器台・高杯片・甕片・土師器片	遺構1673,1663,1669	
竪−I	1区	不明	——	不明		窪地状 壁断面にて確認		遺構1639	
竪−J	1区	不明	——	不明		土壌変化あり 壁断面にて確認		遺構110	
竪−K	1区	4.5 × 4.5 (推定)	約20	N−5° −E 推定	方形状	遺物多い 窪地状	土師器甕片・高坏・把手・鉢・須恵器壺・杯片	遺構1494,1640,1044	
竪−L	1区	不明	——	不明		推定（不確実） 壁断面にて確認	土師器甕・細片	土坑1331	
竪−M	1区	4.8 × 4.5 (推定)	約21	N−10° −E 推定	方形状	遺物多い 窪地状	土師器小型丸底壺・甕・高杯脚・須恵器甕・杯他	遺構1042,1645,1643,1026	
竪−N	1区	4.0 × 4.5 (推定)	約18	推定	方形状？	土壌変化あり 焼土含む	土師器甕片	遺構1581,1580	
竪−O	1区	4.7 × 4.5 (推定)	約21	推定	方形状？	土壌変化あり 焼土含む	土師器小型丸底壺・甕・焼土塊・他	遺構1220,1354,1415,1267	
竪−P	1区	4 × 4 (推定)	約16	推定	方形状？	土壌変化あり 1区西側側溝断面にて確認			
竪−Q	1区	4.3 × 4.5 (推定)	約19	推定	方形状？	散乱遺物多い	土師器高杯脚、甕片、砥石	遺構1169,1089	

竪穴住居一覧（第31図・表２）

竪穴住居の検出状況でその特性を明らかにするため、竪穴住居一覧（表２）にまとめた。竪穴住居の住居番号は、検出時に判別したものについては、遺構番号をそのまま採用した。なお調査時に判別できなかったが、竪穴住居と認識されたものについては、新たに付番した。

重複状態、前後関係が明らかなものとして、竪穴住居1480と1382、1510。竪穴住居1499と1504が各々重複している。検出状況や土層観察などから、旧→新の順は竪穴住居1480→竪穴住居1510→竪穴住居1382、竪穴住居1499→竪穴住居1504となる。

出土遺物からみるとⅠ類からⅣ類に分類することができる。

Ⅰ類（４世紀代相当）　竪穴住居1480

Ⅱ類（４世紀末から５世紀前半頃）　竪穴住居1499･1510･1489

Ⅲ類（５世紀中頃）　竪穴住居1504･1511　（５世紀中頃から後半頃）　竪穴住居1382･1281

Ⅳ類（５世紀末から６世紀代）　竪穴住居571、竪穴住居460･566･523

住居の形態では、竪穴住居内に主柱穴を伴うものは竪穴住居1480である。竪穴住居内に主柱穴を伴わず、壁溝に板状痕跡がみられる平地式壁立ち住居と考えられるものとして、竪穴住居1382･1281･1499などがある。竪穴住居の検出形状は平面形で概ね隅丸方形状を示す。竪穴住居1499･1504は隅丸長方形を示す。調査時に判別できなかったが竪穴住居と認識されたものについても、方形状を示すと推測される。住居の面積は、概ね18～23㎡で中型規模に相当する。住居の方向は、竪穴住居1480がN－50°－Eであるが、ほかはほぼN－０～10°－Eに収まる。自然地形など不定形な方向であったものが、一定の方向、特に北を意識して住居を建てるようになったものと推測される。

寺田遺跡で検出した建物は、竪穴住居と掘立柱建物がある。集落内で、竪穴住居と掘立柱建物が並存していた時期があると考えられる。竪穴住居1499・1382・1281と掘立柱建物１・２・３は平面的には重複することなく、また建物の方向についても概ねN－５～10°－Eを示すなど、並存が可能な条件がうかがえる。掘立柱建物６･11･12･18などは竪穴住居1499の上層から切り込む状況がみられる。竪穴住居1382の上層から掘立柱建物13･16･22が、竪穴住居1511の上層から掘立柱建物17が切り込む状況がみられる。

竪穴住居と掘立柱建物の前後関係を検討した結果、５世紀初頭頃に相当する竪穴住居Ⅱ類に、掘立柱建物A類が並存するものとみられる。さらに、５世紀中頃に相当する竪穴住居Ⅲ類には、掘立柱建物A類、B類が並存する。５世紀末から６世紀初頭頃に相当する竪穴住居Ⅳ類には、掘立柱建物E類が並存していたものと考えられる。

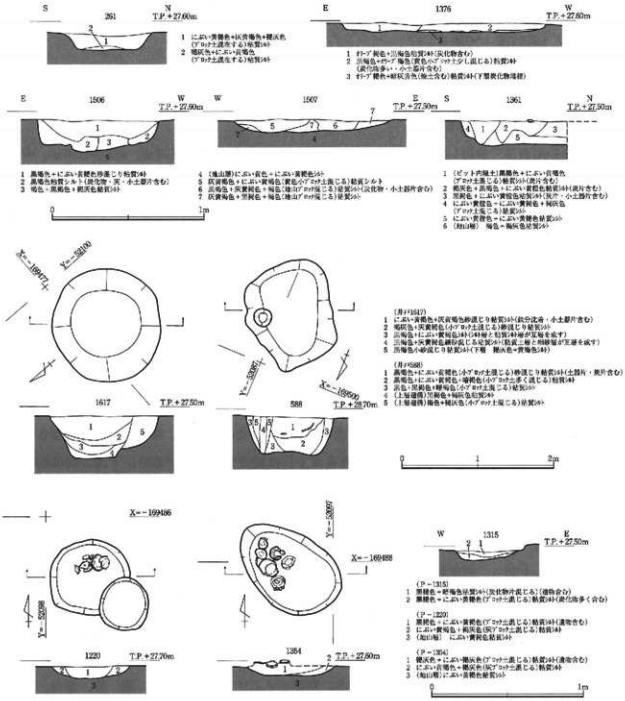
１区では掘立柱建物と竪穴住居が同一面で検出されたことから、建物間の重複や前後関係が複雑となり、竪穴住居と掘立柱建物の並存状況を充分に検討し切れなかった。今後の調査で、詳細が明らかにされることを期待したい。

土坑261（第32図）

調査区南側中央部に位置する浅い溝状土坑で、検出長1.1m、幅0.65m、深さ約0.15mを測る。埋土はにぶい黄褐色及び褐灰色粘質シルト。埋土内から土師器細片が出土した。

土坑1376（第32図・図版４）

竪穴住居1510の西側に近接して検出した焼土坑である。一辺約1.2mの方形状を示し、深さ約0.1mを測る。埋土中に炭化物、灰層が堆積する。遺構底部には小さな穴が幾つもみられた。竪穴住居1510の付随遺構とみられるが詳細は不明である。埋土内からは土師器小型丸底壺、甕、高坏、鉢、須恵器甕などの細片が出土した。



第32図　１区　遺構平・断面図

土坑1361（第32図）

竪穴住居1281の南西隅で検出された土坑で、長辺約1.5m、短辺約1.3mの楕円形状を示す。竪穴住居1281の付随遺構とみられるが詳細は不明である。土師器甕片などが出土した。

土坑1506・1507（第32・24図）

土坑1506は竪穴住居1499の南側に付随して検出された土坑で、住居南辺中央部あたりで長方形状に住居外へ広がる。埋土中には炭化物や灰層を含む。埋土内から土師器甕片が出土した。

土坑1507は竪穴住居1499の南東側に近接して検出された土坑で、長辺約1.6m、短辺約1.1mの楕円形状を示す。炭化物や灰層、焼土、焼土塊を含む。土師器甕（71・72）、鉄滓、鋳造鉄斧（257）などが出土した。鍛冶関連の作業場と推定される竪穴住居1499の関連遺構と考えられる。

井戸1617（第32図・図版6）

調査区の中央部で検出した直径約1.5mの円形を示す素掘りの井戸で、深さ約0.6mの浅いすり鉢状を呈す。遺物は出土しなかった。農業用井戸とみられる。

井戸588（第32図・図版6）

調査区の南西部で検出した楕円形状を示す素掘りの井戸で、長辺約1.3m、短辺約1.0m、深さ約0.5mを測る。埋土内には炭化物や灰層を含み、須恵器甕、土師器甕片などが出土した。

P1220・1354・1415・P1315（第32図・図版6）

P1220・1354・1415は、調査区の中央部西南側で検出した遺物出土遺構で、細片となった土師器小型丸底壺が複数出土した。P1354では小型丸底壺のほか、製塩土器片、鞴羽口などが出土した。遺構周辺では、焼土や灰、炭化物層が広がり、製塩土器片などが多く出土する。近接して焼土塊を含むP1253・1421がみられる。調査時に判別できなかった竪穴住居（竪－0）に相当する。

P1315は、竪穴住居1499の南側で検出した遺構で、検出径約0.4mのやや楕円形状を呈する浅い皿状を示し、埋土内から小型丸底壺が複数個出土した。

河川1500（第34図・図版6）

調査区北半部で東側から西側に向かって流れる旧河川跡を検出した。検出幅約13m、深さ0.15～1.4mを測る。河川1500の上流方向にあたる東方には観音寺山丘陵があり、下流方向は松尾川の方向へと向っている。河川1500の河川内埋土は、概ね6層に大別することができる。

河川内第1層　基本層序第4層白灰色シルト層に相当。須恵器、土師器などの遺物を含む。

河川内第2層（1）　基本層序第5層黄褐色粘質シルト層を主とする。河川埋没後の上層堆積層。層厚約15cmを測る。須恵器蓋杯、高杯、甕片などの遺物を含む。

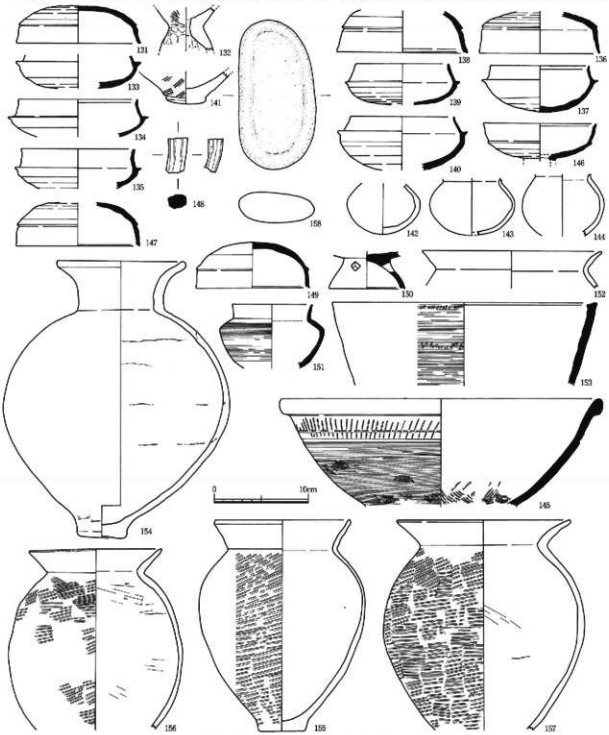
河川内第3層（2）　黒褐色粘質シルト層。河川埋没最終段階の浅い窪地内堆積土。層厚約15cmを測る。須恵器蓋杯、高杯、壺、鉢など多くの遺物が出土。

河川内第4層（3・6・15～17・19・20）　黒褐色ないし暗褐灰色小砂レキ混じる粘質シルト層。河川稼動時の堆積土。層厚約15～20cmを測る。初期須恵器片、須恵器高杯、鉢、壺、器台、土師器高坏、甕、壺など大量の遺物が出土。

河川内第５層（４・５・７～10・12・18・21）　黒褐色及び黄灰色砂混じり粘質土層。河川内流水堆積層。層厚約10～40cmを測る。土師器高坏、小型丸底壺、塝片、壺、甕や鉄滓、砥石など鍛冶に関係すると思われるものなど多くの遺物が出土。

河川内第６層（11・13・22・23）　黒色及び暗灰黄色砂混じり粘質土層。（砂・砂礫土と粘土が互層を成す）。河川内流水堆積層。層厚約10～40cmを測る。土師器壺、甕、塝、小型丸底壺、製塩土器片などが出土。

河川1500の左岸はテラス状に浅瀬が広がっている。浅瀬部分では初期須恵器を含む高杯、杯身、



第33図　１区　遺構内出土遺物

杯蓋、鉢などが列状に遺存する状況がみられ、高杯内及び周辺から滑石製の臼玉や有孔円板、紡錘車などが出土している。浅瀬部分で祭祀的な行為が行なわれていたものと推定される。

河川1500の堆積層下層部から、庄内甕片などが出土した。河川上層では窪地状の堆積層から５世紀中頃から６世紀前半頃の須恵器が大量に出土することから、河川1500は４世紀代に流路が定まり、５世紀中頃から遅くとも５世紀後半頃には完全に埋没していたものとみられる。河川埋没後には、掘立柱建物が築かれるなど、当地で集落が継続して営まれていたことがうかがえる。

下層河川（第34図・図版９）

調査区中央部で河川1500の下層から旧河川跡を検出した。調査の都合からトレンチを設け、断面観察を行なった。下層河川の埋土は概ね２層に大別することができる。河川内第１層から河川内第６層は河川1500に順ずるもので、下層河川内堆積層は、河川内第７層・８層に相当する。

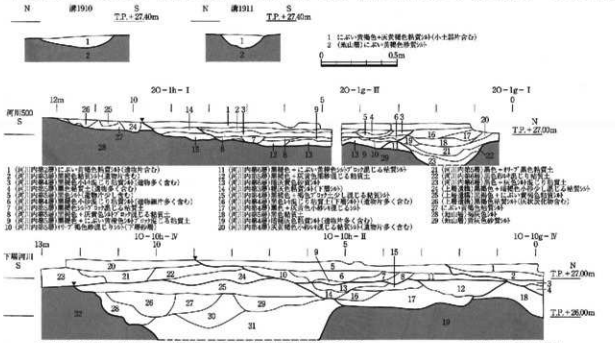
河川内第７層（14～16・25～29）　灰黄褐色ないし黒褐色シルト層。下層に細砂層がみられる。層厚約0.2～1.0ｍを測る。埋土内から庄内甕片、小型丸底壺片などが出土した。

河川内第８層（17・30・31）　オリーブないし灰黒色黄褐色砂レキ土層。層厚約0.3～1.3ｍ以上を測る。埋土内から土師器甕（387～391）片、弥生土器片などが出土した。

下層河川は堆積状況から、一時期に激しく流れ、いっきに埋まった様相がうかがえる。その後、ほぼ同じ流跡で河川1500が形作られたものと推定される。

溝1910・1911（第34図）

河川1500から分岐し、河川の南岸を河川に沿って西に流れる溝である。検出幅0.3～0.5ｍ、深

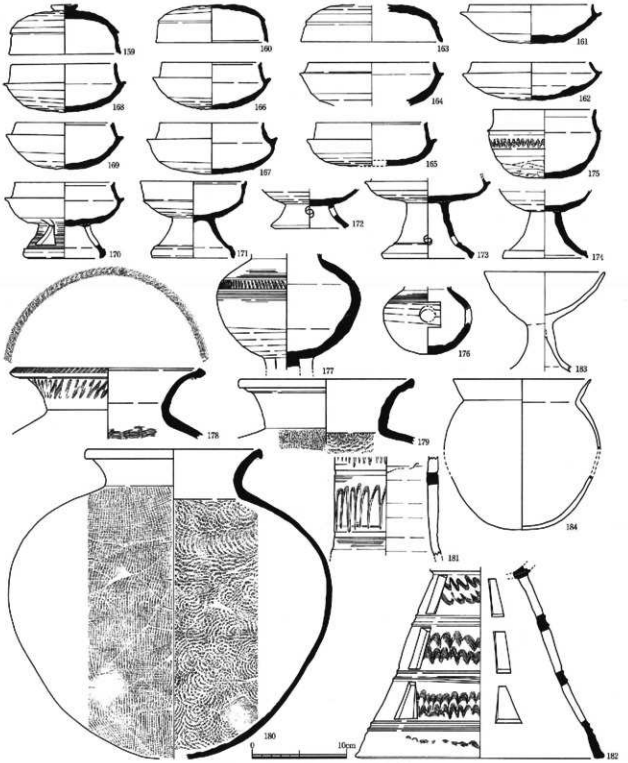


第34図　１区　河川1500・下層河川・溝1910・1911断面図

さ約0.1mを測る。埋土内からは須恵器杯蓋（149）、透かしが菱型の高杯（150）、鉢（153）、小壺（151）、土師器把手（372）、土師器甕（152）などが出土した。

河川上層出土遺物（第33・35図・図版12・13・16）

河川1500埋没後の浅い窪地や河川テラス部分の南岸や近接地から、初期須恵器を含む遺物が数多く出土した。浅い窪地状の遺物出土遺構（P1345・1425・1435・1616・1490・1021等）からは、杯蓋（159・160・163）、杯身（161・162・164～169）、高杯（170～174）、把手付椀（175）、鉢（176）、



第35図　1区　河川上面出土遺物

台付壺（177）、甕（178～180）、器台（181･182）、土師器高坏、壺、甕、鳩把手のほか、製塩土器片が多く出土した。５世紀前半から５世紀後半頃のものが主を成す。

河川埋没後の河川上やその周辺に建てられた掘立柱建物のピット（建P1252･1637･1082･1197等）からは、須恵器杯身（133～135･137･139）、杯蓋（131･136･138･147）、高杯（146）など多くの遺物が出土した。５世紀中頃から６世紀前半頃のものが主を成す。

小結

１区では、上面で周辺の条里型地割に沿った方向を示す区画溝と鋤溝跡を検出した。下面では古墳時代の竪穴住居及び掘立柱建物から成る集落域を確認することができた。河川1500は、機能時には集落の北側を画していたものと推測される。また、検出された竪穴住居や掘立柱建物の重複状態や前後関係から、集落内での建物の変遷を推察することができた。さらに、河川1500の下層から下層河川を検出した。集落が形成される以前は下層河川の河道であったが、埋没後の４世紀代に竪穴住居から成る集落が営まれたと推測される。当初、建物の方位は不定方向であったが、北を意識する建物配置をとる集落となり、竪穴住居と掘立柱建物が共存する時期を経て、掘立柱建物が主となる集落が形成されたものと推測される。

５．２区の調査

２区は調査域の中央部西南側に位置する。府営住宅の住棟・施設棟・防火水槽などの関連施設に相当する調査区で、南北約46ｍ、東西約19ｍの長方形状を示す。

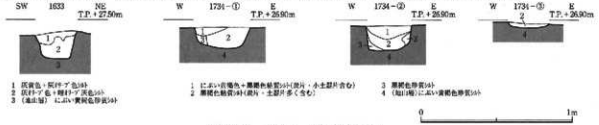
２区では上面で条里方向を示す溝を検出した。河川上層面では焼土坑、掘立柱建物、建物ピット、井戸などを検出した。河川相当面では、溝、１区より延伸する河川1500が分岐した河川1500北東と河川1500南西が調査区を縦断して検出された。

１）上面の遺構（第６図・図版７）

溝1633･1695・溝1734（第６図・図版７）

溝1633は、１区から縦断方向に真っ直ぐ延びる溝である。１区では溝975である。検出幅約0.3ｍ、深さ約0.2ｍで、２区内での延長は約27ｍを測る。調査区中央部で溝が分岐し溝1695と平行して延びるが約3.5ｍ先で消滅する。埋土内から須恵器杯蓋（235）、高杯（237）、椀（236）、鼈、甕、土師器甕片などが出土した。溝1633の延伸方向は、当地周辺の条里型地割の方向に相当する。

溝1734は、２区中央部で北南方向に延びる溝である。検出幅0.25～0.4ｍ、深さ約0.15ｍで北に向って浅くなる。延長は約14ｍを測る。埋土内からは土師器甕の細片が出土した。



第36図　２区　上面断面図

2）河川上層面の遺構（第７図）

上面遺構面から第４層灰黄色粘質シルト層を取り除くと、焼土坑、掘立柱建物、井戸などの遺構を確認した。河川1500上層面に相当する。検出高はT.P.+27.20ｍ～ T.P.+26.85ｍを測る。

焼土坑1839・1940・1841・1842・1844・1846他　（第37図・図版８）

河川1500南西の北側肩部で広範囲に焼土が広がり、幾つかの焼土坑を検出した。検出径0.4ｍ程の歪な楕円形状を示すもの（1840・1842・1843・1844・1846他）は、深さ約0.07～0.2ｍの浅い皿型を呈する。埋土内から須恵器高杯（197）、土師器高坏（211）、須恵器甕片などが出土した。焼土坑1839・1841は帯状に広がりを持つ焼土坑である。焼土坑1841の北側部（1841－①）では、中央部が約0.3ｍと深くなる。埋土内から須恵器杯蓋（198～200）、高杯（201～206）、土師器甑（207）、甕（208～210）、把手（231～234）、須恵器杯身、壺、甕片などの遺物が出土した。概ね５世紀後半頃に比定される。これらの焼土坑の周囲には覆屋の存在を伺わせる柱穴がみられることから、鍛冶に関連する遺構ではないかと考えられる。

焼土坑1966（第37図・図版８）

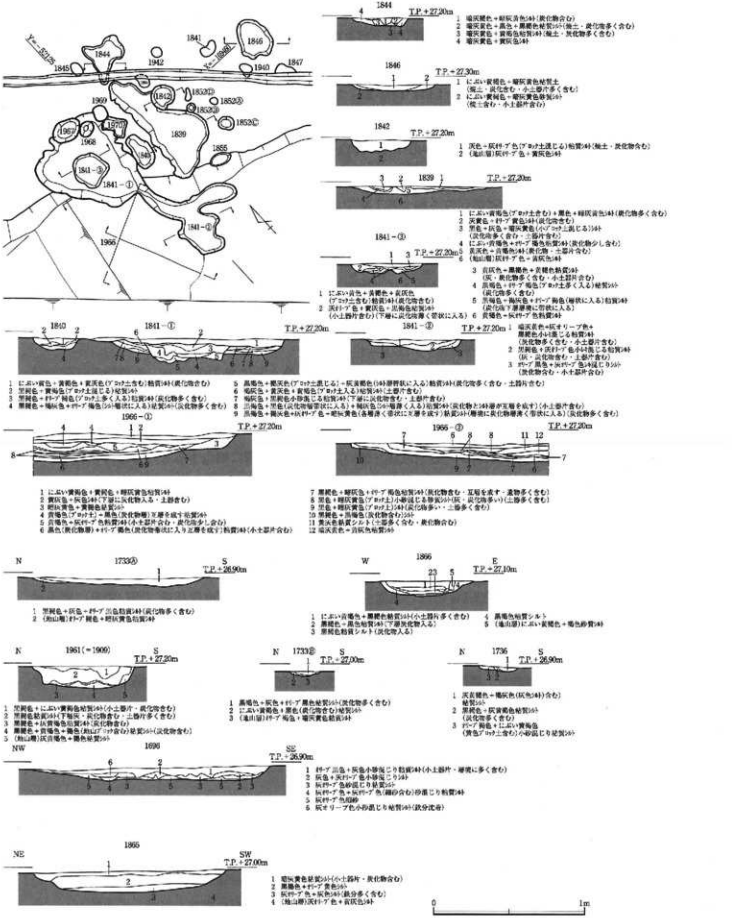
焼土坑1841の下層で焼土層が堆積する土坑である。焼土層は南北約5.0ｍ、東西約５ｍ強の範囲に広がる。埋土内から土師器甕（185～189）、高坏（191～193）、須恵器高杯（194～196）、韓式系土器甕（190）、製塩土器、砥石などが出土した。概ね５世紀中頃から後半頃に比定される。河川埋没後に建てられ焼失した竪穴住居、或いは鍛冶関連遺構に相当するものと推察される。

焼土坑1961・1733A・1963・1866・1733B・1736他（第37図・図版８）

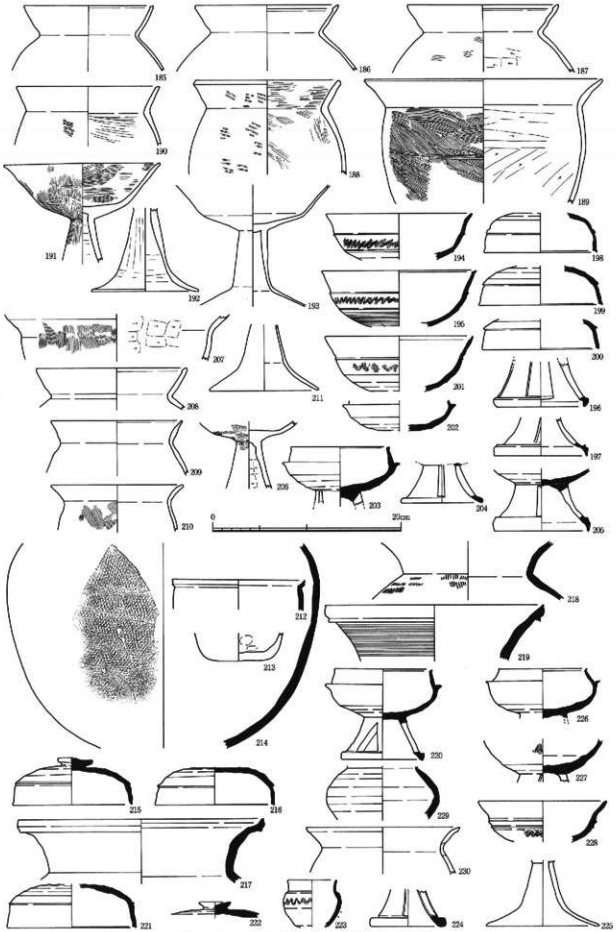
焼土坑1961は、１区との境部で検出した。長径約3.3ｍ、短径約2.2ｍの楕円形状を示し、深さ約0.3ｍを測る。埋土内から須恵器鉢（212）、韓式系土器甕（214）、手づくね土器底部（213）、高杯、土師器甕、高坏などの細片と焼土塊が出土した。焼土坑1733Aは、河川1694の上層で歪な楕円形状を示し、深さ約0.1ｍの浅い皿型を呈する。埋土内から須恵器杯蓋（221・222）、把手付椀（223）、高杯（224・225）、甕片、小型壺片、土師器高坏、製塩土器片などが出土した。焼土坑1963は、溝1867の上層で細長い楕円形状を示す。埋土内から須恵器杯身（215・216）、甕（217）、土師器高坏、小型器台、甕片などが出土した。焼土坑1866は、直径約1.5ｍの隅丸方形状を示すもので、須恵器甕片、杯片などが出土した。焼土坑1733B・1736は幅約0.5ｍの浅い溝状を示す。須恵器などの細片が出土した。いずれも５世紀後半から６世紀初頭頃に比定される。炭化物・灰層などの廃棄土坑とみられるが、詳細な用途は不明である。

土坑1696・1865（第37図・図版８）

調査区北東部で検出した不定形土坑で、検出幅約3.0～4.0ｍ、深さ約0.2～0.3ｍを測る。土坑1696から須恵器高杯（226～228）、壺（229）、杯身、杯蓋、土師器甕（230）、高坏などが出土した。土坑1865から須恵器甕片（218・219）、高杯（220）、杯身、土師器甕片などの細片が出土した。いずれも５世紀後半から６世紀初頭頃に比定される。河川や溝上層の窪地を拡張して土坑とし、土器を廃棄したものと推測される。



第37図　2区　焼土坑・土坑平・断面図



第38図　2区　焼土坑・土坑内出土遺物

掘立柱建物７（第39図・表１・図版７）

河川1964上層で検出した、３間×３間の総柱建物になるとみられる。柱穴は円形状を示す。建物の方位は、N－10°－Eである。遺物は、土師器高坏（251）、二重口縁壺（253）、壺口縁部（252）、須恵器高杯（250）、製塩土器片、叩き石（254）などが出土した。概ね６世紀前半頃に比定される。

掘立柱建物８（第39図・表１・図版７）

河川1964上層で検出した、２間×３間の総柱建物である。柱穴は円形状を示す。建物の方位は、N－15°－Eである。遺物は、土師器甕片などが出土したが、図化できなかった。掘立柱建物８は焼土坑1733Aの上層からピットが切り込む状況が観察された。焼土坑1733Aが５世紀後半から６世紀初頭頃に相当することから、６世紀前半以降に比定される。

建物ピット（第40図・図版７）

建物プランの判別に至らなかった建物ピットが数多く遺存している。中でも河川埋没後上層からの切り込む建物ピットでは、ピット内に柱根の残るもの（P1852・1853・1876・1947・1948・1965・1962・1971他）、ピット内に石が入るもの（P1931）などがみられた。周辺の遺構の状況などから、６世紀前半から以降のものと推定される。

井戸1726・1908・1957（第41図・図版７）

井戸1726は、河川1694の上層で検出した直径約1.5ｍの円形を呈す素掘りの井戸で、深さ約1.3ｍを測る。井戸底部には縦板材を組み合わせた円形の木枠がみられた。木枠の直径は約0.4ｍ、残存長は約0.6ｍを測る。木枠は舟材などの転用材とみられる。取上げた際に細かく割れたため、表面の加工痕などは確認できなかった。木枠内から、須恵器高杯（241・242）、広口壺（243）、大甕片（246）、土師器壺（245）、製塩土器片（247～249）などが出土した。

井戸1908は、河川1500南西の上層で検出した直径約1.5ｍの円形を呈す素掘りの井戸で、深さ約0.65ｍのすり鉢状を示す。埋土内から土師器甕片などが出土したが、図化できなかった。

井戸1957は、溝1867の上層で検出した直径約1.3ｍのやや歪んだ円形を呈す素掘りの井戸で、深さ約1.2ｍを測る。埋土内から土師器鉢（238）、壺（239）、甕（240）などが出土した。

これらの井戸は、概ね５世紀後半から６世紀前半頃に比定できる。

３）河川相当面の遺構（第７図）

河川上層面から第５層黄褐色粘質シルト層を取り除くと、１区より延伸する河川跡を検出した。河川1500は１区北端で大きく分岐し、河川1500北東・南西に分かれる。河川1500北東は、河川1964へと続く。河川1500南西は２区で西側の調査区外へと延びる。主流は河川1500北東から河川1694に続く流れである。この他、溝1867・1868・1693・河川1692がみられた。

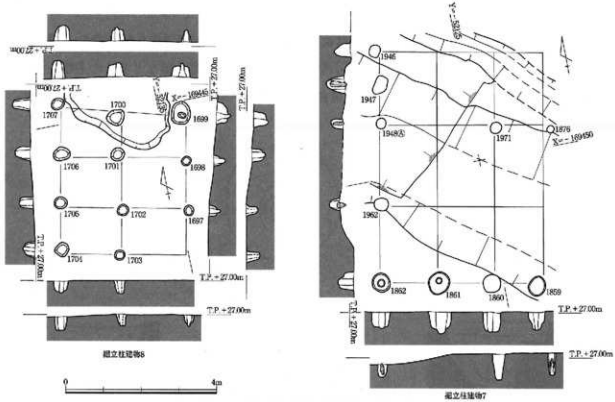
河川1694・1962・溝1693・1867・1868（第43図・図版９）

河川1500北東より直線的に続く河川1694は、検出幅約３～６ｍ、深さ約0.7～1.3ｍを測る。下流方向は現松尾川の方向へと向っている。

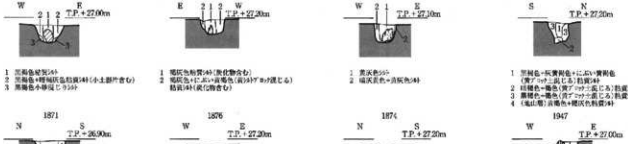
河川1694の河川内埋土は概ね7層に大別することができる。

河川内第1層　基本層序第4層白灰色シルト層に相当。須恵器、土師器などの遺物を含む。

河川内第2層（1）　基本層序第5層黄褐色粘質シルト層を主とする。河川埋没後の上層堆積層。部分的に厚くなる。須恵器杯蓋、高杯、甕、甕片など6世紀前半頃の遺物を含む。



第39図　2区　掘立柱建物平・断面図



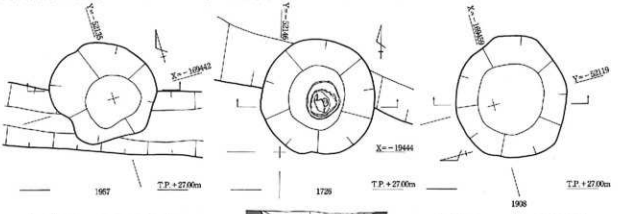
第40図　2区　建物ピット断面図

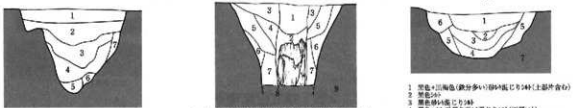
河川内第３層（３）　灰黄褐色及びにぶい黄褐色砂混じり粘質シルト層で炭化物を含む。層厚約15cmを測る。須恵器杯蓋、高杯、鉢、壺、甕片など多くの遺物を含む。

河川内第４層（22･23･29･36･37）　灰黄褐色及び暗褐色粘質シルト層で炭化物を多く含む。部分的にレンズ状堆積を示す。層厚約20cmを測る。須恵器器台、高杯、土師器壺、製塩土器、臼玉、砥石など多くの遺物を含む。

河川内第５層（24･25･28･38･39）　黒褐色及び暗褐色粘質シルト層で炭化物を含む。層厚約20cmを測る。初期須恵器高杯、椀、土師器小型丸底壺、把手、製塩土器など多くの遺物を含む。

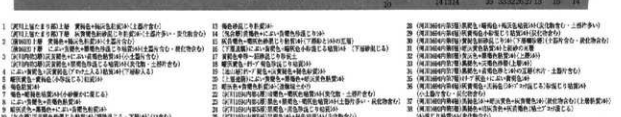
河川内第６層（26･27･30～32･40）　暗灰黄色及び黒褐色シルト層で下層に細砂層が堆積する。





第41図　２区　井戸平・断面図

第42図　２区　溝断面図



第43図　２～３区　河川1694・1692・溝1693断面図

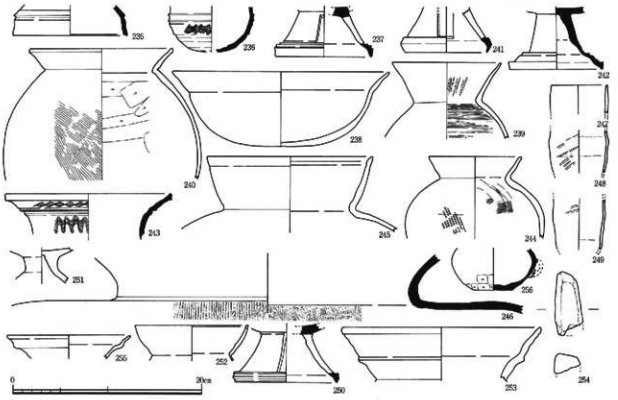
層厚約20～40cmを測る。土師器甕、小型丸底壺、小型器台、製塩土器などの遺物を含む。

河川内第７層（33～35）　黒褐色及び黄灰色砂層とシルト層が互層を成す。層厚約30cmを測る。土師器甕片、高坏、小型丸底壺、庄内甕片、木片など多くの遺物を含む。

河川内堆積下層部からは庄内甕などが出土し、河川上層では窪地状の堆積層から須恵器が大量に出土することから、河川1694は４世紀代に流路が定まり、遅くとも５世紀後半頃には埋没していたものとみられる。河川埋没後に上層から掘立柱建物が築かれるなど、当地で集落が継続して営まれたことがうかがえる。

河川1692は、検出幅約３～４ｍ、深さ約0.7ｍを測る。埋土は河川1694と概ね同一であるが、遺物が少なくなり、須恵器器台や滑石製臼玉、砥石など特殊な遺物がみられた。祭祀的要素が強いものと考えられる。河川1694よりやや遅く、５世紀後半頃に埋没したものと推測される。

溝1693・1867（第64図）は河川埋没後に、河川1694と河川1692の間に築かれた溝で、検出幅約1.0ｍ、深さ約0.2～0.5ｍを測る。河川埋没後の流水路であったと推測される。溝1693は西側で浅い窪地状を成し溝の輪郭がはっきりしなかったが、東側に延びる溝1868に繋がるものと推測される。溝1693・1868（第64図）から須恵器杯蓋（215･216）、甕（218）、土師器高坏、把手、甕、小型丸底壺などが出土した。溝1867から土師器甕片、須恵器甕片が出土した。溝1867の西側部のたまり部（第63図）では、夥しい数の須恵器杯身、杯蓋、高杯、廊、韓式系土器底部、製塩土器などが出土した。概ね５世紀中頃から６世紀前半頃に比定される。



第44図　２区　遺構内出土遺物

小結

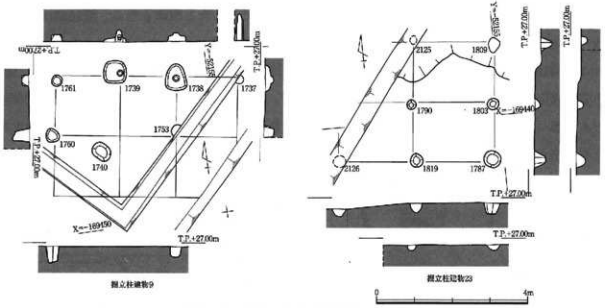
2区では、上面で1区から続く条里型地割に沿った方向を示す区画溝を検出した。

河川上層面では、焼土坑が多く検出された。鍛冶関連の作業場、或は廃棄土坑と推察される。河川相当面では、河川1500北東が河川1694と繋がり、主流路であることが判別された。河川はいずれも、5世紀中頃から後半頃までには埋没したものと推察される。また、河川埋没後も当地で井戸を掘り、掘立柱建物から成る集落を形成することが確認された。

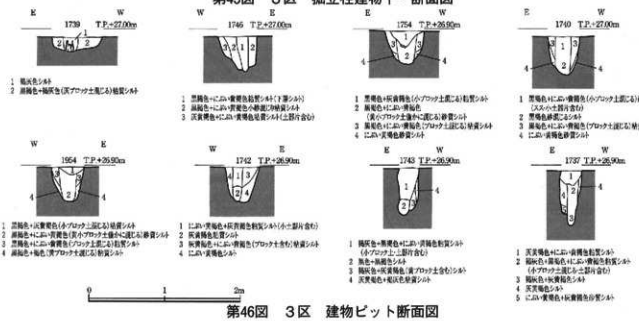
6．3区の調査

1）3区西半部の調査（第7図・図版8・9）

3区は、調査区の北側で東西方向に延びる道路予定地に相当し、南北幅約6.5m、東西延長約63mの長方形を示す。本来、3区は一度に調査を実施する予定であったが、作業用地と掘削土砂



第45図　3区　掘立柱建物平・断面図



第46図　3区　建物ピット断面図

の仮置き場を確保するため、３区西半部、３区東半部に調査区を分割して調査を実施した。

３区西半部は、東西延長の西から約35ｍまでの範囲を調査区とする。

３区西半部では、上面で条里方向を示す区画溝、下面で掘立柱建物、建物ピット、井戸、土坑、溝、更に下層から１区から３区内に延伸する河川跡を検出した。

溝1679（第６図）

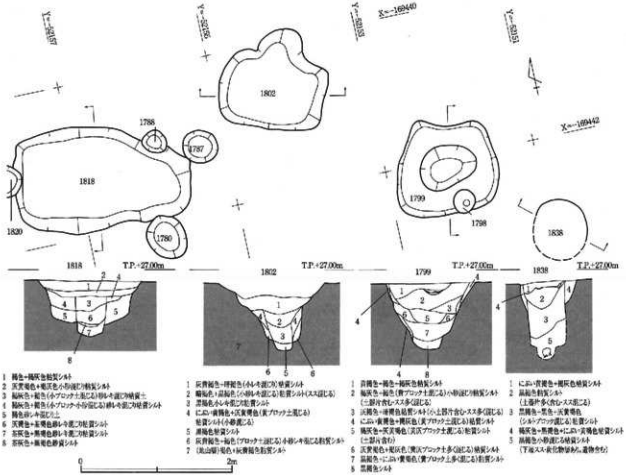
調査区南西部で検出した条里型地割に沿った方向を示す直線的な溝である。上面の削平を受け痕跡が残るのみであった。検出幅は約0.1ｍ、検出長は約7.5ｍを測る。遺物は出土しなかった。１区から延伸する溝1633を仮に３区まで延伸した場合、溝1633と溝1679の間隔は約11ｍとなる。

掘立柱建物９（第45図・表１・図版８）

調査区西南端部で検出した、３間×２間以上の総柱建物である。柱穴は方形状を示す。建物の方位は、N－10°－Eである。遺物は、土師器甕（25）、甕細片などが出土した。概ね５世紀中頃から末頃に比定される。

掘立柱建物23（第45図・表１）

調査区北西部端で検出した２間以上×２間の総柱建物である。柱穴は円形状を示す。建物の方位は、N－５°－Eである。土師器甕片などが出土したが、図化できなかった。



第47図　３区　井戸平・断面図

建物ピット（第46図）

建物プランの判別に至らなかった建物ピットが幾つか遺存している。ピット内に柱根の残るもの（P1739）、柱穴痕の残るもの（P1746・1754・1740・1954・1742・1743・1737・1752等）がみられた。ピット内から土師器長頸壺（274）、甕片などの細片が出土した。

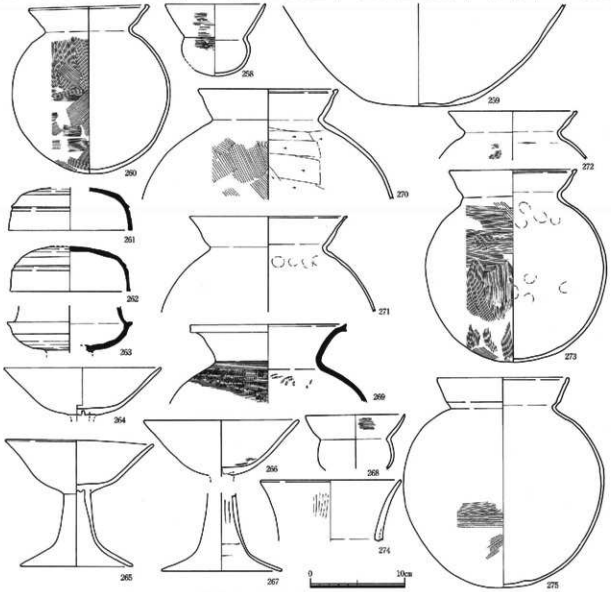
井戸1818・1802・1799・1838（第47図・図版８）

河川1694の南西側でほぼ一直線状に並んで井戸が検出された。

井戸1818は長径2.3ｍ、短径1.5ｍの隅丸方形状を示し、中央部が円柱状に深くなる素掘りの井戸である。最深部は約0.8ｍを測る。遺物は、土師器片などが出土したが、図化できなかった。

井戸1802は長辺1.8ｍで凸部を有する方形状を示す。断面はやや拉げたすり鉢状を成す。埋土内から須恵器杯蓋（261・262）、高杯（263）、甕（269）、器台片、土師器高坏（264～267）、小型丸底壺（268）、甕などが出土した。５世紀末から６世紀初頭頃に比定される。

井戸1799は一辺約1.2ｍの隅丸方形状を示し、中央部やや深くなる素掘りの井戸である。埋土内には多くの炭、炭化物を含む。土師器小型丸底壺（258）、大型壺底部（259）、甕（260）、製塩



第48図　３区　遺構内出土遺物①

土器などが出土した。５世紀末から６世紀初頭頃に比定される。

井戸1838は検出径約0.7ｍの円形状を示す。断面は筒状を成す。埋土内には炭化物が多く混じる。最下層からは土師器甕のほか、植物の種や藁状の炭化物などがみられた。埋土内から土師器甕（270～273）、壺、焼土塊などが出土した。５世紀中頃から６世紀に比定される。

小結

３区では、上面で条里型地割に沿った方向を示す直線的な溝を検出した。１・２区でみられた溝1733との間隔が約11ｍを示すことから、長地型の地割を行なっていたものと推測される。

下面では、調査区の南西部で、河川埋没後井戸を伴う掘立柱建物から成る集落を形成することが確認できた。河川1694の北側では、河川埋没後しばらく浅い窪地状を呈していたらしく、３区内では埋没河川上に建物が建てられた痕跡は認められなかった。

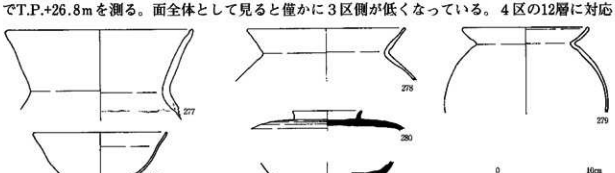
２）３区東半部の調査（第７・49図・図版10）

土層は基本的に３区と同じである。遺構面は２面確認した。

第１遺構面は白色粘土上面で、高さは３区側でT.P.+ 26.85ｍ、４区側でT.P.+26.8ｍを測る。面全体として見ると西北方向にわずかに低くなっている。遺構は調査区中央で鉤形に屈曲する溝を１条検出しただけである。

SD1638は調査区東南面のほぼ中央から西北方向に直線的に4.7ｍ伸び、ほぼ直角に東北方向に屈曲し直線的に約４ｍ伸び、ほぼ直角に西北方向に湾曲し、直線的に約２ｍ伸びて調査区域外へと続く。幅0.2～0.3ｍ、深さ0.05ｍを測り、断面形状は浅い皿状である。埋土は溝底に薄く白色砂があり、その上に灰色粘土が堆積していた。埋土の白色砂は溝が機能していたときの堆積と考えられるが、灰色粘土は第２遺構面を形成する白色粘土の上層に堆積していた灰色粘土と同じで、溝の内部だけが別に埋まったのではなく、上層の堆積により溝内も同時に埋まったようである。遺物は出土しなかった。ただ上層の灰色粘土からは瓦器碗の破片が出土しており、中世を大きく遡るような時期の遺構ではないと考えられる。

第２遺構面は白色粘土を除去した茶褐色シルト上面で、高さは３区側でT.P.+26.75ｍ、４区側でT.P.+26.8ｍを測る。面全体として見ると僅かに３区側が低くなっている。４区の12層に対応



第49図　３区　遺構内出土遺物②

すると考えられる。遺構は溝を１条と土坑を１基、３区側で検出しただけである。

SD1508は調査区東南面西南端から西北方向に３ｍ伸びて終わる溝である。幅約0.6ｍ、深さ0.1ｍを測り、断面形状は浅い皿状である。埋土は黄灰色粘土に黒褐色粘土が少量混じるブロック土である。遺物は土師器の甕の破片が出土した。時期的には古墳時代前期の遺構と考えられる。

SK1509はSD1508の南西約2.5ｍで検出した不整楕円形の土坑である。長軸が東西方向を指す。長径1.6ｍ、短径1.1ｍ、深さ0.2ｍを測り、断面形状は浅い碗状である。埋土は黄灰色粘土に黒褐色粘土が少量混じるブロック土である。遺物は土師器の甕と高杯の破片が出土した。時期的には古墳時代前期の遺構と考えられる。

第１遺構面を形成する白色粘土からは遺物が出土しなかった。白色粘土よりも上層では瓦器破片が出土するが、下層では瓦器破片は出土せず、古墳時代の遺物が出土した。また、白色粘土は４区側が低くなっているにもかかわらず、４区に近づくにつれ薄くなりなくなってしまう。４区ではこの白色粘土は確認できなかった。この付近での基本的な流れが東西方向であるためかもしれない。この白色粘土層は各土層から出土する遺物の状況から、古代～中世初期に堆積した土層と考えられ、当遺跡での時代を分けるキー層になる可能性がある。

第２遺構面は４区12層上面に堆積する土層であったと考えられることから、調査区東北から西南に下層確認のトレンチを設定した。４区から５ｍのところで４区14層が部分的に高くなっており、そこから西南側に急に傾斜して約0.6ｍ低くなり、そのまま３区に続くことがわかった。低い部分には茶褐色シルトが溜まっているが、下に行くほど茶色が薄くなっていくだけでほとんど同じ土層と考えられる。この層から土器等の遺物は出土しなかったが、急傾斜して落ち込む部分でサヌカイトの剥片（731）が１片出土した。時期は不明である。

７．４区の調査（第７・50図・図版11）

住宅東面の外周道路拡張部分であり、幅3.5ｍ、延長93.0ｍの東南から西北に長いトレンチを設定した。深さ1.0ｍ以下の掘削は幅1.0ｍのテラスを設けて掘り下げる設計であったため、実際の調査は幅1.5ｍ、延長92.0ｍとなった。現地表面の高さは東南端～58ｍまではT.P.+28.8ｍ、59ｍ～西北端まではT.P.+28.6ｍを測る。

基本土層は14層であった。

１層は盛り土で、南端～39ｍまでは層厚0.6ｍ、39ｍ～北端までは層厚0.8～1.0ｍを測る。下面の高さは南端～39ｍまではT.P.+28.2ｍ、40～41ｍはT.P.+27.8ｍ、41ｍ～45ｍまではT.P.+28.0ｍ、45ｍ～50ｍまでは斜面で、50ｍでT.P.+27.6ｍ、50ｍ～北端まではT.P.+27.6ｍを測る。

２層は灰黒色土で旧耕作土である。層厚0.1～0.2ｍを測る。南端下面はT.P.+28.1ｍ。南端～38ｍまでは同じ高さで続き、38～39ｍ付近で高さ約0.2ｍの畦となる。40ｍでは水田面が１段低くなり、下面はT.P.+27.6ｍとなり、北端まで同じ高さで続く。ただ45ｍ付近まで層厚は0.1ｍあるが、少しずつ削平され50ｍ付近ではほとんど無くなってしまう。近現代の遺物を含んでいる。

3層は灰白色土で層厚0.05ｍを測る。南端から38ｍ付近までであり、１段高い水田耕作土の下にある。遺物は出土しなかった。

4層は灰色土で、層厚0.1ｍを測る。下面はT.P.+28.1ｍを測る。21ｍで10層が畦状にT.P.+28.1ｍまで盛り上がっており、そこでなくなってしまう。旧耕作土と考えられる。遺物はほとんど出土しなかった。

5層は灰色土で層厚0.2ｍを測る。下面はT.P.+27.8ｍを測る。４層と同じく21ｍで畦状の10層にあたってなくなってしまう。旧耕作土と考えられる。遺物はほとんど出土しなかった。５層の下には層厚0.05～0.1ｍの灰褐色粘土（A）が４ｍ～13ｍの間にあり、５層を耕作土とする水田造成時の整地土と考えられる。遺物は出土しなかった。

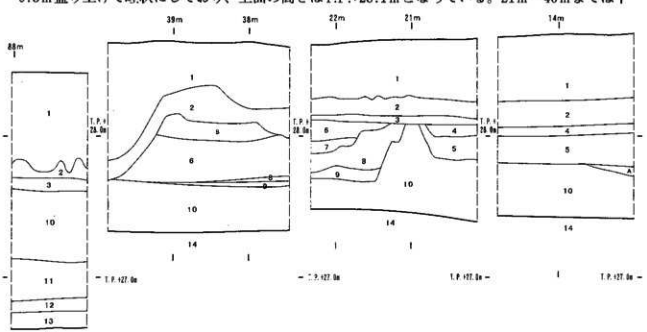
6層は灰褐色土で層厚0.15～0.2ｍを測る。21ｍの10層の盛り上がりから39ｍまで続き、２層を耕作土とする水田の段で途切れてしまう。４層を耕作土とする水田に対応する水田の耕作土と考えられる。38～39ｍで褐色土（B）が0.15～0.2ｍの厚さで６層の上に載っており、畦状になっている。遺物は出土しなかった。

7層は灰白色土で層厚0.05ｍを測る。21ｍから始まり35ｍでなくなる。遺物は出土しなかった。

8層は灰褐色土で層厚0.1～0.15ｍを測る。21ｍから始まり39ｍでなくなる。遺物は出土しなかった。

9層は灰白色土で層厚0.05ｍを測る。21ｍから始まり39ｍでなくなる。下面の高さはT.P.+27.6ｍを測る。遺物は出土しなかった。

10層は灰褐色粘土で、層厚は場所によりかなり異なる。南端の下面はT.P.+27.8ｍで、層厚は0.3ｍを測る。20ｍで下面の高さはT.P.+27.5ｍで、層厚は0.3ｍを測る。21ｍで同色粘土を台形状に0.3ｍ盛り上げて畦状にしており、上面の高さはT.P.+28.1ｍとなっている。21ｍ～40ｍまでは下



第50図　４区　土層断面模式図

面の高さはT.P.+27.5m～T.P.+27.35mに緩やかに傾斜しているが、層厚が0.1mから0.3mと緩やかに厚くなっており、上面の高さはT.P.+27.7m～T.P.+27.65mと僅かに低くなっている。10層は8・9層を耕作土とする水田を造成するために上部を削平されたものと考えられる。40～41m付近からは上面が約0.2m低くなり、溝状を呈する。一番新しい水田のための溝と考えられる。41m～92mまでは層厚が0.5～0.6mあり、2層を耕作土とする水田の床土となっている。下面の高さは92mでT.P.+27.1mを測る。遺物は瓦器・土師器の小破片を僅かに出土した。

11層は10層と同じく灰褐色粘土であるが、粘質が強く混じりの少ない粘土である。45m付近から始まり、70m付近までは層厚0.1mを測るが、そこから次第に厚くなり、92m付近では0.3mを測る。下面の高さは70m付近ではT.P.+27.1mを測るが、92m付近ではT.P.+26.8mを測る。遺物は瓦器・土師器破片を少量出土した。

12層は黄褐色粘土で、40m付近から始まり92mまで層厚0.1mの同じ厚さで続く。下面の高さは40m付近ではT.P.+27.1mを測るが、緩やかに傾斜し、92m付近ではT.P.+26.7mを測る。上面でSD1445・SK1389を検出した。遺物は土師器の細片以外ほとんど出土しなかった。

13層は灰色粘土で、12層と同じく40m付近から始まり92mまで層厚0.1mの同じ厚さで続く。下面の高さは40m付近ではT.P.+27.1mを測るが、緩やかに傾斜し、92m付近ではT.P.+26.6mを測る。遺物は土師器の細片以外ほとんど出土しなかった。

14層は黄白色粘土で地山である。上面の高さは東南端でT.P.+27.45m、西北端T.P.+26.6mを測る。上面でSK1385・Pit1386・SK1387・1388・1498・1501を検出した。

遺構面は第12層上面で1面確認した。遺構は溝1条・ピット6基・土坑2基・落ち込み1基を検出した。3区東半部の第1遺構面に対応する面は明らかではなく、第2遺構面に対応する面であると考えられる。

SD1445は東南端から39mで検出したほぼ東西方向に伸びる溝である。幅1.1～1.5m、深さ0.1mを測る。埋土は褐色土で、土師器の小破片が多量に出土した。

SK1387は東南端から30mで検出したほぼ円形の柱穴である。直径0.4m、深さ0.4mを測る。埋土は灰色土と黄灰色粘土のブロック土である。深さ約0.25mで東南よりに直径0.12mの柱痕を検出した。柱痕内の埋土は灰黒色粘土である。遺物は土師器の小破片を出土したが、時期・器種等の詳細は不明である。

SK1388はSK1387から1.5m西北で検出した不整円形の柱穴である。直径0.4m、深さ0.45mを測る。埋土は灰色土と黄灰色粘土のブロック土である。深さ約0.25mでほぼ中央に直径0.1mの柱痕を検出した。柱痕内の埋土は灰黒色粘土である。遺物は出土しなかった。

SK1501はSK1387から1.5m東南の側溝内で確認した柱穴である。直径0.4m、深さ0.4mを測る。埋土は灰色土と黄灰色粘土のブロック土である。東南よりに直径0.1mの柱痕を確認した。遺物は出土しなかった。SK1501・1387・1388は柱痕間隔1.5mでほぼ直線的に並ぶが、西北方向には続かない。SK1388が建物の隅柱となり、北側に建っていた建物と考えられる。出土遺物からは

古墳時代の可能性もあるが、柱の大きさからは中世の建物ではないかと考えられる。いずれ調査が進めば明らかになるであろう。

SK1498はSK1387とSK1388の間にある長軸がほぼ西を指す楕円形のピットである。長径0.4m、短径0.3m、深さ0.1mを測る。埋土は白色の砂であり、古墳時代の土師器の甕が西向きに寝かされた状態で出土した。深さが0.1mしかなく、甕の約1/3が残っていただけである。

Pit1386はSK1387から約4m東南で検出した不整円形の小穴である。直径0.2m、深さ0.2mを測る。埋土は灰褐色粘土である。遺物は出土しなかった。

SK1385は東南端から18mの西南面で検出した不整形の土坑である。調査区外に続くため規模の詳細は明らかでないが、検出幅0.8m、検出長0.5m、深さ0.1mを測る。埋土は下端に薄く白色砂があり、その上に灰色粘土が堆積していた。遺物は出土しなかった。

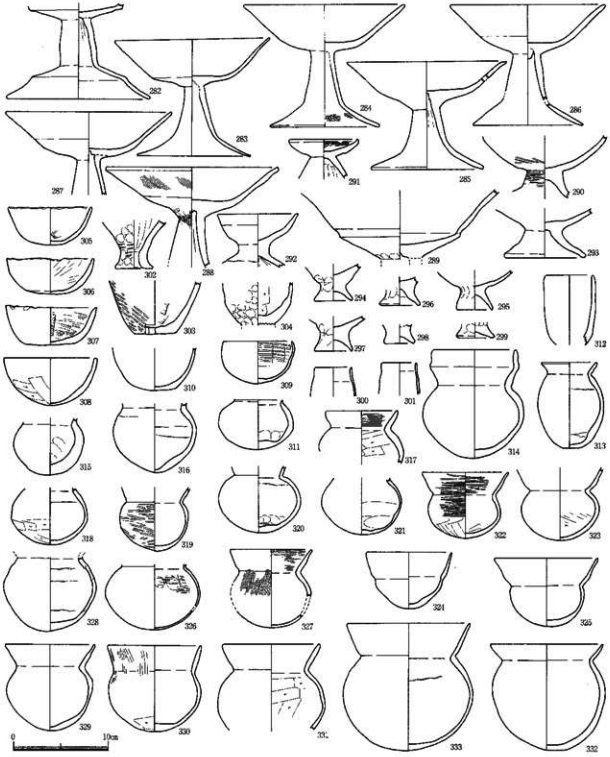
SK1389はSD1445から約3m西北の調査区西南面で検出した土坑である。部分的な検出で、形状の詳細は不明であるが、長軸が西北を指す楕円形と考えられる。検出長1.6m、検出幅0.4m、深さ0.15mを測る。埋土は茶褐色土で、埋土上面で古墳時代後期と考えられる須恵器甕の破片を出土した。

4区では12層上面で古墳時代の遺構を検出したが、古墳時代の土器を出土する層は12・13層しかなく11層よりも上層では瓦器片が出土する。2・3層、4・5層、6・7層、8・9層は、偶数層は灰色が強く層が厚く、奇数層は白っぽく層が薄い。これらは偶数層と奇数層がセットとなって、耕作土をなしていたものと考えられ、それぞれが水田であったと考えられる。8・9層と4・5層が最初にできた2段の水田の可能性がある。その後8・9層の上に6・7層を積み上げて4・5層と同じ高さの水田としたが、水田面は2面に分かれている。最後に2・3層を全体に盛って4・5層、6・7層上面を1面の水田とし、東南端から40m付近から西北を1段低い水田面としたと考えられる。最初の水田がいつ作られたかは明でないが、中世後半から近世初頭にかけてではないかと考えられる。

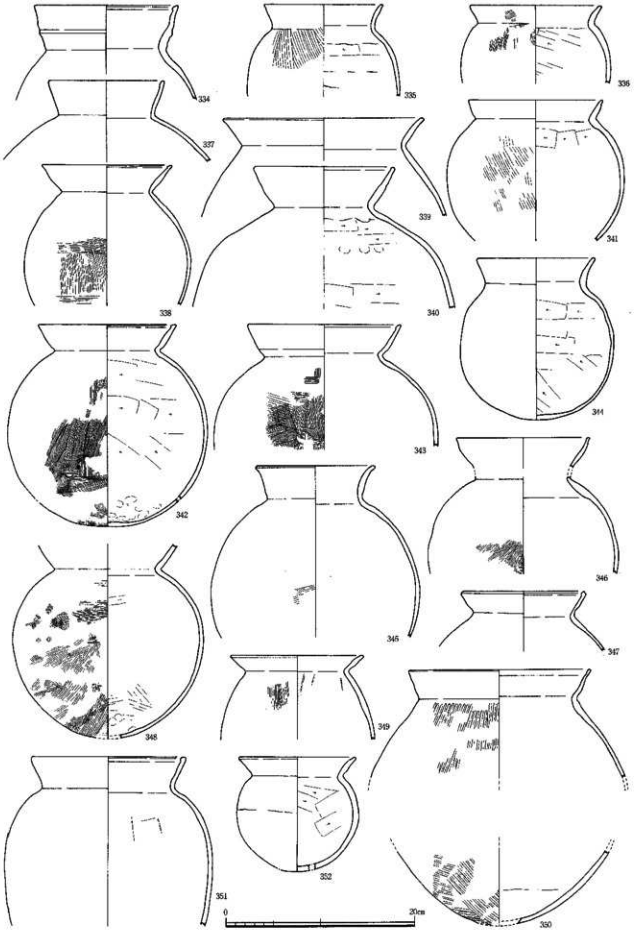
(藤沢　眞依)

8．河川内出土遺物　（第51～67図・図版19～26）

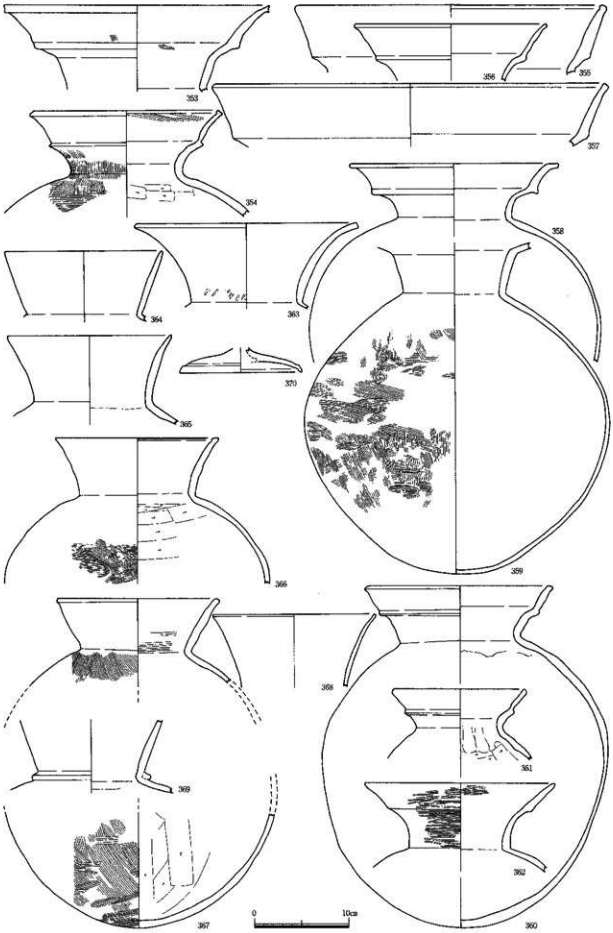
河川内からは遺物が大量に出土した。コンテナ数では250余箱を数える。復元、実測できたものはごく僅かである。土師器、須恵器の他、滑石製臼玉や有孔円板、紡錘車などの石製品や鉄滓、砥石など鍛冶に関連する遺物も出土している。河川内上層からは初期須恵器を含む須恵器蓋杯、高杯、甕、壺、甕、器台などが出土した。下層からは、土師器高坏、壺、甕、小型丸底壺、製塩土器などが出土した。



第51図　河川1500出土遺物①

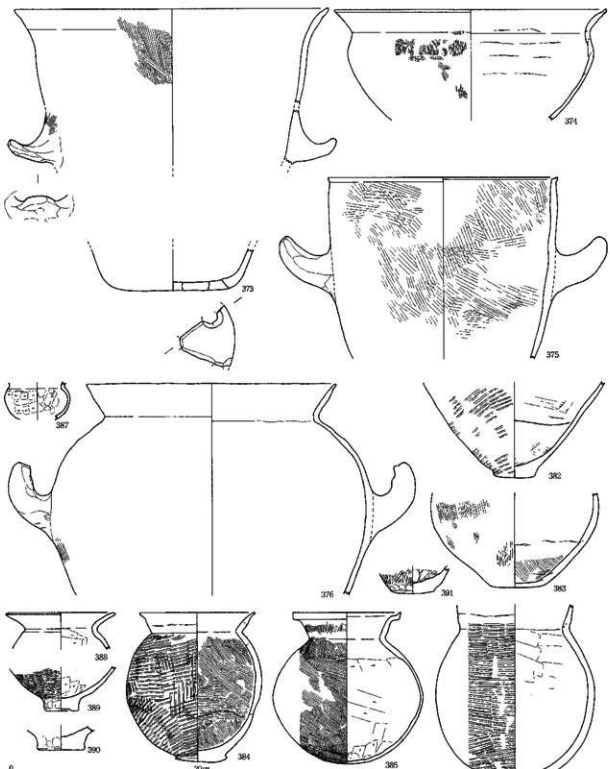


第52図　河川1500出土遺物②

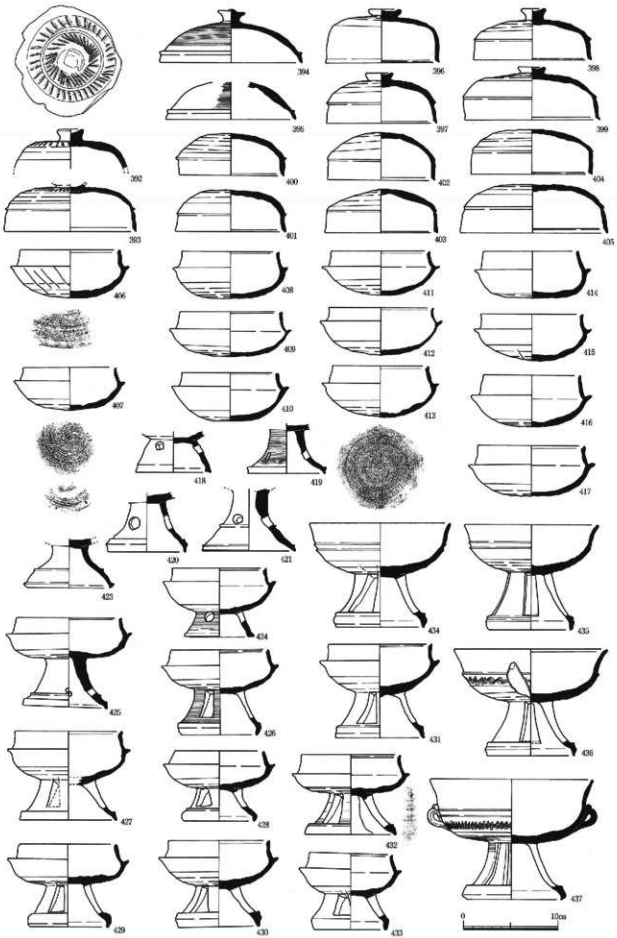


第53図　河川1500出土遺物③

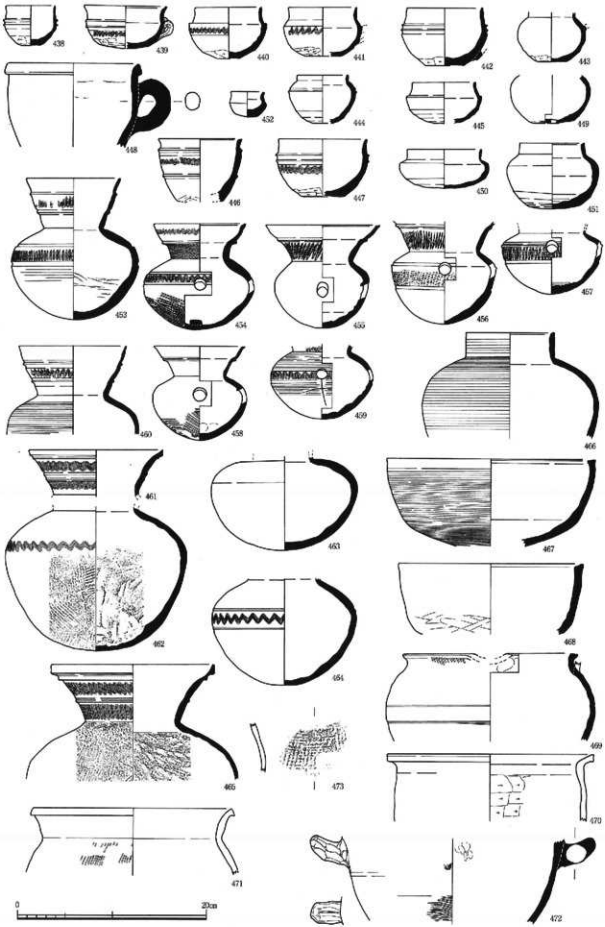
河川1500内から出土した土師器は、高坏、小型丸底壺、二重口縁壺、甑、鍋などの把手が多くみられた。また、製塩土器脚部も多く出土した。出土した土師器は、磨耗が著しく細片が多かったため、コンテナ数では須恵器片より多く出土しているが、復元、実測することができなかった。下層河川からは、外面に叩きを施す甕（384～386）や弥生土器（382･383）などが出土している。



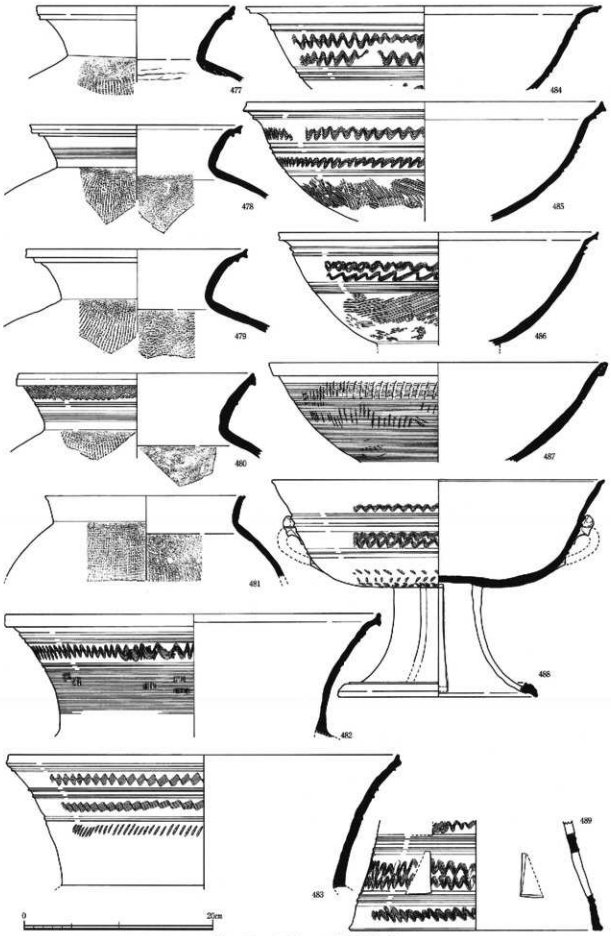
第54図　河川1500出土遺物④



第55図　河川1500出土遺物⑤



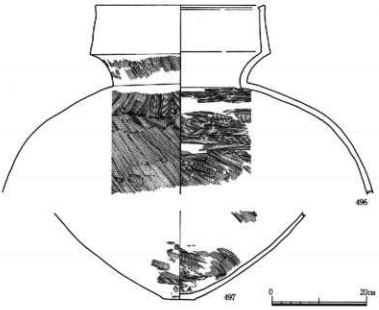
第56図　河川1500出土遺物⑥



第57図　河川1500出土遺物⑦

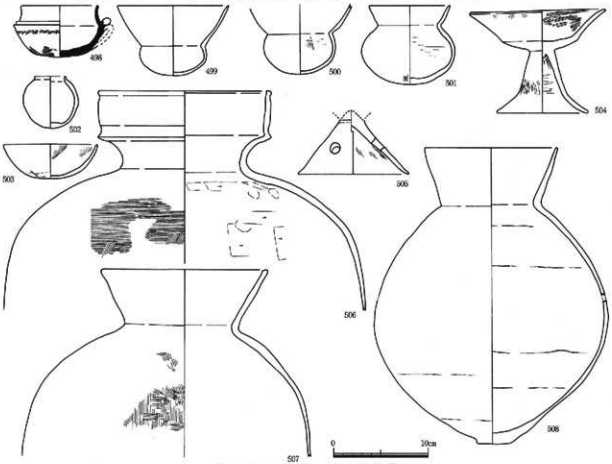
河川1500内から出土した須恵器は、杯蓋、杯身、高杯、甕、把手付椀、壺、甕、器台などがみられた。瓦質土器片（470・471）や韓式系土器甕片（473・474）、瓦質土器土管片なども出土している。

出土した須恵器の中には、初期須恵器がふくまれていた。天頂部に列点文を施す杯蓋（392・393）、カキ目を施す杯蓋（394・395）、底部に静止ヘラ削りを施す把手付椀（446～448・438～442）、短脚高杯などがみられた。TK－73に相当すると考えられる。

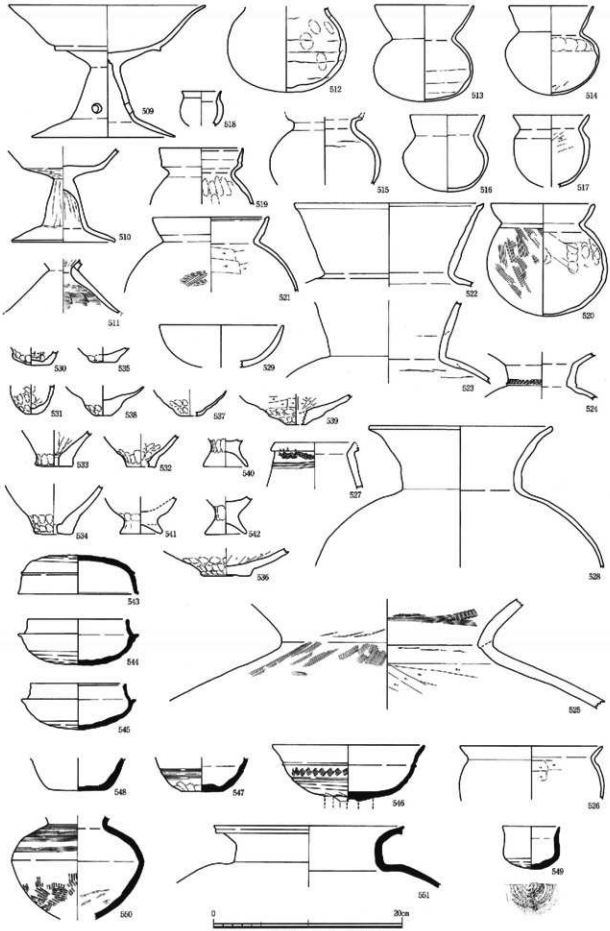


第58図　河川1500出土遺物⑧

河川内から出土した須恵器で特殊なものとして、大型高杯（488）（第57図・巻頭図版）がある。大型高杯は口径34.8cm、高さ23cmを測る。杯部外面には二条の突帯を配して文様を施し、蕨状の装飾を伴う耳が付く。杯底部には密な刺突文を列点状に施す。脚部は杯部に対して小さくやや歪んでいる。実用的なものではなく、祭祀などに用いられたものと考えられる。



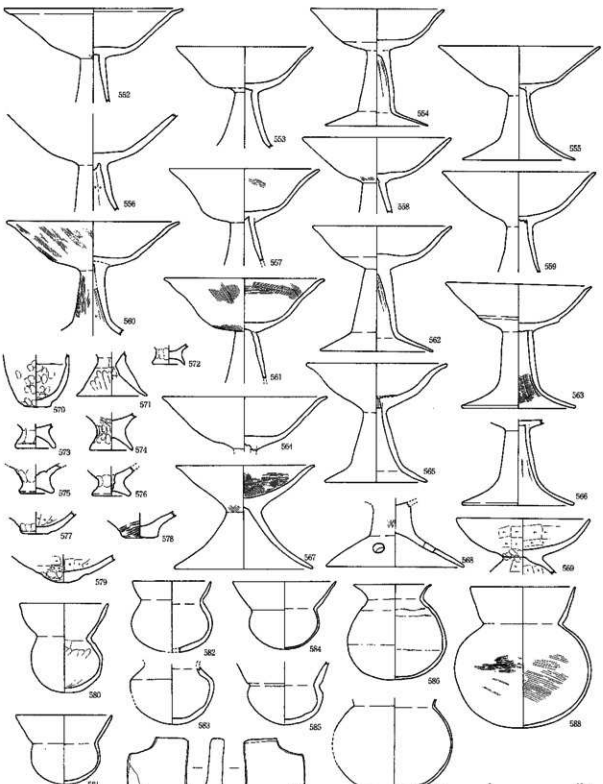
第59図　河川1500出土遺物⑨



第60図　河川1500出土遺物⑩

河川1694・1692から出土した遺物は、河床面で設置されたごとく列状に並ぶ様子がうかがえた。特に土師器壺、甕、高坏と小型丸底壺である。河川1694の南岸部で顕著にみられた。

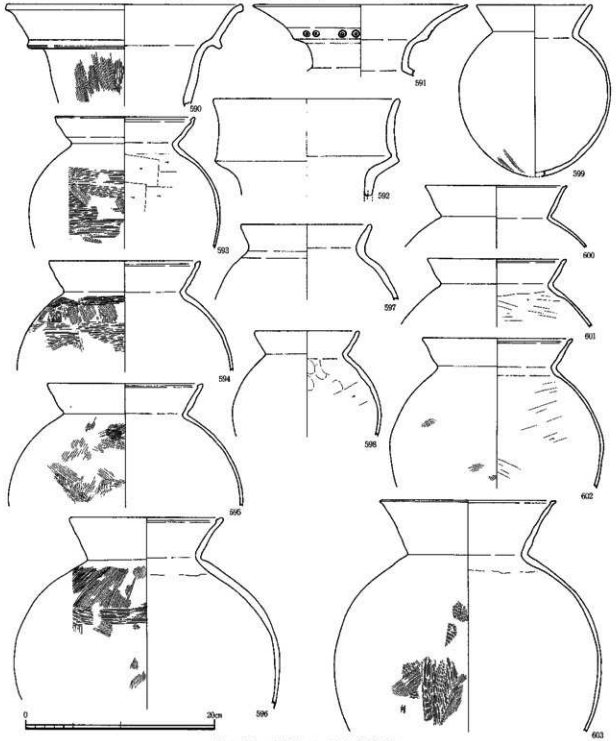
製塩土器脚部も多く出土している。このほか、鉄滓（757）や鞴羽口（765・768）、軽石（769）などが出土した。周辺に鍛冶関連遺構が存在するものと推察される。



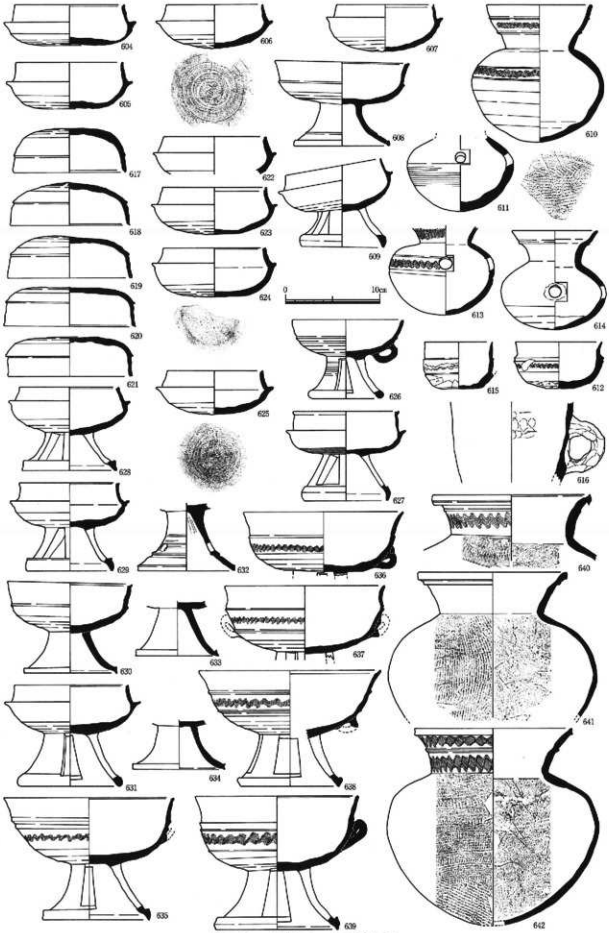
第61図　河川1694出土遺物①

河川1694の埋没後、上層は浅い窪地状を呈しており、その中に数多くの遺物がみられた。土器溜まり1696で、須恵器杯身（604～607）、高杯（608･609）、壺（610）、甕（611）、静止ヘラ削りを施す把手付椀（612）、大甕（671･673）などが出土した。出土した遺物は、概ね５世紀後半から６世紀初頭頃に比定される。

溝1693は、河川1694が埋没した後に開折された溝で、溝内埋土から須恵器杯身（647）、高杯（648）、甕（649）、壺（650）、土師器高坏（651）、小型器台（652・653）、製塩土器脚台（654）などが出土した。出土した遺物は、概ね５世紀後半から６世紀初頭頃に比定される。

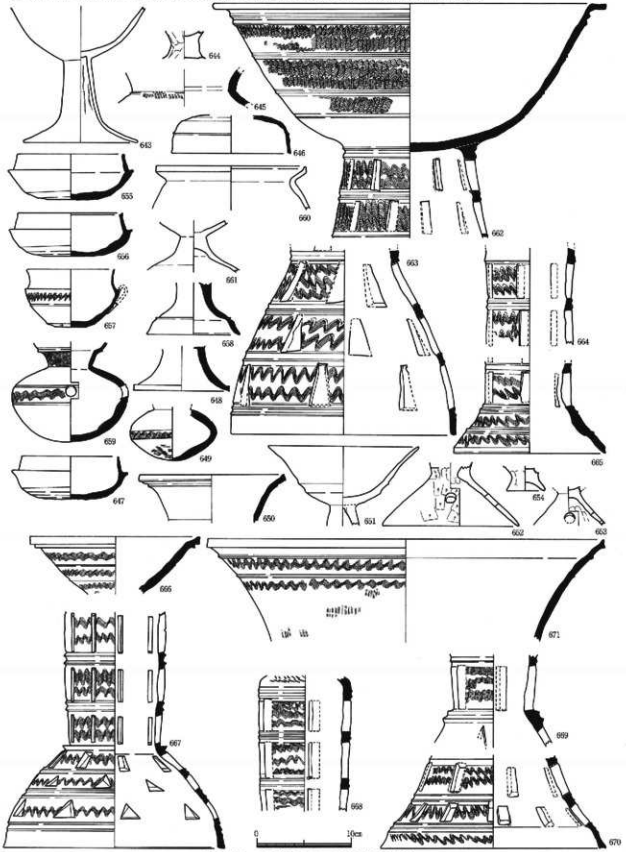


第62図　河川1694出土遺物②



第63図　河川1694出土遺物③

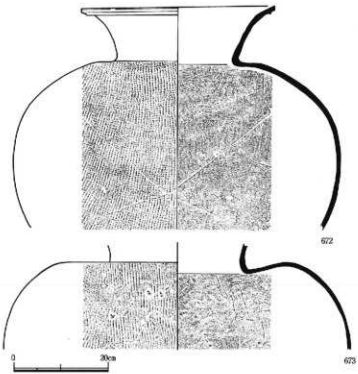
溝1867は、溝1693同様河川1694が埋没した後に開折された溝で、溝内埋土から須恵器甕（645）、杯身（646）、土師器高坏（643）、製塩土器脚台（644）、夥しい数の須恵器杯身、杯蓋、高杯、甑、韓式系土器底部などが出土した。概ね５世紀中頃から後半頃に比定される。



第64図　河川1694・1692出土遺物

河川1692・1694から須恵器器台（662～670）片が多く出土したが、完全に復元するには至らなかった。図化できなかったものも含めると、20余個を数える。日常的な用具でないことから、祭祀などに用いられたものと考えられる。

土器の他、河川内から出土した遺物として、叩き石や砥石などの石製品や、滑石製臼玉、有孔円板、紡錘車などの石製品、剥片、スクレパーなどの石器類、グリーンタフ、紅簾片岩などの石材がみられた。また、鉄滓、鞴羽口、軽石などの鍛冶関連資料（9．鍛冶関連資料）が出土している。



第65図　河川1694出土遺物④

叩き石（674～680）は棒状のものが多いが、いずれも両端を使用している。すり石（682）は表面を使用し、皿状を呈す。砥石（684～689）は欠損するものが多いが、多面を使用しており磨り減っている。一様に使い込まれた様相がうかがえる。

河川内から滑石製臼玉（690～714）、有孔円板（718）、紡錘車（719）などが出土した。滑石製臼玉の多くは、調査の終盤頃、河川内の遺物を個別に取り上げる余裕がなく、粘土付きの固まりで遺物を取り上げていた。後日遺物整理をしていた際、須恵器高杯の杯部内から臼玉がみつかった。また、一緒に取り上げた粘土内からも臼玉が幾つかみつかった。調査時には臼玉にまったく気づかなかったため、粘土ごと取り上げたコンテナ以外からは、臼玉は検出されなかった。ほぼ完形の須恵器高杯内やその周辺から臼玉が検出されたことから、河川1500のテラス状に広がる浅瀬部で祭祀的な行為が行われていたものと推測される。このほか、河川内からサヌカイト剥片（727）、楔形石器（728）、スクレイパー（730）などが出土した。他の剥片は、包含層中での検出である。磨製石剣（732）も包含層からの出土である。

河川1500の河床付近から、ノート大の大きさで長さ約40cm、厚さ約３cmの板状の緑泥片岩（734）を検出した。加工する前の石材で、運びやすいように板状にしたものと推測される。また、グリーンタフ（733）、紅簾片岩（737）、白石（735・736）などの石材も出土した。いずれも、当地周辺で採集されるものではなく、緑泥片岩は和歌山県紀ノ川沿い、グリーンタフは出雲周辺ないし北陸地域、紅簾片岩は徳島県吉野川中流域が産地であることから、搬入されたものと考えられる。緑泥片岩は、松尾川対岸に位置する摩湯山古墳などでも出土しており、その関連が想起される。

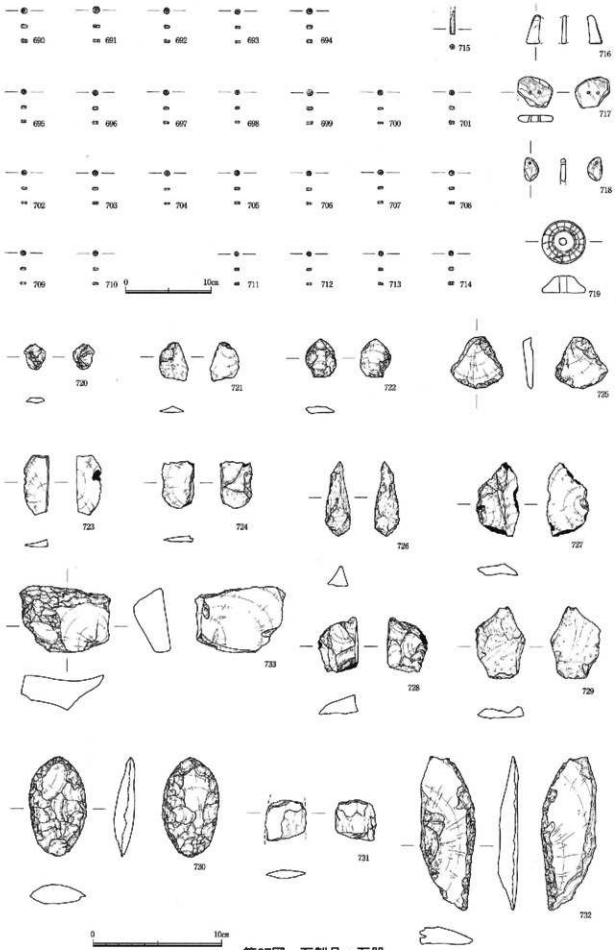
交易品で搬入されたものとして、河川底から出土した土師器大甕（497）や土師器甕（506）が

ある。口縁部が直立して上方に伸びるもので讃岐産とみられる甕である。大甕は口径約36㎝、体部最大径約80㎝を測る。このように大きな甕や石材などを搬入する交易ルートを持っていたと考えられる。

竪穴住居1499に近接する河川内から、鉄滓、鞴羽口、砥石などが多く出土している。竪穴住居1499は鍛冶関連の作業場であると考えられることから、近接するか河川内に投棄した可能性がうかがえる。

河川内から出土した遺物から、河川内上層部（河川内第１～３層）の河川埋没時堆積層では、須恵器、土師器など数多くの遺物が出土し、概ね５世紀後半から６世紀初頭頃に比定される。河川内中層部（河川内第４・５層）では、河川が流水堆積を示し初期須恵器が出現する時期前後に相当する。概ね５世紀前半から中頃に比定される。河川内下層部（河川内第６層・下層河川）では、河川が流積を繰り返していた時期で、概ね４世紀台に比定される。

第66図　石器


690
691
692
693
694
715
716
695
696
697
698
699
700
701
717
702
703
704
705
706
707
708
718
709
710
711
712
713
714
719
0
10cm
720
721
722
725
723
724
726
727
733
728
729
730
731
732
0
10cm

第67図　石製品・石器

9．鍛冶関連資料

鍛冶関連資料に鉄滓、羽口、軽石、鋳造鉄斧がある。(1)

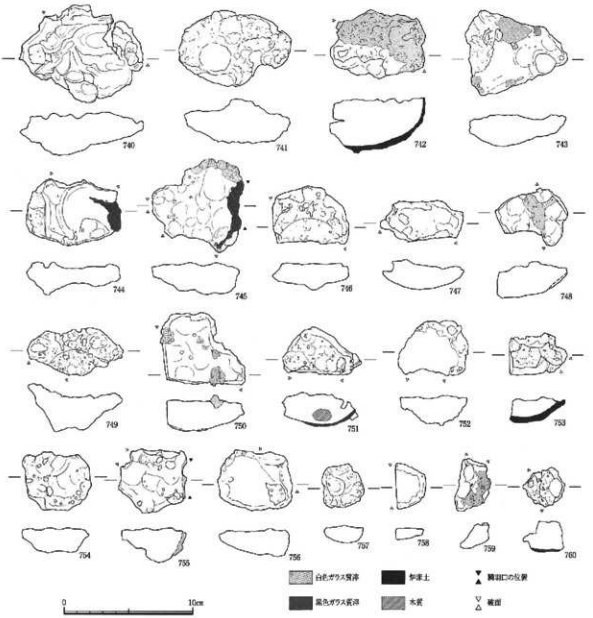
鉄滓（第68図・表３・図版24）

鉄滓の総重量は1550ｇ。細片を除く21点を掲載した。鉄滓の出土遺構は表３のとおり。各遺構では、小岩江北式～船橋０－Ⅰ併行期の土層から出土している。

全て椀形滓。742のように厚みがあり縦方向に溜まったもの、744～746のように薄く横方向に生成したものがある。炉床土の付着する資料には丸みのある742や扁平気味な753があり、炉底形状の異なる複数の鍛冶炉の存在が予測される。

完形資料は741、754、757の３点。破面資料が多いけれど、２㎝以上５㎝未満（小形）、５㎝以上８㎝未満（中形）、８㎝以上10ｍ未満（大形）の３群にまとまるようだ。

酸化土砂は749を除く全てに付着する。地の色調はオリーブ色・暗緑灰色である。全般に上面



第68図　鉄滓

表３　鉄滓計測表

番号	長軸長(cm)	短軸長(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	質	色調	遺存度	磁着度	メタル度	出土遺構
740	9.7	7.5	3.3	201.0	緻密	10GY4/1暗緑灰色	破面	2	なし	1区河川1500
741	8.5	6.0	3.3	127.9		10GY4/1暗緑灰色	完形	2	なし	1区河川1500
742	7.5	5.5	3.5	126.4	緻密	10G6/1青灰色	破面	3	なし	1区河川1500
743	7.7	6.5	2.5	97.2		10G4/1暗緑灰色	完形	3	なし	1区河川1500
744	7.3	5.0	2.5	75.2	緻密	2.5GY6/1オリーブ灰色	破面	3	なし	1区河川1500
745	6.7	7.2	2.5	96.2	粗	10BG5/1青灰色	破面	4	△(錆化)	1区河川1500
746	6.0	4.4	2.0	57.8	緻密	2.5GY5/1オリーブ灰色	破面	2	なし	1区河川1500
747	6.5	3.1	2.0	38.4	粗	2.5GY4/1暗オリーブ色	破面	2	なし	1区河川1500
748	5.7	4.5	2.5	46.2	緻密	5BG6/1青灰色	破面	3	なし	1区河川1500
749	7.0	3.7	3.8	65.7	緻密	2.5GY6/1オリーブ灰色	破面	2	なし	5区大溝
750	6.0	5.5	2.5	118.5	緻密	5G5/1緑灰色	破面	3	なし	1区河川1500
751	5.5	3.2	2.5	59.2	粗	5B2/1青灰色	破面	4	△(錆化)	1区河川1500
752	5.2	4.2	2.0	39.5	粗	5G4/1暗緑灰色	破面	2	なし	1区河川1500
753	4.5	3.5	2.0	53.1	緻密	5P5/1紫灰色	破面	2	なし	1区河川1500
754	5.0	4.5	2.0	44.1		5G4/1暗緑灰色	完形	3	なし	1区河川1500
755	5.0	5.0	2.5	60.7	粗	2.5GY5/1オリーブ灰色	破面	2	なし	1区河川1500
756	5.8	4.5	2.0	80.0	緻密	2.5GY3/1暗オリーブ灰色	破面	2	なし	1区河川1500
757	3.4	3.2	1.4	20.2		10Y3/1オリーブ黒色	完形	3	△(錆化)	3区河川1694
758	2.7	3.7	0.8	8.0	粗	2.5GY4/1暗オリーブ色	破面	2	なし	1区河川1500
759	4.1	2.5	2.1	12.9	粗	10G5/1緑灰色	破面	3	なし	1区河川1500
760	3.0	2.1	2.0	35.1	粗	7.5GY4/1暗緑灰色	破面	2	なし	1区河川1500

と底面は、気孔や木炭痕による大小の凹凸がある。743の木炭痕状の凹部には木質が残り、751破面には炭化した径1.5cmの小枝が食い込む。木炭に加え、小枝や木屑が炉内に投入されていたのであろう。744は上面に鉄塊が生成された時の痕跡と考えられる浅く平坦な窪みがある。(2)

742～745、748、750、755は、羽口や炉壁の溶解したガラス質滓が付着する。なかでも745、755は羽口直下で生成した鉄滓で、縁にガラス質滓が弧状に付着する。

輸羽口（第69図・第71図・表４・図版24）

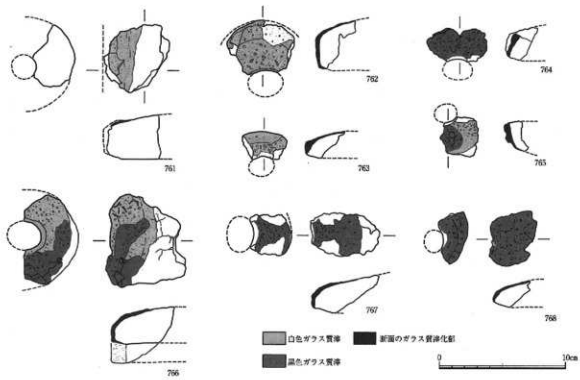
羽口先端部の破片が15点ある。図化資料は８点（第69図）。羽口の出土遺構は表４のとおり。各遺構では、小若江北式～船橋０－Ⅰ併行期の土層から出土している。

後端部送風管取り付け部の形状は不明だが、外形を基準に、筒形と推定されるⅠ類とハの字形に開くⅡ類に大別した。Ⅰ類は761・762と763・768の比較から明らかなように、外径にばらつきがある。外径、先端部端面の幅、通風孔径の違いによってⅠａ（大）、Ⅰｂ（中）、Ⅰｃ（小）に細分した（第71図、表４）。

胎土は砂礫が目立つ。761、767は籾殻などのすさが混和されている。羽口の突出部は、白色ガラス質滓、黒色ガラス質滓に変化している。766は黒色ガラス質滓部の一部に光沢があり、764は溶解物が垂れ始めている。しかし概して先端部は溶解が弱く、白色ガラス質滓が優勢である。また黒色ガラス質滓も多孔質が目立ち、低温鍛冶、あるいは短い操業時間で使用された羽口と推定される。設置角度は761が約10度、766が約25度である。

鋳造鉄斧（第70図・図版25）

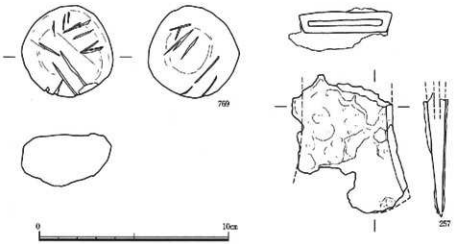
鍛冶工房の可能性が高い竪穴住居1499に隣接する土抗1507から、鋳造鉄斧が１点出土している。



第69図　鞴羽口

番号	形式分類	現存長(cm)	最大外径（cm）	孔形	孔径（cm）	突出長(cm)	重量（g）	出土遺構
761	Ⅰa	5.2	8.8	円形	2.0	3.0	58.8	5区大溝
762	Ⅰa	3.2	10.2	楕円形	2.0～3.0	3.0以上	31.1	5区大溝
763	Ⅰc	3.1	5.8	楕円形	1.5～2.0	3.0以上	15.6	1区河川1500
764	Ⅰb	2.5	7.0	楕円形	1.7～2.5	1.8	23.4	1区河川1500
765	Ⅰb	1.7	6.1	楕円形	1.5～1.8	1.5	18.5	3区河川1692
766	Ⅰb	6.3	8.0	楕円形	2.3～2.7	3.5	117.2	5区大溝
767	Ⅱ	5.3	8.2	楕円形	2.0～3.0	4.0	34.1	1区第4層
768	Ⅰc	2.9	5.5	楕円形	1.7～2.0	3.0以上	17.1	3区河川1692

表4　鞴羽口計測表（外径・孔径は復元数値）



第70図　鋳造鉄斧・軽石

しかも土抗1507は竪穴住居1499と同時期（小若江北式～船橋O－Ⅰの併行期）なので、竪穴住居1499に関連する遺構だと考えてよい。古墳時代前期・中期の鋳造鉄斧は、大阪府森遺跡や奈良県

南郷遺跡などのように鍛冶関連資料に伴う場合が多く、鍛冶原料の廃鉄器となろう。

袋部の大半と刃部の一部が欠損している。現存長7.2cm。上面左右の稜線は突線気味である。袋部の横断面は横長の台形で、袋部から刃部にかけて外方向に反る。刃部幅は推定6.5cm。本資料は上面に突線がつかない梯形型で、製作地は洛東江・南江流域と推定されている。(3)岡山県金蔵山古墳出土例品とともに、古墳時代の鋳造鉄斧では古い例になろう。

軽石（第70図・図版25）

河川1694出土である。平面は径約５cmの略円形で、厚さは2.5cmをはかる。両面に鋭いＶ字状の傷があり、刃の仕上げで使われた砥石だと推定される。

小結

1　操業期間が小若江北式～船橋Ｏ－Ⅰの併行期に限定された４世紀後半～末の資料である。

2　鉄塊生成時の痕跡と考えられる浅く平坦な窪みを持つ鉄滓や鍛冶原料と考えられる鋳造鉄斧が出土しているので、寺田は廃鉄器を再溶融するなど精錬鍛冶段階から操業していた可能性がある。ただし、今回の調査で出土した羽口は溶解が弱く、高温操業を証明するものではない。次年度以降に予定されている調査で鉄滓の金属学的分析を実施し、鍛冶段階を確定したい。

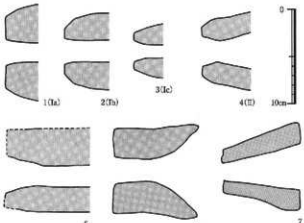
微細遺物（鍛造剥片、球状滓）や切断鉄片についての情報は、土壌の採取・洗浄等が実施されていなので不明である。

3　羽口は外形と通風孔形の違いからⅠ類・Ⅱ類に分かれる。鍛冶内容は不明だが、形式分化は鍛冶内容の多様性に対応すると考えられる。

Ⅰ類・Ⅱ類は、ともに肉厚の器壁で通風孔の先端が少し広がる。このような特徴は、軽量化が進み肉厚がなくなる５世紀の資料にはなく、近畿最古の高温操業用羽口である纒向遺跡勝山地区出土品(4)（第73図５・６）に確認できる。４世紀代の羽口の一つの特徴である。

纒向遺跡勝山地区出土の羽口（第71図５）は断面が蒲鉾形で、福岡県博多遺跡群出土羽口の特徴がよく残っている。ところが肉厚の造りで通風孔の先端が少し広がり、纒向遺跡勝山地区出土品のようなタイプから型式変化をとげた寺田資料の断面は、蒲鉾形ではなく円形に統一されている。断面が蒲鉾形の羽口は、４世紀後半～末頃には姿を消すのであろう。現在、最も新しい蒲鉾形羽口は、４世紀中葉の滋賀県蜂屋遺跡出土品である。(5)

５世紀になると、外形・孔形が八の字形で全長の短い羽口（第71図７）が急増するが、寺田Ⅱ類（第71図４）によって、このタイプの出現が４世紀にさかのぼることが明らかになった。



第71図　纒羽口の縦断面模式図

型式学的変化は、纒向資料（第71図６）→寺田Ⅱ類（第71図４）→大県資料（第71図７）となろう。　　（小山田宏一）

注１　鍛冶関連資料の観察では、主に次の文献を参考にした。
村上恭通「原三国・三国時代における鉄技術の研究」『青丘学術論集』第11集、1997年。
村上恭通『倭人と鉄の考古学』青木書店、1998年。
交野市教育委員会『古代交野と鉄』Ⅰ、1998年。
交野市教育委員会『古代交野と鉄』Ⅱ、2000年。
交野市教育委員会『古墳時代の鉄精錬・鍛冶再現実験記録』、2002年。
真鍋成史「鍛冶関連遺物」『考古資料大観』第７巻、小学館、2003年。
注２　真鍋成史「鍛冶関連遺物」『考古資料大観』第７巻、小学館、2003年。
注３　東　潮『古代東アジアの鉄と倭』溪水社、1999年。
注４　奈良県立橿原考古学研究所「桜井市纒向遺跡102次（勝山古墳第１次）」『奈良県遺跡調査概報』　1997年度、1998年。
注５　大道和人「滋賀県内の古墳時代の鍛冶について」『近江の考古と歴史』西田弘先生米寿記念論集、真陽社、2001年。

第71図の出典

１（寺田Ｉａ類）は羽口762、２（寺田Ｉｂ類）は羽口761、３（寺田Ｉｃ類）は羽口768、４（寺田Ⅱ類）は羽口767の模式図である。５は注４文献　図９－１の先端部、６は同図９－２の模式図。７は柏原市教育委員会『大県・大県南遺跡－下水道管渠埋設工事に伴う－』1985年、図44－586の模式図である。

第4章　まとめ

今回の寺田遺跡の発掘調査では、主に古墳時代前期から後期の竪穴住居と掘立柱建物で構成される集落域の一端を確認し、その集落の変遷をうかがうことができた。集落内における住居形態や建物の構造の変化は突発的に発したものではなく、その当時の社会情勢と密接に関わりがあると考えられる。特に、寺田遺跡の東側に位置する観音寺山遺跡、南側に位置する摩湯山古墳、近隣の陶邑窯址群、北側に位置する和気遺跡との関連を考える上で貴重な成果といえる。

今回の調査では、主に竪穴住居と掘立柱建物から成る建物、焼土坑を伴う鍛冶関連遺構、集落域を画する河川と溝、数多くのピットを検出した。特に、古墳時代前期から後期にかけての多種にわたる遺物が出土した。この地に暮らした多くの人々の営みを想起させるものといえる。

検出した建物は、掘立柱建物が28棟、竪穴住居が12棟であるが、調査時に判別、確定できなかったものもあることから、本来の住居数はさらに多いと推測される。住居の機能として、竪穴住居1499と近接する土坑1507からは、鉄滓、鋳造鉄斧、軽石、鞴羽口、砥石、叩き石などが出土し、鋳造関連の遺構であることが推測された。しかしながら、検出された建物の機能や性質を充分に検討するには至らず、集落を構成する建物の形態や配置、住居内の構造を考える上で、今後の課題になるものと思われる。

検出した建物遺構は、東から西方向に流れる河川を境に、北側(3区東半部、4区)では、遺構が一気に少なくなる状況がみられた。河川が集落域の北限であったと考えられる。周辺の地形や遺構の検出状況などから、寺田遺跡の集落の中心は今回の調査地から南西側に広がる可能性が高く、数多くの掘立柱建物、竪穴住居が存在するものと推測される。

検出した河川の上流方向には観音寺山丘陵の谷部があり、下流方向は現在の松尾川の方向へと向っている。現在、調査地の西側を流れる松尾川は、調査地の南方で西側に大きく蛇行し、また、調査地の北方で東側に蛇行して北流している。かつてはこのような蛇行がなく、観音寺山丘陵に沿って直進していたものと推測される。検出した河川は、直進していた時期の河川の痕跡であると考えられる。中でも下層河川が埋没した後、ほぼ同じ流跡で河川1500が形作られるが、この頃、この河川を限りとする寺田遺跡の最初の集落が営まれたものと推察される。その後、集落は盛隆期を迎え数多くの建物が建つようになると、河川は徐々に水が滞留し堆積していったものとみられる。大溝から河川1500および河川1694に続く河川は、集落域を画する機能を維持するため形作られ、さらに河川1692や溝1693などが開削されたのではないかと推測される。

河川内からは、大量の土器が出土した。河川上層堆積層で5世紀末頃の須恵器と土師器がみられた。河川内中層部では、河川が流水堆積を示し初期須恵器が出現する時期前後に相当する。また、滑石製の臼玉や有孔円板などが出土しており、川辺で何らかの祭祀が行なわれたものと考えられる。河川下層及び下層河川からは弥生土器片などが検出された。河川は、4世紀末頃から5世紀初頭に隆盛であったが、5世紀中頃には浅い窪地状を呈し、5世紀後半頃には埋没したもの

と推察される。

竪穴住居内や河川内からは、瓦質円筒形土器、朝鮮半島系土器が出土した。これらをもって朝鮮半島南部からの渡来した人々の集落とは断定できないが、他の同時期の集落とは異なる状況を示しており、密接な関係があったものと思われる。

このほか、出土遺物として、細片であったが小型丸底壺や製塩土器が数多く出土した。製塩土器では、脚台、丸底、甕形などの形態を示すものがみられた。細片となった小型丸底壺や製塩土器片が出土した周辺では、焼土や炭化物層が広がる状況がみられた。寺田遺跡は海岸線からかなり離れた丘陵地に立地するが、近年、内陸部における製塩土器の出土例が多くみられる。また、石製玉類や祭祀遺構と供伴する例もみられることから、集落内で何らかの塩に関わる作業が行なわれていたものと推測される。どの様な状況で持ち込まれ、利用されたのかが問題となろう。

また、緑泥片岩、グリーンタフ、紅簾片岩など当地周辺で採取することが出来ない石材や讃岐産の大甕などの搬入品が出土した。搬入する交易ルートを持っていた人々の集落であったと考えられる。中でも、緑泥片岩は、松尾川対岸に位置する摩湯山古墳などでも出土しており、その関連が注目すべきことと思われる。

寺田遺跡では、弥生時代末期から古墳時代前期頃に最初の集落が営まれたと推測される。この時期は、弥生時代後半頃に観音寺山遺跡などの高地性集落が姿を消した時期に相当する。当初は４世紀代の土師器を用い、住居が不定方向を示す竪穴住居の集落であったが、北の方角を意識した竪穴住居及び掘立柱建物で構成される集落へと移行する。移行時期は、当地周辺で開けた丘陵上に古墳が造営された時期で、松尾川の対岸に位置する摩湯山古墳の造営時期に相当する。さらに、陶邑で本格的な須恵器生産が始まる５世紀以降になると次第に竪穴住居から、掘立柱建物で構成される集落へと変わっていったと考えられる。中でも初期須恵器を伴う集落は比較的珍しく、まだ生産量が少なかった初期須恵器を持つことのできる傑出した集落であったと推察される。また、集落域の北側を画する河川が埋没した５世紀末頃には、井戸を伴う掘立柱建物を中心とする集落へと移行が進んだものとみられる。その後集落域は、寺田遺跡の範囲内では縮小傾向がみられるが、人々の暮らしは中世代に至るまで断続的に継続していたものと推察される。

主として、和気遺跡(弥生中期)→観音寺山遺跡(弥生後期)→和気遺跡・寺田遺跡(古墳時代前期)→摩湯山古墳→寺田遺跡(古墳時代中期)→陶邑→寺田遺跡(古墳時代後期)→？→和気遺跡(中世)という流れが推測される。

以上のように、僅かではあるが発掘調査の成果を上げることができた。力量不足から、十分な調査を行なうことができなかったが、古墳時代前期から後期の集落の検出は、寺田遺跡周辺の観音寺山遺跡や摩湯山古墳、近隣の陶邑窯址群、和気遺跡などとの関連や当地周辺の古環境を復元する上で、良好な資料になるものと思われる。寺田遺跡で検出した古墳時代の集落の中心は、今回の調査地より南西側に広がるものと推測される。今後、周辺地域の発掘調査が進むことにより、この地域の歴史的環境が一層解明されるものと期待したい。

掲載遺物対照表

番号	挿図	図版	種類	器種	地区	遺構名	実測番号
1	第11図	図版12	須恵器	杯身	5	P－549	125
2	第11図	図版12	須恵器	杯身	5	大溝	261
3	第11図	図版12	須恵器	杯身	5	大溝	273
4	第11図	—	須恵器	杯身	5	大溝	266
5	第11図	図版12	須恵器	高杯	5	大溝	262
6	第11図	図版12	須恵器	高杯	5	大溝	263
7	第11図	図版12	須恵器	高杯	5	大溝	268
8	第11図	—	須恵器	高杯	5	大溝	264
9	第11図	図版12	須恵器	高杯	5	大溝	274
10	第11図	—	須恵器	はそう	5	大溝	271
11	第11図	—	須恵器	壺	5	大溝	270
12	第11図	—	須恵器	壺	5	大溝	260
13	第11図	—	須恵器	甕	5	大溝	275
14	第11図	図版12	土師器	長胴甕	5	大溝	269
15	第11図	図版12	土師器	鉢	5	大溝	265
16	第11図	図版12	製塩土器	脚台	5	大溝	267
17	第11図	図版12	製塩土器	脚台	5	大溝	272
18	第11図	図版12	石器	叩き石	5	大溝	236
19	第11図	図版12	石器	叩き石	5	大溝	237
20	第20図	図版13	土師器	高杯	1	竪穴住居1480	35
21	第20図	図版13	土師器	高杯	1	竪穴住居1480	223
22	第20図	—	土師器	高杯	1	竪穴住居1480	221
23	第20図	図版13	土師器	甑鉢	1	竪穴住居1480	115
24	第20図	図版13	土師器	壺	1	竪穴住居1480	30
25	第20図	図版13	土師器	把手	1	竪穴住居1480	31
26	第20図	図版13	土師器	把手	1	竪穴住居1480	32
27	第20図	図版13	土師器	鉢	1	竪穴住居1480	36
28	第20図	図版13	土師器	長胴甕	1	竪穴住居1480	13
29	第20図	—	土師器	甕	1	竪穴住居1480	716
30	第20図	—	土師器	鏃把手	1	竪穴住居1480	715
31	第20図	—	土師器	壺	1	竪穴住居1480	719
32	第20図	—	土師器	壺	1	竪穴住居1480	717
33	第20図	—	土師器	壺	1	竪穴住居1480	716
34	第21図	図版13	石器	台石	1	竪穴住居1480	247
35	第21図	図版13	石器	すり石	1	竪穴住居1480	231
36	第21図	図版13	石器	すり石	1	竪穴住居1480	230
45	第21図	図版15	須恵器	杯蓋	1	土坑－1351	120
38	第21図	—	土師器	高杯	1	竪穴住居1382	150
39	第21図	—	土師器	高杯	1	竪穴住居1382	149
62	第21図	図版13	須恵器	壺	1	竪穴住居1382	146
53	第21図	図版13	須恵器	器台	1	竪穴住居1382	148
37	第21図	図版13	石器	磁石	1	竪穴住居1382	246
61	第21図	図版14	須恵器	蓋	1	竪穴住居1281	713
54	第21図	図版14	土師器	壺	1	竪穴住居1281	152
44	第21図	図版16	須恵器	杯身	1	P－1330	118
47	第21図	図版15	土師器	台付壺	1	竪穴住居1489	154
55	第21図	図版15	土師器	壺	1	竪穴住居1489	714
40	第21図	図版15	須恵器	杯蓋	1	竪穴住居571	122
41	第21図	図版15	須恵器	杯蓋	1	竪穴住居571	694
42	第21図	—	須恵器	杯身	1	竪穴住居571	700
43	第21図	図版15	須恵器	杯身	1	竪穴住居571	123
46	第21図	図版15	須恵器	高杯	1	竪穴住居571	696
48	第21図	—	須恵器	はそう	1	竪穴住居571	699
49	第21図	—	須恵器	すり鉢	1	竪穴住居571	696
50	第21図	図版15	土師器	把手	1	竪穴住居571	697
56	第25図	図版14	土師器	高杯	1	竪穴住居1499	19
57	第25図	図版14	土師器	高杯	1	竪穴住居1499	18
58	第25図	図版14	土師器	小型丸底壺	1	竪穴住居1499	28
59	第25図	図版14	土師器	小鉢	1	竪穴住居1499	24
60	第25図	図版14	土師器	小型丸底壺	1	竪穴住居1499	29
61	第25図	図版14	土師器	壺	1	竪穴住居1499	26
62	第25図	図版14	土師器	壺	1	竪穴住居1499	25
63	第25図	図版14	土師器	壺	1	竪穴住居1499	22
64	第25図	図版14	弥生土器	壺	1	竪穴住居1499	23
65	第25図	—	土師器	甕	1	竪穴住居1499	21
66	第25図	図版14	土師器	甑	1	竪穴住居1499	20
67	第25図	—	石器	磁石	1	竪穴住居1499	238
68	第25図	図版14	石器	磁石	1	竪穴住居1499	117
69	第25図	図版14	石器	磁石	1	竪穴住居1499	116
70	第25図	図版14	土師器	壺	1	竪穴住居1504	712
71	第25図	—	土師器	壺	1	土坑1507	27
72	第25図	図版14	土師器	壺	1	土坑1507	707
73	第27図	図版14	須恵器	杯蓋	1	竪穴住居1511	44
74	第27図	図版14	須恵器	杯蓋	1	竪穴住居1511	45

番号	挿図	図版	種類	器種	地区	遺構名	実測番号
75	第27図	—	須恵器	杯蓋	1	竪穴住居1511	96
76	第27図	—	須恵器	杯蓋	1	竪穴住居1511	92
77	第27図	—	須恵器	杯蓋	1	竪穴住居1511	49
78	第27図	図版14	須恵器	杯蓋	1	竪穴住居1511	48
79	第27図	—	須恵器	杯蓋	1	竪穴住居1511	158
80	第27図	図版14	須恵器	高杯	1	竪穴住居1511	36
81	第27図	図版14	須恵器	高杯	1	竪穴住居1511	39
82	第27図	図版14	須恵器	高杯	1	竪穴住居1511	37
84	第27図	—	須恵器	高杯	1	竪穴住居1511	162
84	第27図	—	須恵器	高杯	1	竪穴住居1511	710
85	第27図	—	須恵器	高杯	1	竪穴住居1511	711
86	第27図	図版15	須恵器	椀	1	竪穴住居1511	40
87	第27図	図版15	須恵器	椀	1	竪穴住居1511	42
88	第27図	—	土師器	鉢	1	竪穴住居1511	709
89	第27図	—	須恵器	壺	1	竪穴住居1511	43
90	第27図	図版15	須恵器	壺	1	竪穴住居1511	47
91	第27図	図版15	須恵器	器台	1	竪穴住居1511	90
92	第27図	図版15	瓦質土器	不明土製品	1	竪穴住居1511	41
93	第27図	図版15	瓦質土器	円筒形土器	1	竪穴住居1511	186
94	第27図	図版15	瓦質土器	円筒形土器	1	竪穴住居1511	91
95	第27図	図版15	瓦質土器	円筒形土器	1	竪穴住居1511	46
96	第27図	図版15	瓦質土器	円筒形土器	1	竪穴住居1511	168
97	—	図版15	瓦質土器	円筒形土器	1	竪穴住居1511	—
98	—	図版15	瓦質土器	円筒形土器	1	竪穴住居1511	—
99	—	図版15	瓦質土器	円筒形土器	1	竪穴住居1511	—
100	第27図	—	石器	叩き石	1	竪穴住居1511	233
101	第27図	図版15	石器	叩き石	1	竪穴住居1511	234
102	第30図	図版16	製塩土器	脚台	1	P－1354（O）	740
103	第30図	図版16	須恵器	杯蓋	1	P－1645（M）	135
104	第30図	図版16	須恵器	杯身	1	P－1645（M）	133
105	第30図	図版16	須恵器	杯身	1	P－1645（M）	134
106	第30図	図版16	須恵器	杯身	1	P－1042（M）	98
107	第30図	—	土師器	高杯	1	P－1645（M）	136
108	第30図	図版16	土師器	高杯	1	P－1042（M）	100
109	第30図	—	土師器	高杯	1	P－1042（M）	101
110	第30図	図版16	須恵器	鉢	1	P－1073（M）	93
111	第30図	図版16	土師器	壺	1	P－1645（M）	137
112	第30図	—	土師器	壺	1	P－1645（M）	138
113	第30図	図版15	石器	磁石	1	P－1042（M）	244
114	第30図	図版15	須恵器	杯身	1	P－ 279（A）	163
115	第30図	図版15	土師器	高杯	1	P－ 641（C）	166
116	第30図	図版15	須恵器	把手	1	遺構出土P（C）	765
117	第30図	図版16	土師器	高杯	1	P－ 822（F）	127
118	第30図	図版16	須恵器	杯蓋	1	P－ 581（G）	124
119	第30図	図版16	須恵器	杯身	1	P－1669（H）	131
120	第30図	図版15	須恵器	小壺	1	土坑1673（H）	140
121	第30図	図版15	須恵器	器台	1	P－1663（H）	128
122	第30図	図版15	瓦質土器	円筒形土器	1	P－1663（H）	142
123	第30図	—	土師器	壺	1	遺構1531（L）	126
124	第30図	図版16	須恵器	杯蓋	1	P－1467	153
125	第30図	図版16	須恵器	高杯	1	P－1403	147
126	第30図	—	須恵器	壺	1	P－1186	151
127	第30図	図版16	須恵器	杯身	1	遺物出土P	361
128	第30図	図版16	須恵器	器台	1	遺物出土P	141
129	第30図	図版16	須恵器	杯蓋	1	遺物1000	156
129	第30図	図版16	須恵器	杯身	1	遺物1000	164
131	第33図	—	須恵器	杯蓋	1	溝275	157
132	第33図	図版12	土師器	有孔土器	1	溝572	695
147	第33図	—	須恵器	杯蓋	1	包含層	160
133	第33図	—	須恵器	杯身	1	建P－1252	706
134	第33図	—	須恵器	杯身	1	建P－1252	705
135	第33図	—	須恵器	杯身	1	建P－1637	703
136	第33図	—	須恵器	杯身	1	建P－2082	95
137	第33図	—	須恵器	杯身	1	建P－1197	119
138	第33図	—	石器	叩き石	1	建P－767	240
139	第33図	—	須恵器	杯蓋	1	P－1435（河上）	702
139	第33図	—	須恵器	杯身	1	P－1425（河上）	129
140	第33図	—	須恵器	杯身	1	P－1435（河上）	130
141	第33図	図版12	土師器	壺	1	P－ 239	704
142	第33図	図版12	土師器	小型丸底壺	1	建P－315	167
143	第33図	—	土師器	甕	1	P－1415	144
144	第33図	図版12	土師器	甕	1	P－1415	143
145	第33図	図版12	須恵器	器台	1	P－1345（河近接）	145
146	第33図	—	須恵器	高杯杯部	1	P－942	161

番号	挿図	図版	種類	器種	地区	遺構名	実測番号
371	—	図版20	土師器	把手	1	P－867	—
148	第33図	—	須恵器	把手	1	包含層	763
149	第33図	図版12	須恵器	杯蓋	1	溝1911	139
372	—	図版20	土師器	把手	1	溝1910	—
150	第33図	図版12	須恵器	高杯	1	溝1910	102
151	第33図	—	須恵器	小壺	1	溝1910	103
152	第33図	—	土師器	甕	1	溝1910	104
153	第33図	図版12	須恵器	鉢	1	溝1910	105
154	第33図	図版16	弥生土器	壺	1	P－1503	12
155	第33図	図版16	弥生土器	壺	1	P－1353	114
156	第33図	図版16	弥生土器	甕	1	P－1562	87
157	第33図	図版16	弥生土器	甕	1	P－1562	88
159	第35図	—	須恵器	杯蓋	1	P－1329（河上）	216
160	第35図	—	須恵器	杯蓋	1	包含層	515
161	第35図	—	須恵器	杯身	1	建P－947（河上）	165
162	第35図	—	須恵器	杯身	1	建P－1328（河上）	217
165	第35図	—	須恵器	杯身	1	P－1492（河上）	219
166	第35図	—	須恵器	杯身	1	P－1337	214
172	第35図	図版12	須恵器	高杯	1	P－1338	215
173	第35図	図版12	須恵器	高杯	1	P－1339	220
174	第35図	図版12	須恵器	高杯	1	P－1495	708
179	第35図	—	須恵器	甕	1	P－1336	213
181	第35図	図版12	須恵器	器台	1	P－1329（河上）	701
182	第35図	図版12	須恵器	器台	1	P－1340	212
183	第35図	—	土師器	高坏	1	P－1492（河上）	222
184	第35図	—	土師器	壺	1	P－949（河上）	169
167	第35図	—	須恵器	杯身	1	遺物出土P	359
168	第35図	—	須恵器	杯身	1	遺物出土P	358
175	第35図	—	須恵器	椀	1	遺物出土P	655
163	第35図	—	須恵器	杯蓋	1	P－ 923（河近接）	159
164	第35図	—	須恵器	杯身	1	P－1345（河近接）	132
171	第35図	—	須恵器	高杯	1	P－1013（河近接）	99
178	第35図	図版13	須恵器	甕	1	P－1345（河近接）	121
169	第35図	—	須恵器	杯身	1	P－1616（河近接）	218
170	第35図	図版12	須恵器	高杯	1	P－1490（河近接）	155
176	第35図	—	須恵器	はそう	1	P－1066（河近接）	94
177	第35図	図版13	須恵器	台付壺	1	P－1021（河近接）	97
180	第35図	図版13	須恵器	甕	1	P－1616（河近接）	89
185	第38図	—	土師器	甕	2	焼土坑1966	75
186	第38図	—	土師器	甕	2	焼土坑1966	76
187	第38図	図版16	土師器	甕	2	焼土坑1966	72
188	第38図	図版16	土師器	甕	2	焼土坑1966	74
189	第38図	図版16	土師器	鍋	2	焼土坑1966	69
190	第38図	図版16	韓式系土器	甕	2	焼土坑1966	77
191	第38図	図版16	土師器	高坏	2	焼土坑1966	73
192	第38図	—	土師器	高坏	2	焼土坑1966	71
193	第38図	図版16	土師器	高坏	2	焼土坑1966	70
194	第38図	図版17	須恵器	高杯	2	焼土坑1966	66
195	第38図	—	須恵器	高杯	2	焼土坑1966	67
196	第38図	—	須恵器	高杯	2	焼土坑1966	68
197	第38図	図版17	須恵器	高杯	2	焼土坑1840	725
198	第38図	—	須恵器	杯蓋	2	焼土坑1841	683
199	第38図	図版17	須恵器	杯蓋	2	焼土坑1841	111
200	第38図	—	須恵器	杯蓋	2	焼土坑1841	682
201	第38図	図版17	須恵器	高杯	2	焼土坑1841	110
202	第38図	図版17	須恵器	高杯	2	焼土坑1841	686
203	第38図	図版17	須恵器	高杯	2	焼土坑1841	109
204	第38図	—	須恵器	高杯	2	焼土坑1841	684
205	第38図	図版17	須恵器	高杯	2	焼土坑1841	685
206	第38図	図版17	土師器	高坏	2	焼土坑1841	690
207	第38図	図版17	土師器	甑	2	焼土坑1841	688
208	第38図	図版17	土師器	甕	2	焼土坑1841	681
209	第38図	—	土師器	甕	2	焼土坑1841	687
210	第38図	—	土師器	甕	2	焼土坑1841	689
231	—	図版17	土師器	堝把手	2	焼土坑1841	—
232	—	図版17	土師器	堝把手	2	焼土坑1841	—
233	—	図版17	土師器	甑把手	2	焼土坑1841	—
234	—	図版17	土師器	甑把手	2	焼土坑1841	—
211	第38図	図版17	土師器	高坏	2	焼土坑1843	726
212	第38図	図版17	土師器	手づくね土器	2	土坑1909	51
213	第38図	図版17	須恵器	鉢	2	土坑1909	52
214	第38図	図版17	韓式系土器	甕	2	土坑1909	50
215	第38図	図版17	須恵器	杯蓋	2	焼土坑1963	108
216	第38図	図版17	須恵器	杯蓋	2	焼土坑1963	107
217	第38図	図版17	須恵器	甕	2	焼土坑1963	106
218	第38図	—	須恵器	甕	2	土坑1865	724
219	第38図	図版17	須恵器	甕	2	土坑1865	59
220	第38図	図版17	須恵器	高杯	2	土坑1865	60

番号	挿図	図版	種類	器種	地区	遺構名	実測番号
221	第38図	図版17	須恵器	杯蓋	2	焼土坑1733	112
222	第38図	図版17	須恵器	杯蓋	2	焼土坑1733	722
223	第38図	図版17	須恵器	把手付椀	2	焼土坑1733	723
224	第38図	—	須恵器	高杯	2	焼土坑1733	721
225	第38図	図版17	土師器	高坏	2	焼土坑1733	720
226	第38図	図版17	須恵器	高杯	2	土坑1696	731
227	第38図	—	須恵器	高杯	2	土坑1696	732
228	第38図	図版17	須恵器	高杯	2	土坑1696	733
229	第38図	—	須恵器	はそう	2	土坑1696	734
230	第38図	図版17	土師器	甕	2	土坑1696	735
235	第44図	—	須恵器	杯蓋	2	溝1633	728
237	第44図	図版17	須恵器	高杯	2	溝1633	730
236	第44図	図版17	須恵器	椀	2	溝1633	729
238	第44図	図版18	土師器	鉢	2	井戸1957	53
239	第44図	図版18	土師器	壺	2	井戸1957	54
240	第44図	図版18	土師器	甕	2	井戸1957	57
241	第44図	図版18	須恵器	高杯	2	井戸1726	80
242	第44図	図版18	須恵器	高杯	2	井戸1726	81
243	第44図	図版18	須恵器	壺	2	井戸1726	79
244	第44図	図版18	土師器	壺	2	井戸1726	83
245	第44図	図版18	土師器	甕	2	井戸1726	82
246	第44図	—	須恵器	甕	2	井戸1726	78
247	第44図	図版18	製塩土器		2	井戸1726	84
248	第44図	図版18	製塩土器		2	井戸1726	86
249	第44図	図版18	製塩土器		2	井戸1726	85
250	第44図	図版17	須恵器	高杯	2	建P－1861	736
251	第44図	図版17	土師器	高坏	2	建P－1948	739
252	第44図	—	土師器	壺	2	建P－1948	738
253	第44図	—	土師器	二重口縁壺	2	建P－1962	113
254	第44図	—	石器	叩き石	2	建P－1860	232
255	第44図	—	土師器	甕	2	建P－1716	737
256	第44図	図版21	須恵器	把手付鉢	2	包含層	774
258	第48図	図版18	土師器	小型丸底壺	3	井戸1799	1
259	第48図	図版18	土師器	壺	3	井戸1799	34
260	第48図	図版18	土師器	甕	3	井戸1799	33
261	第48図	図版18	須恵器	杯蓋	3	井戸1802	9
262	第48図	図版18	須恵器	杯蓋	3	井戸1802	8
263	第48図	図版18	須恵器	高杯	3	井戸1802	10
264	第48図	図版18	土師器	高坏	3	井戸1802	3
265	第48図	図版18	土師器	高坏	3	井戸1802	5
266	第48図	—	土師器	高坏	3	井戸1802	4
267	第48図	—	土師器	高坏	3	井戸1802	6
268	第48図	図版18	土師器	小型丸底壺	3	井戸1802	2
269	第48図	図版18	須恵器	甕	3	井戸1802	11
270	第48図	図版19	土師器	甕	3	井戸1838	15
271	第48図	図版19	土師器	甕	3	井戸1838	14
272	第48図	—	土師器	甕	3	井戸1838	16
273	第48図	図版19	土師器	甕	3	井戸1838	17
274	第48図	図版18	須恵器	壺	3	建P－1752	7
275	第48図	図版18	土師器	甕	3	建P－1753	65
276	第49図	図版19	土師器	鉢	3東	SK1509	64
277	第49図	図版19	土師器	壺	3東	SK1509	62
278	第49図	—	土師器	甕	3東	SK1509	61
279	第49図	図版19	土師器	甕	3東	SK1509	63
280	第49図	—	須恵器	壺蓋	3東	SD－1445	692
281	第49図	—	須恵器	杯	3東	SD－1445	693
282	第51図	図版19	土師器	高坏	1	河川1500	389
283	第51図	—	土師器	高坏	1	河川1500	314
284	第51図	—	土師器	高坏	1	河川1500	332
285	第51図	—	土師器	高坏	1	河川1500	482
286	第51図	—	土師器	高坏	1	河川1500	251
287	第51図	—	土師器	高坏	1	河川1500	294
288	第51図	—	土師器	高坏	1	河川1500	318
289	第51図	—	土師器	高坏	1	河川1500	290
290	第51図	—	土師器	高坏	1	河川1500	295
291	第51図	図版19	土師器	小型器台	1	河川1500	751
292	第51図	図版23	土師器	小型器台	1	河川1500	324
293	第51図	図版23	土師器	小型器台	1	河川1500	385
294	第51図	図版20	製塩土器	脚台	1	河川1500	249
295	第51図	図版20	製塩土器	脚台	1	河川1500	310
296	第51図	図版20	製塩土器	脚台	1	河川1500	320
297	第51図	図版20	製塩土器	脚台	1	河川1500	465
298	第51図	図版20	製塩土器	脚台	1	河川1500	419
299	第51図	図版20	製塩土器	脚台	1	河川1500	319
300	第51図	—	製塩土器		1	河川1500	322
301	第51図	—	製塩土器		1	河川1500	321
302	第51図	図版21	土師器	有孔土器	1	河川1500	768
303	第51図	図版21	土師器	有孔鉢	1	河川1500	337

番号	神図	図版	種類	器種	地区	遺構名	実測番号
304	第51図	図版20	弥生土器	甕	1	河川1500	473
305	第51図	図版20	土師器	甕	1	河川1500	433
306	第51図	図版20	土師器	甕	1	河川1500	331
307	第51図	図版20	土師器	甕	1	河川1500	333
308	第51図	図版20	土師器	小鉢	1	河川1500	323
309	第51図	図版20	土師器	小鉢	1	河川1500	306
310	第51図	図版20	弥生土器	鉢	1	河川1500	402
311	第51図	図版20	弥生土器	高坏脚	1	河川1500	401
312	第51図	図版20	土師器	小型丸底鉢	1	河川1500	248
313	第51図	図版20	土師器	小型長胴甕	1	河川1500	291
314	第51図	図版20	土師器	複合口縁壺	1	河川1500	386
315	第51図	—	土師器	小型丸底壺	1	河川1500	328
316	第51図	—	土師器	小型丸底壺	1	河川1500	327
317	第51図	図版20	土師器	小型丸底壺	1	河川1500	468
318	第51図	—	土師器	小型丸底壺	1	河川1500	289
319	第51図	図版20	土師器	小型丸底壺	1	河川1500	466
320	第51図	—	土師器	小型丸底壺	1	河川1500	313
321	第51図	—	土師器	小型丸底壺	1	河川1500	400
322	第51図	図版20	土師器	小型丸底壺	1	河川1500	303
323	第51図	—	土師器	小型丸底壺	1	河川1500	397
324	第51図	図版20	土師器	小型丸底壺	1	河川1500	309
325	第51図	—	土師器	小型丸底壺	1	河川1500	420
326	第51図	—	土師器	小型丸底壺	1	河川1500	307
327	第51図	図版20	土師器	小型丸底壺	1	河川1500	315
328	第51図	—	土師器	小型丸底壺	1	河川1500	254
329	第51図	図版20	土師器	小型丸底壺	1	河川1500	326
330	第51図	図版20	土師器	小型丸底壺	1	河川1500	467
331	第51図	—	土師器	壺	1	河川1500	435
332	第51図	—	土師器	壺	1	河川1500	298
333	第51図	図版22	土師器	壺	1	河川1500	396
334	第52図	—	土師器	壺	1	河川1500	292
335	第52図	図版22	土師器	壺	1	河川1500	477
336	第52図	—	土師器	壺	1	河川1500	481
337	第52図	—	土師器	壺	1	河川1500	373
338	第52図	—	土師器	壺	1	河川1500	316
339	第52図	—	土師器	壺	1	河川1500	252
340	第52図	—	土師器	壺	1	河川1500	330
341	第52図	—	土師器	壺	1	河川1500	311
342	第52図	図版22	土師器	壺	1	河川1500	255
343	第52図	図版22	土師器	壺	1	河川1500	478
344	第52図	図版22	土師器	壺	1	河川1500	317
345	第52図	図版22	土師器	壺	1	河川1500	347
346	第52図	—	土師器	壺	1	河川1500	371
347	第52図	図版22	土師器	壺	1	河川1500	388
348	第52図	—	土師器	壺	1	河川1500	480
349	第52図	—	土師器	壺	1	河川1500	411
350	第52図	図版22	土師器	壺	1	河川1500	302
351	第52図	—	土師器	壺	1	河川1500	370
352	第52図	図版22	土師器	壺	1	河川1500	329
353	第53図	図版22	土師器	二重口縁壺	1	河川1500	413
354	第53図	図版22	土師器	二重口縁壺	1	河川1500	387
355	第53図	—	土師器	二重口縁壺	1	河川1500	471
356	第53図	—	土師器	二重口縁壺	1	河川1500	412
357	第53図	—	土師器	二重口縁壺	1	河川1500	470
358	第53図	図版22	土師器	二重口縁壺	1	河川1500	475
359	第53図	—	土師器	二重口縁壺	1	河川1500	353
360	第53図	図版20	土師器	二重口縁壺	1	河川1500	256
361	第53図	—	土師器	二重口縁壺	1	河川1500	469
362	第53図	図版22	土師器	二重口縁壺	1	河川1500	250
363	第53図	図版22	土師器	甕	1	河川1500	312
364	第53図	—	土師器	甕	1	河川1500	336
365	第53図	図版22	土師器	甕	1	河川1500	338
366	第53図	—	土師器	甕	1	河川1500	409
367	第53図	図版22	土師器	甕	1	河川1500	434
368	第53図	—	土師器	甕	1	河川1500	410
369	第53図	—	土師器	壺	1	河川1500	252
370	第53図	—	土師器	壺蓋	1	河川1500	771
373	第54図	図版20	土師器	鍋	1	河川1500	296
374	第54図	—	土師器	鍋	1	河川1500	390
375	第54図	図版20	土師器	鍋	1	河川1500	479
376	第54図	図版20	土師器	把手	1	河川1500	399
377	—	図版20	土師器	把手	1	河川1500	—
378	—	図版20	土師器	把手	1	河川1500	—
379	—	図版20	土師器	把手	1	河川1500	—
380	—	図版20	土師器	把手	1	河川1500	—
381	—	図版20	土師器	把手	1	河川1500	—
382	第54図	図版23	弥生土器	甕	1	河川1500	476
383	第54図	図版23	弥生土器	甕	1	河川1500	398

番号	神図	図版	種類	器種	地区	遺構名	実測番号
384	第54図	図版20	土師器	甕	1	河川1500	473
385	第54図	図版23	土師器	壺	1	河川1500	433
386	第54図	図版23	土師器	壺	1	河川1500	331
387	第54図	図版23	土師器	小型丸底壺	1	下層河川	755
388	第54図	図版23	土師器	壺	1	下層河川	756
389	第54図	図版23	土師器	壺	1	下層河川	753
390	第54図	図版23	土師器	壺	1	下層河川	752
391	第54図	図版23	土師器	壺	1	下層河川	754
392	第55図	図版19	須恵器	杯蓋	1	河川1500	518
393	第55図	—	須恵器	杯蓋	1	河川1500	758
394	第55図	図版19	須恵器	杯蓋	1	河川1500	699
395	第55図	—	須恵器	杯蓋	1	河川1500	757
396	第55図	—	須恵器	杯蓋	1	河川1500	494
397	第55図	—	須恵器	杯蓋	1	河川1500	510
398	第55図	—	須恵器	杯蓋	1	河川1500	497
399	第55図	—	須恵器	杯蓋	1	河川1500	495
400	第55図	—	須恵器	杯蓋	1	河川1500	505
401	第55図	—	須恵器	杯蓋	1	河川1500	437
402	第55図	—	須恵器	杯蓋	1	河川1500	486
403	第55図	—	須恵器	杯蓋	1	河川1500	442
404	第55図	—	須恵器	杯蓋	1	河川1500	498
405	第55図	—	須恵器	杯蓋	1	河川1500	439
406	第55図	—	須恵器	杯身	1	河川1500	354
407	第55図	—	須恵器	杯身	1	河川1500	521
408	第55図	—	須恵器	杯身	1	河川1500	637
409	第55図	—	須恵器	杯身	1	河川1500	633
410	第55図	—	須恵器	杯身	1	河川1500	630
411	第55図	—	須恵器	杯身	1	河川1500	355
412	第55図	—	須恵器	杯身	1	河川1500	629
413	第55図	—	須恵器	杯身	1	河川1500	444
414	第55図	—	須恵器	杯身	1	河川1500	520
415	第55図	—	須恵器	杯身	1	河川1500	366
416	第55図	—	須恵器	杯身	1	河川1500	636
417	第55図	—	須恵器	杯身	1	河川1500	640
418	第55図	図版21	須恵器	高杯	1	河川1500	560
419	第55図	図版21	須恵器	高杯	1	河川1500	561
420	第55図	図版21	須恵器	高杯	1	河川1500	559
421	第55図	図版21	須恵器	高杯	1	河川1500	558
422	第55図	図版21	須恵器	高杯	1	河川1500	557
423	第55図	—	須恵器	高杯	1	河川1500	562
424	第55図	図版21	須恵器	高杯	1	河川1500	550
425	第55図	図版19	須恵器	高杯	1	河川1500	427
426	第55図	—	須恵器	高杯	1	河川1500	423
427	第55図	—	須恵器	高杯	1	河川1500	556
428	第55図	—	須恵器	高杯	1	河川1500	555
429	第55図	—	須恵器	高杯	1	河川1500	425
430	第55図	—	須恵器	高杯	1	河川1500	422
431	第55図	—	須恵器	高杯	1	河川1500	426
432	第55図	図版21	須恵器	高杯	1	河川1500	544
433	第55図	図版21	須恵器	高杯	1	河川1500	547
434	第55図	—	須恵器	高杯	1	河川1500	546
435	第55図	図版21	須恵器	高杯	1	河川1500	428
436	第55図	—	須恵器	高杯	1	河川1500	543
437	第55図	図版19	須恵器	高杯	1	河川1500	429
438	—	図版21	須恵器	高杯	1	河川1500	553
439	—	図版21	須恵器	高杯	1	河川1500	551
438	第56図	図版21	須恵器	椀	1	河川1500	641
439	第56図	図版20	須恵器	把手付椀	1	河川1500	652
440	第56図	図版21	須恵器	椀	1	河川1500	646
441	第56図	図版21	須恵器	把手付椀	1	河川1500	649
442	第56図	図版19	須恵器	把手付椀	1	河川1500	654
443	第56図	図版21	須恵器	把手付椀	1	河川1500	645
444	第56図	図版21	須恵器	椀	1	河川1500	642
445	第56図	図版21	須恵器	椀	1	河川1500	643
446	第56図	図版21	須恵器	把手付椀	1	河川1500	670
447	第56図	図版21	須恵器	椀	1	河川1500	653
448	第56図	図版20	須恵器	把手付椀	1	河川1500	678
449	第56図	図版21	須恵器	小皿	1	河川1500	644
450	第56図	図版23	須恵器	小皿	1	河川1500	650
451	第56図	図版23	須恵器	小皿	1	河川1500	664
452	第56図	図版21	須恵器	ミニチュア土器	1	河川1500	651
453	第56図	図版23	須恵器	はそう	1	河川1500	580
454	第56図	図版23	須恵器	はそう	1	河川1500	584
455	第56図	図版23	須恵器	はそう	1	河川1500	581
456	第56図	図版23	須恵器	はそう	1	河川1500	582
457	第56図	図版23	須恵器	はそう	1	河川1500	578
458	第56図	図版23	須恵器	はそう	1	河川1500	583
459	第56図	図版23	須恵器	はそう	1	河川1500	579

番号	挿図	図版	種類	器種	地区	遺構名	実測番号
460	第56図	—	須恵器	はそう	1	河川1500	647
461	第56図	—	須恵器	壺	1	河川1500	672
462	第56図	—	須恵器	壺	1	河川1500	572
463	第56図	図版23	須恵器	壺	1	河川1500	577
464	第56図	—	須恵器	壺	1	河川1500	574
465	第56図	—	須恵器	壺	1	河川1500	674
466	第56図	—	須恵器	壺	1	河川1500	573
770	—	図版23	須恵器	壺	1	河川1500	665
467	第56図	図版23	須恵器	鉢	1	河川1500	667
468	第56図	—	須恵器	鉢	1	河川1500	666
469	第56図	—	須恵器	鉢	1	河川1500	648
470	第56図	—	瓦質土器	鉢	1	河川1500	761
471	第56図	図版23	瓦質土器	甕	1	河川1500	305
472	第56図	図版20	須恵器	把手	1	河川1500	759
473	第56図	図版19	韓式系土器	甕	1	河川1500	306
474	—	図版19	韓式系土器	甕	2	河川1500南	—
475	—	図版20	須恵器	把手	1	河川1500	676
476	—	図版20	須恵器	把手	1	河川1500	760
477	第57図	図版22	須恵器	甕	1	河川1500	530
478	第57図	図版22	須恵器	甕	1	河川1500	673
479	第57図	図版22	須恵器	甕	1	河川1500	677
480	第57図	図版22	須恵器	甕	1	河川1500	576
481	第57図	図版22	須恵器	甕	1	河川1500	675
482	第57図	図版22	須恵器	甕	1	河川1500	601
483	第57図	図版22	須恵器	甕	1	河川1500	602
484	第57図	図版21	須恵器	器台	1	河川1500	663
485	第57図	図版21	須恵器	器台	1	河川1500	657
486	第57図	図版21	須恵器	器台	1	河川1500	659
487	第57図	図版21	須恵器	器台	1	河川1500	660
488	第57図	巻頭図版c.	須恵器	大型高杯	1	河川1500	369
489	第57図	図版21	須恵器	器台	1	河川1500	658
490	—	図版21	須恵器	器台	1	河川1500	662
495	—	図版21	須恵器	器台	1	河川1500	661
491	—	図版22	須恵器	壺	1	河川1500	575
492	—	図版22	須恵器	甕	1	河川1500	600
493	—	図版22	須恵器	甕	1	河川1500	529
494	—	図版22	須恵器	甕	1	河川1500	624
496	第58図		土師器	大壺	1	河川1500	285
497	第58図	—	土師器	壺	1	河川1500	286
498	第59図	図版21	須恵器	把手付椀	2	河川1500北	597
499	第59図	図版20	土師器	小型丸底壺	2	河川1500北	341
500	第59図	図版20	土師器	小型丸底壺	2	河川1500北	458
501	第59図	図版20	土師器	小型丸底壺	2	河川1500北	342
502	第59図	—	土師器	無頸壺	2	河川1500北	278
503	第59図	図版20	土師器	椀	2	河川1500北	459
504	第59図	図版19	土師器	高坏	2	河川1500北	430
505	第59図	—	土師器	高坏	2	河川1500北	454
506	第59図	図版22	土師器	壺	2	河川1500北	259
507	第59図	図版22	土師器	甕	2	河川1500北	432
508	第59図	図版19	土師器	壺	2	河川1500北	448
509	第60図	図版19	土師器	高坏	2	河川1500南	474
510	第60図	—	土師器	高坏	2	河川1500南	379
511	第60図	—	土師器	器台	2	河川1500南	378
512	第60図	—	土師器	丸底壺	2	河川1500南	415
513	第60図	図版20	土師器	小型丸底壺	2	河川1500南	406
514	第60図	図版20	土師器	小型丸底壺	2	河川1500南	405
515	第60図	—	土師器	壺	2	河川1500南	457
516	第60図	図版20	土師器	小壺	2	河川1500南	456
517	第60図	図版20	土師器	小型丸底壺	2	河川1500南	340
518	第60図	図版20	土師器	ミニチュア壺	2	河川1500南	403
519	第60図	—	土師器	壺	2	河川1500南	772
520	第60図	図版22	土師器	甕	2	河川1500南	395
521	第60図	図版22	土師器	甕	2	河川1500南	298
522	第60図	—	土師器	壺	2	河川1500南	770
523	第60図	—	土師器	壺	2	河川1500南	280
524	第60図	図版23	土師器	壺	2	河川1500南	777
525	第60図	—	土師器	壺	2	河川1500南	325
526	第60図	—	土師器	甕	2	河川1500南	780
527	第60図	図版23	弥生土器	無頸壺	2	河川1500南	418
528	第60図	図版23	弥生土器	壺	2	河川1500南	407
529	第60図	図版23	土師器	小鉢	2	河川1500南	416
530	第60図	—	土師器	手づくね土器	2	河川1500南	744
531	第60図	図版20	製塩土器	丸底	2	河川1500南	767
532	第60図	—	製塩土器	丸底	2	河川1500南	748
533	第60図	図版21	土師器	有孔鉢	2	河川1500南	775
534	第60図	図版21	土師器	有孔鉢	2	河川1500南	776
535	第60図	図版23	土師器	甕	2	河川1500南	778
536	第60図	図版23	土師器	鉢	2	河川1500南	779

番号	挿図	図版	種類	器種	地区	遺構名	実測番号
537	第60図	—	製塩土器	丸底	2	河川1500南	749
538	第60図	図版20	製塩土器	丸底	2	河川1500南	746
539	第60図	—	製塩土器	丸底	2	河川1500南	747
540	第60図	図版20	製塩土器	丸底	2	河川1500南	745
541	第60図	図版20	製塩土器	脚台	2	河川1500南	417
542	第60図	図版20	製塩土器	脚台	2	河川1500南	404
543	第60図	—	須恵器	杯蓋	2	河川1500南	590
544	第60図	—	須恵器	杯身	2	河川1500南	450
545	第60図	—	須恵器	杯身	2	河川1500南	449
546	第60図	—	須恵器	高杯	2	河川1500南	452
547	第60図	図版21	須恵器	椀	2	河川1500南	607
548	第60図	図版21	須恵器	椀	2	河川1500南	679
549	第60図	図版21	須恵器	椀	2	河川1500南	606
550	第60図	—	須恵器	壺	2	河川1500南	460
551	第60図	—	須恵器	甕	2	河川1500南	414
552	第61図	—	土師器	高坏	2	河川1694	299
553	第61図	—	土師器	高坏	2	河川1694	455
554	第61図	—	土師器	高坏	2	河川1694	283
555	第61図	—	土師器	高坏	3	河川1694	376
556	第61図	—	土師器	高坏	2	河川1694	300
557	第61図	—	土師器	高坏	2	河川1694	350
558	第61図	—	土師器	高坏	2	河川1694	297
559	第61図	—	土師器	高坏	3	河川1694	374
560	第61図	—	土師器	高坏	3	河川1694	464
561	第61図	—	土師器	高坏	2	河川1694	281
562	第61図	—	土師器	高坏	2	河川1694	284
563	第61図	—	土師器	高坏	2	河川1694	282
564	第61図	—	土師器	高坏	2	河川1694	381
565	第61図	—	土師器	高坏	2	河川1694	380
566	第61図	—	土師器	高坏	3	河川1694	377
567	第61図	図版19	土師器	高坏	3	河川1694	346
568	第61図	—	土師器	高坏	3	河川1694	375
569	第61図	—	土師器	高坏	2	河川1694	781
570	第61図	図版23	土師器	小壺	2	河川1694	782
571	第61図	図版21	土師器	有孔土器	3	河川1694	784
572	第61図	図版20	製塩土器	脚台	3	河川1694	743
573	第61図	図版20	製塩土器	脚台	2	河川1694	279
574	第61図	図版20	製塩土器	脚台	3	河川1694	741
575	第61図	図版20	製塩土器	脚台	3	河川1694	627
576	第61図	—	製塩土器	脚台	3	河川1694	626
577	第61図	—	土師器	壺		河川1694	783
578	第61図	図版23	土師器	甕	2	河川1694	785
579	第61図	図版20	土師器	壺	2	河川1694	742
580	第61図	図版20	土師器	小型丸底壺	2	河川1694	277
581	第61図	図版20	土師器	小型丸底壺	3	河川1694	461
582	第61図	図版20	土師器	小型丸底壺	2	河川1694	351
583	第61図	—	土師器	小型丸底壺	2	河川1694	431
584	第61図	—	土師器	小型丸底壺	3	河川1694	462
585	第61図	図版20	土師器	小型丸底壺	2	河川1694	301
586	第61図	図版20	土師器	小型丸底壺	3	河川1694	345
587	第61図	—	土師器	壺	2	河川1694	352
588	第61図	図版20	土師器	丸底壺	2	河川1694	343
589	第61図	図版23	土師器	不明土器	2	河川1694	287
590	第62図	—	土師器	二重口縁壺	3	河川1694	628
591	第62図	図版23	土師器	壺	3	河川1694	786
592	第62図	—	土師器	二重口縁壺	2	河川1694	382
593	第62図	—	土師器	甕	2	河川1694	276
594	第62図	図版22	土師器	甕	2	河川1694	349
595	第62図	—	土師器	甕	2	河川1694	339
596	第62図	図版22	土師器	壺	2	河川1694	257
597	第62図	図版22	土師器	甕	2	河川1694	394
598	第62図	図版22	土師器	甕	2	河川1694	393
599	第62図	図版22	土師器	甕	2	河川1694	392
600	第62図	—	土師器	甕	3	河川1694	463
601	第62図	—	土師器	甕	2	河川1694	383
602	第62図	—	土師器	甕	2	河川1694	384
603	第62図	図版22	土師器	甕	2	河川1694	258
604	第63図	—	須恵器	杯身	2	土坑1696	587
605	第63図	—	須恵器	杯身	2	土坑1696	585
606	第63図	—	須恵器	杯身	2	土坑1696	588
607	第63図	—	須恵器	杯身	2	土坑1696	586
608	第63図	—	須恵器	高杯	2	土坑1696	599
609	第63図	—	須恵器	高杯	2	土坑1696	596
610	第63図	図版23	須恵器	壺	2	土坑1696	603
611	第63図	図版23	須恵器	はそう	2	土坑1696	605
612	第63図	図版21	須恵器	椀	2	土坑1696	773
613	第63図	図版23	須恵器	はそう	3	河川1694	621
614	第63図	図版23	須恵器	はそう	2·3	河川1694	604

番号	挿図	図版	種類	器種	地区	遺構名	実測番号
615	第63図	図版21	須恵器	把手付椀	3	河川1694	618
616	第63図	図版20	須恵器	把手	2	河川1694	762
617	第63図	—	須恵器	杯蓋	2	河川1694	593
618	第63図	—	須恵器	杯蓋	2	河川1694	592
619	第63図	—	須恵器	杯蓋	3	河川1694	564
620	第63図	—	須恵器	杯蓋	2	河川1694	591
621	第63図	—	須恵器	杯蓋	3	河川1694	563
622	第63図	—	須恵器	杯蓋	3	河川1694	570
623	第63図	—	須恵器	杯蓋	2･3	河川1694	565
624	第63図	—	須恵器	杯蓋	3	河川1694	568
625	第63図	—	須恵器	杯蓋	3	河川1694	569
626	第63図	図版21	須恵器	高杯	2	河川1694	598
627	第63図	—	須恵器	高杯	2･3	河川1694	611
628	第63図	—	須恵器	高杯	2	河川1694	610
629	第63図	—	須恵器	高杯	3	河川1694	612
630	第63図	—	須恵器	高杯	2･3	河川1694	609
631	第63図	—	須恵器	高杯	2	河川1694	595
632	第63図	—	須恵器	高杯	2	河川1694	594
633	第63図	—	須恵器	高杯	3	河川1694	613
634	第63図	—	須恵器	高杯	3	河川1694	615
635	第63図	—	須恵器	高杯	2･3	河川1694	534
636	第63図	—	須恵器	高杯	3	河川1694	620
637	第63図	—	須恵器	高杯	2･3	河川1694	533
638	第63図	—	須恵器	高杯	2･3	河川1694	535
639	第63図	—	須恵器	高杯	2･3	河川1694	536
640	第63図	図版22	須恵器	甕	3	河川1694	571
641	第63図	図版22	須恵器	甕	2･3	河川1694	625
642	第63図	図版22	須恵器	壺	3	河川1694	623
643	第64図	図版17	土師器	高坏	2	溝1867	55
644	第64図	図版17	製塩土器	脚台	2	溝1867	58
645	第64図	図版17	須恵器	甕	2	溝1867	727
646	第64図	図版17	須恵器	杯蓋	2	溝1867	56
647	第64図	—	須恵器	杯身	2	溝1693	589
648	第64図	—	須恵器	高杯脚	3	溝1693	614
649	第64図	図版23	須恵器	はそう	3	溝1693	617
650	第64図	—	須恵器	壺	2	溝1693	671
651	第64図	—	土師器	高坏	2	溝1693	789
652	第64図	図版23	土師器	小型器台	2	溝1693	791
653	第64図	図版23	土師器	小型器台	2	溝1693	790
654	第64図	図版20	製塩土器	脚台	2	溝1693	451
655	第64図	—	須恵器	杯身	3	河川1692	566
656	第64図	—	須恵器	杯身	3	河川1692	567
657	第64図	図版21	須恵器	把手付椀	3	河川1692	619
658	第64図	—	須恵器	高杯	3	河川1692	616
659	第64図	図版23	須恵器	はそう	3	河川1692.	622
660	第64図	—	土師器	甕	3	河川1692	787
661	第64図	—	土師器	高坏	3	河川1692	788
662	第64図	図版21	須恵器	器台	3	河川1694	656
663	第64図	図版21	須恵器	器台	3	河川1692	540
664	第64図	—	須恵器	器台	3	河川1692	541
665	第64図	図版21	須恵器	器台	2･3	河川1694	542
666	第64図	図版21	須恵器	器台	2･3	河川1694	532
667	第64図	図版21	須恵器	器台	2･3	河川1694	531
668	第64図	図版21	須恵器	器台	2	河川1694	537
669	第64図	図版21	須恵器	器台	2	河川1694	538
670	第64図	図版21	須恵器	器台	2･3	河川1694	539
671	第64図	図版22	須恵器	甕	2･3	土坑1696	608
672	第65図	図版22	須恵器	大甕	3	河川1694	527
673	第65図	図版22	須恵器	大甕	2	土坑1696	528
674	第66図	図版26	石器	叩き石	1	河川1500	227
675	第66図	図版26	石器	叩き石	1	河川1500	226
676	第66図	図版26	石器	叩き石	2	河川1500南	225
677	第66図	図版26	石器	叩き石	1	河川1500	228
678	第66図	図版26	石器	叩き石	1	河川1500	241
679	第66図	図版26	石器	叩き石	1	包含層	235
680	第66図	図版26	石器	叩き石	3	河川1694	827
681	第66図	図版26	石器	叩き石	2	包含層	239
682	第66図	図版26	石器	すり石	1	河川1500	224
683	第66図	図版26	石器	砥石	2	河川1500南	453
684	第66図	図版26	石器	砥石	2	河川1500南	391
685	第66図	図版26	石器	砥石	1	河川1500	242
686	第66図	図版26	石器	砥石	1	河川1500	243
687	第66図	図版26	石器	砥石	1	河川1500	229
688	第66図	図版26	石器	砥石・叩き石	3	溝1693	348
689	第66図	図版26	石器	砥石	3	河川1692	245
690	第67図	巻頭図版b.	石製品	滑石製臼玉	1	河川1500	187
691	第67図	巻頭図版b.	石製品	滑石製臼玉	1	河川1500	188
692	第67図	巻頭図版b.	石製品	滑石製臼玉	1	河川1500	190

番号	挿図	図版	種類	器種	地区	遺構名	実測番号
693	第67図	巻頭図版b.	石製品	滑石製臼玉	1	河川1500	191
694	第67図	巻頭図版b.	石製品	滑石製臼玉	1	河川1500	192
695	第67図	巻頭図版b.	石製品	滑石製臼玉	1	河川1500	193
696	第67図	巻頭図版b.	石製品	滑石製臼玉	1	河川1500	194
697	第67図	巻頭図版b.	石製品	滑石製臼玉	1	河川1500	195
698	第67図	巻頭図版b.	石製品	滑石製臼玉	1	河川1500	196
699	第67図	巻頭図版b.	石製品	滑石製臼玉	1	河川1500	197
700~710	第67図	巻頭図版b.	石製品	滑石製臼玉	1	河川1500	201~211
711	第67図	巻頭図版b.	石製品	滑石製臼玉	3	河川1692	198
712	第67図	巻頭図版b.	石製品	滑石製臼玉	3	河川1692	199
713	第67図	巻頭図版b.	石製品	滑石製臼玉	3	河川1692	200
714	第67図	巻頭図版b.	石製品	滑石製臼玉	3	河川1694	189
715	第67図	巻頭図版b.	石製品	滑石製管玉	1	竪穴住居1480	174
716	第67図	—	石製品	剥片	1	竪穴住居1511	173
717	第67図	巻頭図版b.	石製品	有孔円板	1	竪穴住居1480	171
718	第67図	巻頭図版b.	石製品	有孔円板	1	河川1500	172
719	第67図	巻頭図版b.	石製品	紡錘車	1	河川1500	170
720	第67図	—	石器	剥片	3	包含層	178
721	第67図	—	石器	剥片	3	包含層	176
722	第67図	—	石器	剥片	3	包含層	179
723	第67図	—	石器	剥片	3	包含層	175
724	第67図	—	石器	剥片	3	包含層	177
725	第67図	図版26	石器	スクレイパー	3	包含層	824
726	第67図	—	石器	旧石器・剥片	1	包含層	181
727	第67図	図版26	石器	剥片	1	河川1500	472
728	第67図	図版26	石器	楔形石器	1	河川1500	180
729	第67図	図版26	石器	旧石器・剥片	1	包含層	182
730	第67図	巻頭図版c.	石器	スクレイパー	2	河川1500北	184
731	第67図	巻頭図版c.	石器	スクレイパー	3	包含層	183
732	第67図	巻頭図版c.	石器	磨製石剣	4	包含層	825
733	—	巻頭図版a.	石材	グリーンタフ	2	河川1500南	680
734	—	図版25	石材	緑泥片岩		河川1500	—
735	—	図版25	石材	白石		河川	—
736	—	図版25	石材	白石		河川	—
737	—	図版25	石材	紅簾片岩		河川	—
740	第68図	図版24	鉄関連	鉄滓	1	河川1500	792
741	第68図	図版24	鉄関連	鉄滓	1	河川1500	809
742	第68図	図版24	鉄関連	鉄滓	1	河川1500	793
743	第68図	図版24	鉄関連	鉄滓	1	河川1500	807
744	第68図	図版24	鉄関連	鉄滓	1	河川1500	805
745	第68図	図版24	鉄関連	鉄滓	1	河川1500	802
746	第68図	図版24	鉄関連	鉄滓	1	河川1500	803
747	第68図	図版24	鉄関連	鉄滓	1	河川1500	810
748	第68図		鉄関連	鉄滓	1	河川1500	801
749	第68図		鉄関連	鉄滓	5	大溝	800
750	第68図		鉄関連	鉄滓	1	河川1500	808
751	第68図	図版24	鉄関連	鉄滓	1	河川1500	799
752	第68図	図版24	鉄関連	鉄滓	1	河川1500	811
753	第68図	図版24	鉄関連	鉄滓	1	河川1500	797
754	第68図	図版24	鉄関連	鉄滓	1	河川1500	812
755	第68図	図版24	鉄関連	鉄滓	1	河川1500	806
756	第68図	図版24	鉄関連	鉄滓	1	河川1500	804
757	第68図		鉄関連	鉄滓	3	河川1694	795
758	第68図		鉄関連	鉄滓	1	河川1500	796
759	第68図	図版24	鉄関連	鉄滓	1	遺構946	794
760	第68図	図版24	鉄関連	鉄滓	1	河川1500	798
761	第69図	図版24	土製品	鞴羽口	5	大溝	815
762	第69図	図版24	土製品	鞴羽口	5	大溝	814
763	第69図	図版24	土製品	鞴羽口	1	河川1500	821
764	第69図	図版24	土製品	鞴羽口	1	河川1500	819
765	第69図	図版24	土製品	鞴羽口	3	河川1692	820
766	第69図	図版24	土製品	鞴羽口	5	大溝	813
767	第69図	図版24	土製品	鞴羽口	1	河川1500	816
768	第69図	図版24	土製品	鞴羽口	3	河川1692	818
769	第70図	図版25	石材	軽石	3	河川1694	822
257	第70図	図版25	鉄製品	鋳造鉄斧	1	焼土坑1507	817
—	—	—		馬歯	1	竪穴住居1511	

報 告 書 抄 録

ふりがな	てらだいせき
書名	寺田遺跡
副書名	
巻次	
シリーズ名	大阪府埋蔵文化財調査報告
シリーズ番号	2006－7
編集著者名	杉本清美・藤沢眞依・小山田宏一
編集機関	大阪府教育委員会
所在地	〒540－0008　大阪府大阪市中央区大手前2丁目
発行年月日	2007年3月30日

ふりがな	ふりがな	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
所収遺跡名	所在地	市町村	遺跡番号					
寺田遺跡	大阪府和泉市寺田町	27219	131	34°47′	135°43′	04年8月9日～05年3月25日	3,038㎡	府営和泉寺田住宅建て替えに伴う発掘調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
寺山遺跡	集落跡	古墳時代	竪穴住居・掘立柱建物・河川跡・井戸・焼土坑・溝ほか	須恵器・土師器・朝鮮半島系土器・製塩土器・管玉・臼玉・砥石　ほか	古墳時代以降の集落跡を確認。河川跡から大量の土器（須恵器・土師器）が出土。

要　約

寺田遺跡は、平成14年に実施された試掘調査で新たに発見された遺跡である。今回の発掘調査で、古墳時代前期から後期の竪穴住居と掘立柱建物で構成される集落跡を確認した。集落域を面すると考えられる河川跡を検出し、河川内から大量の遺物(朝鮮半島系土器、鍛冶関連遺物、須恵器、土師器など)が出土した。

大阪府埋蔵文化財調査報告2006－7

寺　田　遺　跡

発　行　大阪府教育委員会
〒540－0008
大阪市中央区大手谷町２丁目
TEL 06－6941－0351(代)
発行日　2007年３月30日
印　刷　㈱近畿印刷センター
〒582－0001
柏原市本郷５丁目６－25

図　　版

図版1　調査区全景

a．調査区全景（航空写真）

b．1区上面鋤溝全景（航空写真）

a．河川検出状況（東から）

b．河川1500内大型壺検出状況（西から）

c．1区　東壁断面

d．3区西半部　西壁断面

f．5区　大溝断面（東から）

e．5区　東壁断面

g．5区　焼土層（竪穴住居523）（北西から）

h．5区　大溝肩部遺物出土状況（北西から）

i．5区　全景（西から）

e．1区　満957～2区　満1633(北西から)

a．1区　掘立柱建物1（北から）

f．1区　建P－1265(東から)

b．1区　掘立柱建物2（北から）

g．1区　建P－1483(南西から)

h．1区　建P－1392(北東から)

c．1区　掘立柱建物3（東から）

d．1区　掘立柱建物5（北から）

i．1区　建P－1892(西北から)

j．1区　建P－426(北東から)

a．1区　竪穴住居検出状況（北から）

b．1区　竪穴住居1382（北東から）

c．1区　竪穴住居1480（北から）

d．1区　竪穴住居1480内遺物出土状況（南から）

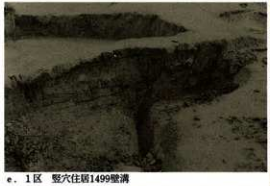
e．1区　竪穴住居1480内出土遺物

f．1区　土坑1376（北から）

g．1区　竪穴住居1281（北から）

h．1区　竪穴住居1489（東から）

b．1区　竪穴住居1511内遺物出土状況（南東から）


e．1区　竪穴住居1499壁溝

f．1区　竪穴住居1499内出土遺物（南から）

g．1区　竪穴住居1499内石敷遺構（南から）

h．1区　竪穴住居571断面①（北西から）

i．1区　竪穴住居571断面②（南から）

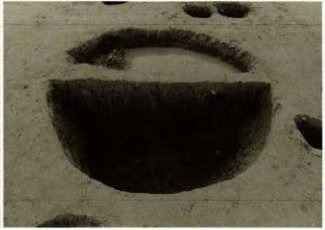
a．1区　竪穴住居1511（東から）

c．1区　竪穴住居1499（北から）

d．1区　竪穴住居1499内焼土層（南から）

j．1区　円形竪穴住居（北から）

a．1区　井戸588(北から)


b．1区　井戸1617(北西から)

e．1区　P－1220出土遺物（南から）

c．1区　河川1500断面①（南から）

f．1区　P－1354出土遺物（南から）

d．1区　河川1500断面②（東から）

g．1区　P－1503出土遺物（南から）

h．1区　P－623出土遺物（北から）

i．1区　P－1351遺物出土状況（北から）

j．1区　竪穴住居1499内遺物出土状況（西から）

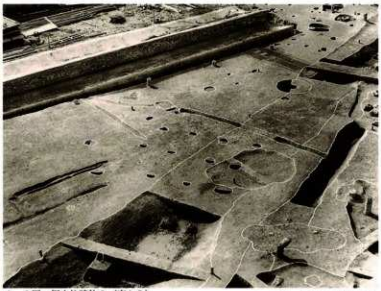
a．2区　溝1633・1695(南西から)

b．2区　溝1633(南西から)

e．2区　P－1962(南から)

c．2区　掘立柱建物7（北東から）

f．2区　井戸1838(西南から)


d．2区　掘立柱建物8（東から）

g．2区　井戸1957(南から)

i．2区　井戸1726(南から)

h．2区　井戸1908(西から)

a．2区 焼土坑1841(北から)

b．2区 焼土坑1966(西から)

c．2区 焼土坑1839(北から)

d．2区 焼土坑1866(南から)

e．2区 焼土坑1961(北東から)

f．2区 焼土坑1696(南西から)

i．3区 井戸1802(南から)

g．3区 掘立柱建物9（南東から）

j．3区 井戸1799(西から)

h．3区 井戸1818(東から)

k．3区 柵列1654付遺物出土状況（南から）

a．3区　溝1867断面（東から）

b．3区　溝1693断面（西北から）

c．3区　河川1694断面（西北から）

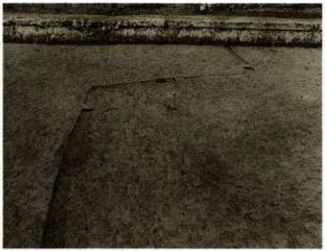
d．3区　河川1692断面（西北から）

e．1区　下層河川断面①（南東から）

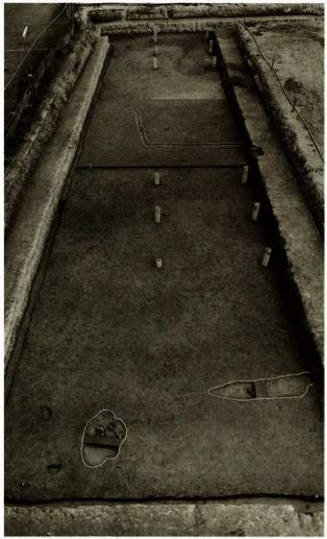
f．1区　下層河川断面②（南西から）

a．3区東　上面全景（西から）

c．3区東　SD1638検出状況（南から）



d．3区東　SD1638完掘状況（南から）



b．3区東　下面全景（西から）

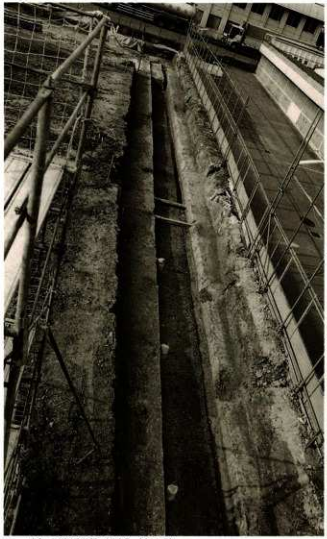
e．3区東　下面検出状況（SD1508）（西から）

f．3区東　下面検出状況（SD1509）（西から）

a．4区　調査区全景（南側）（北から）

c．4区　SK1501検出状況（南から）

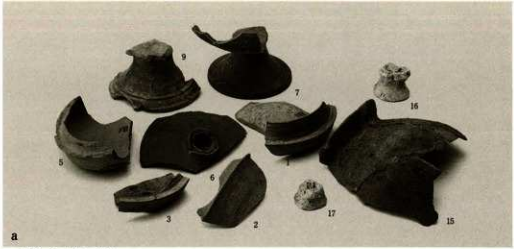
d．4区　SK1501遺物出土状況（南から）



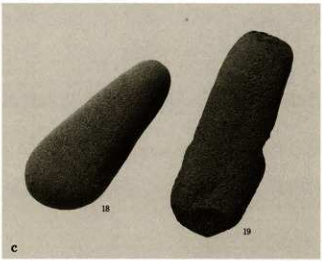
b．4区　調査区全景（北側）（南から）

e．4区　SK1338・1498・1387（南から）

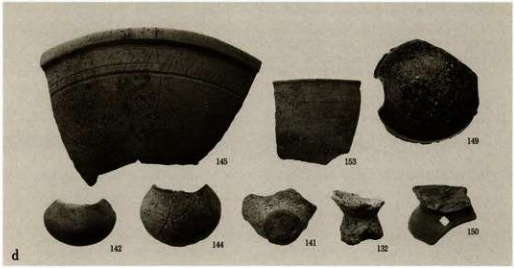
f．4区　SD1445（西から）



a．5区　P－549・大溝



b．c．5区　大溝



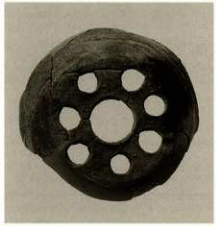
d．1区　遺構内

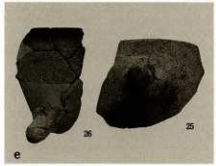
e．1区　河川上層遺構

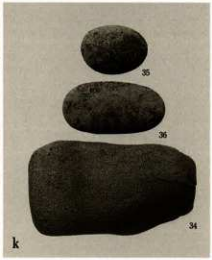
a. 1区 P−1021

b. 1区 P−1616

c. 1区 P−1345

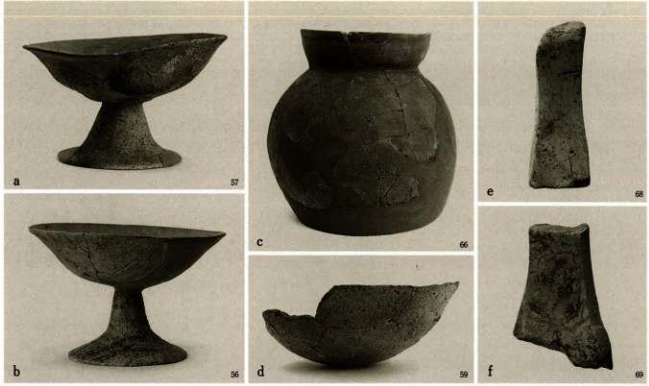


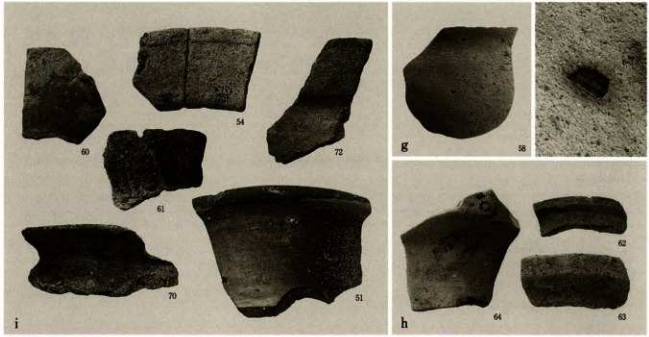




d.～K. 1区 竪穴住居1480

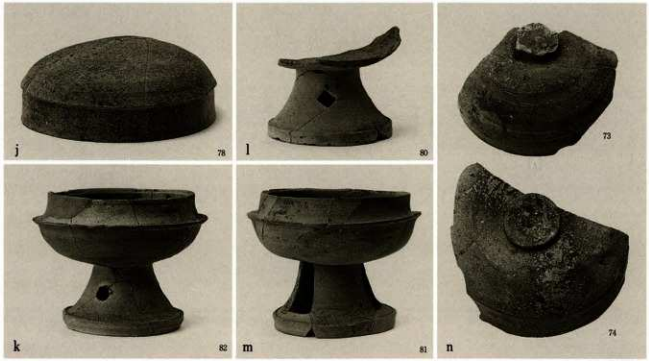
l.～n. 1区 竪穴住居1382



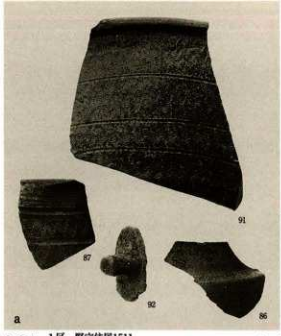


i．1区　竪穴住居内

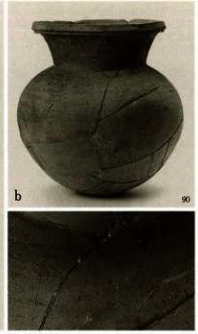
a.～h．1区　竪穴住居1499



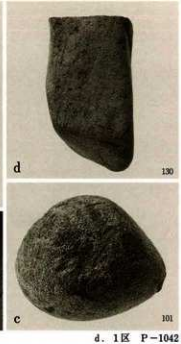
j.～n．1区　竪穴住居1511



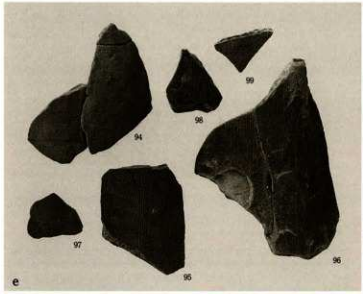
a.～c. 1区　竪穴住居1511

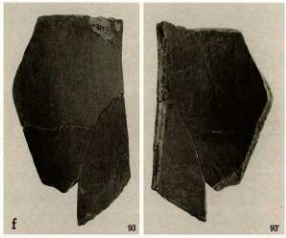


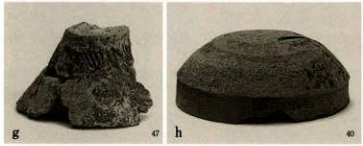
e. f. 1区　竪穴住居1511



d. 1区　P－1042

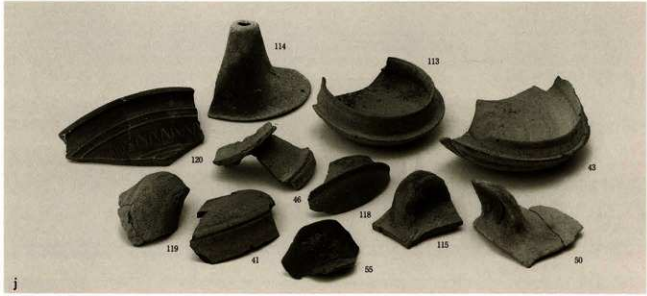






g. 1区　竪穴住居1489　　h. 1区　竪穴住居571

i. 1区　P－1663



j. 1区　竪穴住居内

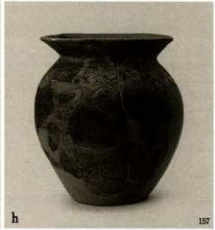
a. 1区 竪穴住居内

b. 1区 P−581　c. 1区 P−1645

d. 1区 P−623

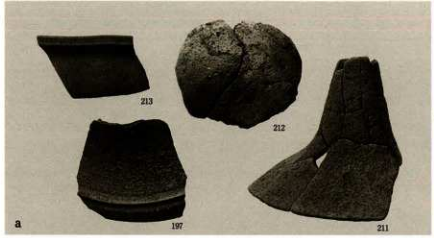
e. 1区 P−1503

f. 1区 P−1353



g. h. 1区 P−1562

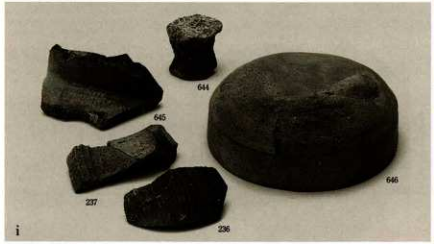
i.～n. 2区 焼土坑1966



a．2区　焼土坑1840・1843・1909

b．2区　焼土坑1841

c．2区　焼土坑1963・1733・土坑1865・1696



i．2区　溝1633・1867

d．2区　焼土坑1966　　e．2区　焼土坑1909

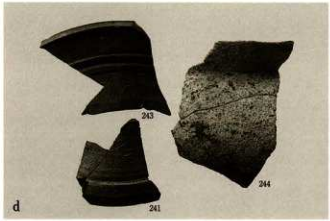
f．g．2区　焼土坑1963

h．2区　焼土坑1841

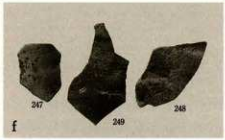
j．2区　溝1867

k．2区　建P－1948・1861

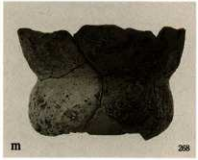
a.～c. 2区 井戸1957



h. 3区 井戸1802・建P－1752

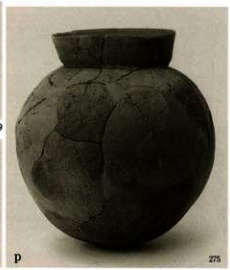


d.～g. 2区 井戸1726



i.～k. 3区 井戸1799

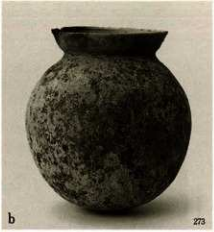
l.～o. 3区 井戸1802



p. 3区 P－1753

図版19　3区・河川内出土遺物

a　270


b　273

e　277

c　271

d　276

f　279

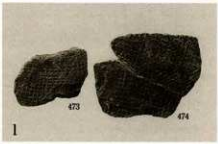
g　392

h　394

k　442

i　437

j　425


473
474
l

m　282

n　509

p　291

o　504

r　567

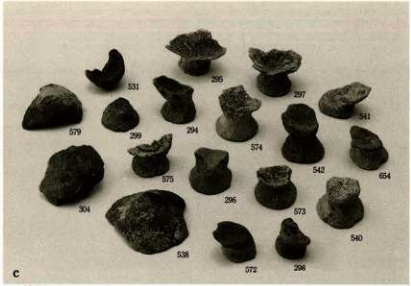
q　508

a.～c.　3区　井戸1838

d.～f.　3区　井戸1509

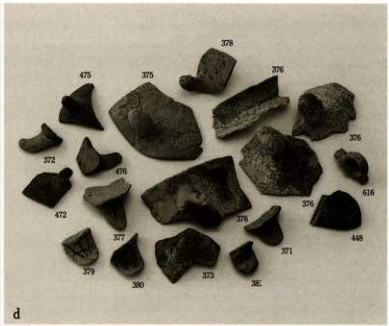
g.～r.　河川内遺物

a．河川1500



c．製塩土器

b．河川1500

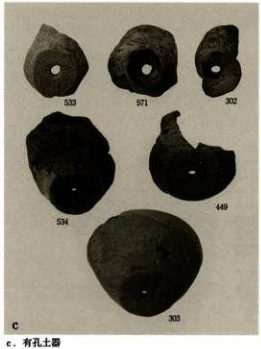


d．把手

e．土師器（壺・甕）

a．須恵器（高杯）

b．須恵器（器台）



c．有孔土器

d．須恵器（椀）

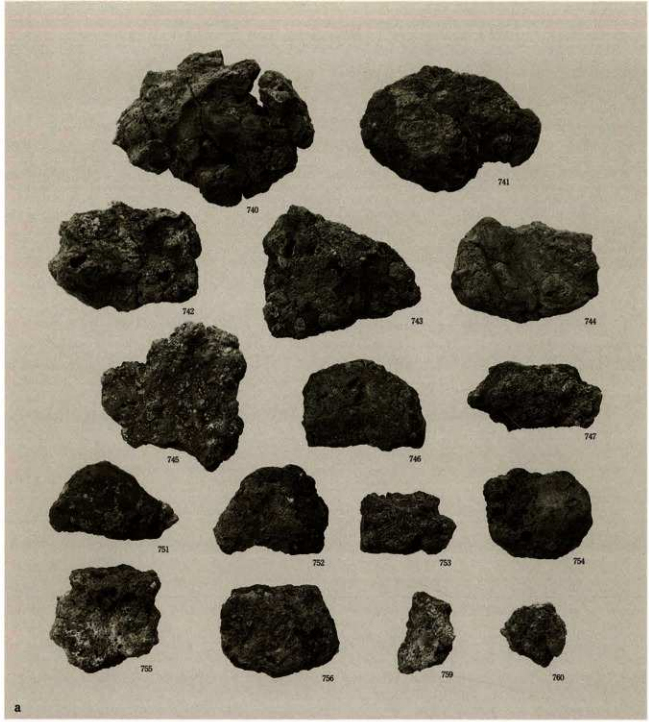
a．土師器（壺・甕）

b．須恵器（壺・甕）

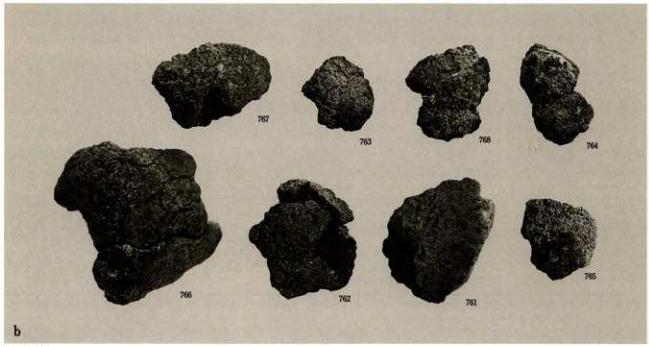
a．須恵器（甕・壺）

b．下層河川

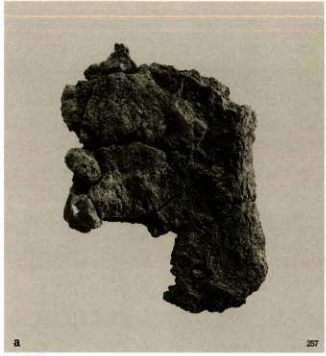
c．河川内遺物


740
741
742
743
744
745
746
747
751
752
753
754
755
756
759
760
a

a．鉄滓


767
763
768
764
766
762
761
765
b

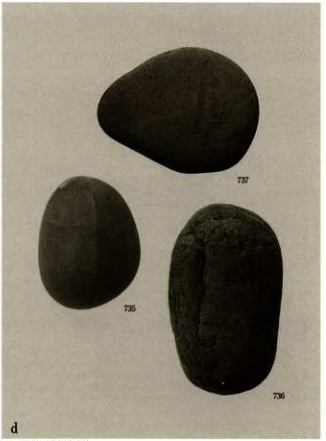
b．鞴羽口



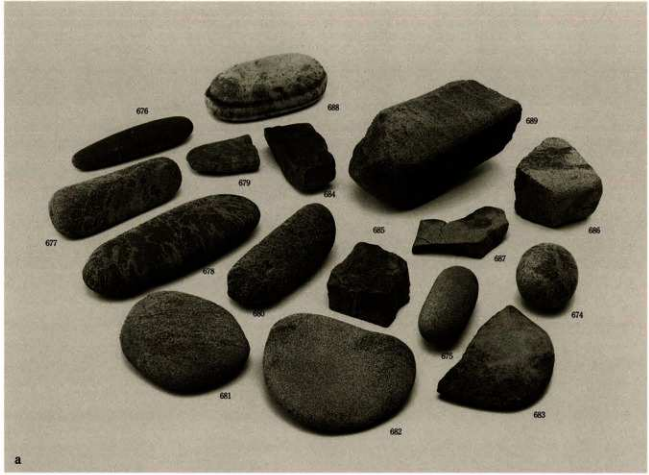
a．鉄斧

b．軽石

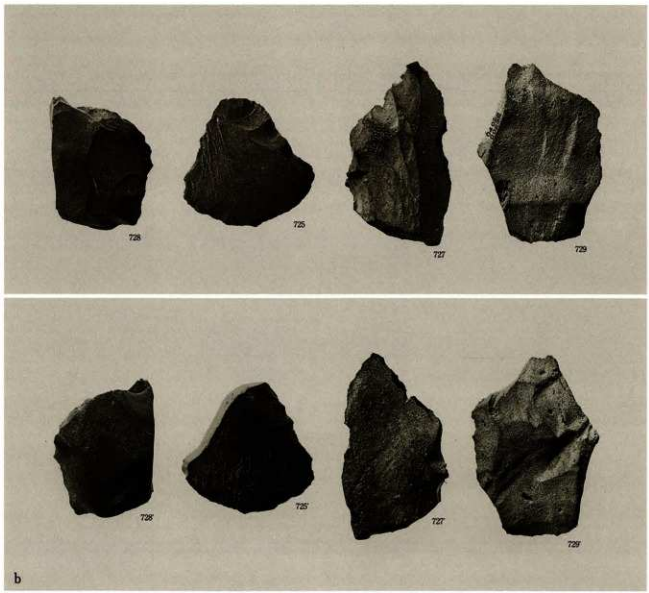
c．緑泥片岩



d．白石・紅廉片岩



a．石製品（叩き石・砥石他）



b．石器